第１６回教育委員会（定）

開会日時　　令和５年　　７月　２７日（木）　　午前　１０時００分
閉会日時　　午後　　５時０４分
開会場所　　教育支援センター

出　　席　　者

教　育　長	中　川　修　一	
委　　員	高　野　佐紀子	
委　　員	青　木　義　男	
委　　員	長　沼　　豊	
委　　員	野　田　義　博	

出席事務局職員

事務局次長	水　野　博　史	地域教育力担当部長	雨　谷　周　治
教育総務課長	諸　橋　達　昭	学　務　課　長	金　子　和　也
指　導　室　長	氣　田　眞由美	新しい学校づくり課長	柏　田　　真
学校配置調整担当課長	早　川　和　宏	施設整備担当副参事	伊　東　龍一郎
生涯学習課長	太　田　弘　晃	地域教育力推進課長	高　木　翔　平
教育支援センター所長	石　野　良　惠	中央図書館長	松　崎　英　司

署　名　委　員

教育長

委　員

午前　１０時　００分　開会

教　育　長　　おはようございます。本日は、４名の委員の出席を得ましたので、委員会は成立しております。

それでは、ただいまから、令和５年第１６回の教育委員会を開催いたします。

本日の会議に出席する職員は、水野次長、雨谷地域教育力担当部長、諸橋教育総務課長、金子学務課長、氣田指導室長、柏田新しい学校づくり課長、早川学校配置調整担当課長、伊東施設整備担当副参事、太田生涯学習課長、石野教育支援センター所長、松崎中央図書館長、以上１１名でございます。

高木地域教育力推進課長は、業務の都合上、午後からの出席になります。

本日の議事録署名委員は、会議規則第２９条により野田委員にお願いいたします。

本日の委員会は２５名から傍聴の申し出がなされており、会議規則第３０条により許可しましたので、お知らせいたします。

本日の会議時間は、板橋区教育委員会会議規則第１１条に基づき、通常は正午までのところを午後５時までと変更いたします。

なお、本日は長時間の審議になるため、出席職員は、業務の都合上、会議を中座することがございますことをあらかじめご了承ください。

また、議事の運営の都合上、この後、１１時５５分辺りをめどに午前の審議とし、休憩を挟み、午後の審議を進めてまいります。

○議事

日程第一　議案第４４号　令和６年度区立小・中学校使用教科用図書の採択について

（指導室）

教　育　長　　それでは、議事に入ります。日程第一　議案第４４号「令和６年度区立小・中学校使用教科用図書の採択について」について審議します。指導室長から説明願います。

指導室長　　それでは、よろしくお願いいたします。ご説明させていただきます。

公立学校において使用する教科用図書の採択は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第２１条第６号によりまして、所管の教育委員会が行うこととなっており、義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律施行令第１４条において、当該教科用図書を使用する年度の前年度の８月３１日までに行わなければならないと定められております。また、採択した教科用図書は、種目ごとに、４年間は同一の教科書を使用することになっております。

中学校は令和２年度に採択替えが行われ、令和３年度から新しい教科用図書を使用しておりますので、令和６年度まで継続して使用いたします。

今年度は小学校の採択替えを行う年度となっております。なお、特別支援学級においては、学校教育法附則第９条及び同法施行規則第１３９条に基づき、検定済み教科用図書または文部科学省著作教科書を使用することが適当でない場合は、

他の適切な教科用図書を使用することができるとされており、毎年度、採択できることとなっております。

今年度は、採択事項（１）令和６年度区立中学校使用教科用図書、採択事項（２）令和６年度区立小学校使用教科用図書、採択事項（３）令和６年度特別支援学級使用教科用図書を採択していただきます。

事務局で採択一覧（案）を作成いたしましたので、資料１をご覧ください。

発行社名が記入されている種目につきましては、令和５年度に引き続き、令和６年度から使用する教科用図書として採択していただきます。発行社名が空欄の種目につきましては、今年度、採択替えを行います。

次に、特別支援学級で使用する教科用図書につきましては、資料２の東京都が調査研究した教科用図書及び資料３の文部科学省著作教科書と、当区の教科用図書調査委員会が調査研究しました教科用図書、そして、それ以外で区立小・中学校が調査研究した教科用図書について採択をしていただきます。

説明は以上でございます。

教　育　長　　ありがとうございました。まず、採択事項（１）令和６年度区立中学校使用教科用図書について審議します。

指導室長から説明願います。

指 導 室 長　　区立中学校の教科用図書につきましては、令和２年度に採択替えを行いましたので、原則に基づきまして、来年度も現在使用している教科用図書と同じものを採択していただきます。

以上でございます。

教　育　長　　それでは、審議に入ります。質疑意見等ございましたらご発言ください。

よろしいでしょうか

（なし）

教　育　長　　それでは、お諮りします。採択事項（１）令和６年度区立中学校使用教科用図書については、令和２年度に採択した教科用図書を使用します。令和２年度に採択した教科用図書は次のとおりでございます。

「国語」、三省堂、「書写」、三省堂、「社会（地理的分野）」、教育出版、「社会（歴史的分野）」、教育出版、「社会（公民的分野）」、日本文教出版、「地図」、帝国書院、「数学」、東京書籍、「理科」、東京書籍、「音楽（一般）」、教育出版、「音楽（器楽合奏）」、教育出版、「美術」、日本文教出版、「保健体育」、大修館書店、「技術・家庭（技術分野）」、東京書籍、「技術・家庭（家庭分野）」、東京書籍、「英語」、東京書籍、「道徳」、日本文教出版。

以上を採択することに、ご異議ございませんでしょうか。

（異議なし）

教　育　長　　それでは、そのように決定いたします。
　次に、採択事項（２）令和６年度区立小学校使用教科用図書について審議します。
　指導室長から説明願います。

指 導 室 長　　区立小学校につきましては、今年度、前回の採択替えから４年経ちますので、採択替えを行います。
　なお、令和４年度の文部科学省の検定を合格しました教科用図書は、１１教科、１３種目、５４種類でございました。ただし、信州教育出版が発行する、「理科」「生活」の教科用図書につきましては、調査研究のために必要な見本本が都内の教育委員会には送付されないため、調査研究できませんでした。
　それでは、種目ごとに審議をお願いいたします。

教　育　長　　審議に入る前に、ここで進行に関してお諮りいたします。
　審議に関しては、種目ごとに仮採択とし、全ての種目の審議が終了後、全種目を一括して本採択として決定することにご異議ございませんか。

（異議なし）

教　育　長　　それでは、まず、「国語」の審議に入ります。

指 導 室 長　　「国語」につきましては、３社でございます。東京書籍、教育出版、光村図書出版から採択をお願いします。

教　育　長　　それでは、審議に入ります。質疑、ご意見等ございましたらご発言ください。
　では、高野委員にお願いします。

高 野 委 員　　まず、今回、教科書を採択するに当たって、私は、全ての教科書の、まず巻頭のページにあります「学習の進め方」というところを見ながら教科書を読み進めてまいりました。
　授業の中で子どもたちが今どのような授業を行っているのかを、主体的に自分で意識しながら進められること、そしてまた、家庭に帰ったときも、教科書を使って子どもたちが家庭で自分の力で教科書を使って学習できること、そういうことを目的として、学習の進め方が分かりやすいものを選んでいきたいと思いました。
　国語に関しては、３社それぞれ、学習の流れが明確化されていて、資料のページも、各社、充実していました。
　その中で、東京書籍は、巻頭に国語の学習の進め方が示されているとともに、

単元の始めと終わりに、児童の学習の流れを「見通す」「取り組む」「振り返る」と示して、学習方法を明確にしております。

他の２社は単元の終わりに学習の流れが示されておりますが、東京書籍は最初と終わりに示すことで、児童や教師が学習の流れを意識しながら進めていける点が大変よいと思いました。

６年の４６ページのところを少しご覧いただきたいと思うのですが、ここで、６年の「イースター島にはなぜ森林がないのか」というところなのですが、最初のページに学習の流れが青い括弧で囲まれて書かれています。

そして、ここからずっと本文を読んでいただいて、５６ページのところに、「この学習の流れに沿った筆者の論の進め方を捉えよう」というところがあります。

ここで書かれていた取組み方、一つ一つについて、詳しく、どういう点を注意しながら見ればいいのかということを学習の流れに沿って考えさせています。

このような点が、東京書籍の学習の進め方の中で大変いい点だと思いました。

また、単元の終わりに「振り返る」の「生かそう」というところがありますが、例えば２年上の３８ページ、たんぽぽでは、生活科の「野菜の育て方」、それから、５年の１６０ページの「和の文化を受け継ぐ」というところでは、社会科や総合的な学習につながっています。

この流れは、板橋区授業スタンダードに沿った構成で、学習したことを活用する方法が示され、他の教科への学習が生かされるように工夫されています。

あともう１つ、大きく東京書籍で他の教科書と違ってすばらしいなと思ったのは、１年生では子どもたちがつまずきやすい特殊音節について詳しく扱っています。

１年上の「ねことねっこ」というところで、まず、５８ページに促音、小さい「っ」のときには手を握る、また、６６ページ、長音、伸ばす音のときには手をたたいて下に下ろす、７６ページ、拗音、ねじれる音では手を握ってたたくという、手をたたいたり、握ったりする図が表記されていて、視覚的にイメージしやすい工夫がされています。

実際に、１年生の授業で、子どもたちがこの動作をしながら繰り返し練習している様子を見ましたが、分かりやすく楽しく学ぶことができていました。

また、この教科書を使い始めて、最初のころと比べて、今年は先生方もこのやり方に大変慣れてきたという感じがいたしました。この点が東京書籍はとてもいいなと思いました。

あと、その他にも、３年生以上では、巻頭にデジタルノートの作り方が掲載されていて、図や表を使って整理したり、まとめたりする方法が、発達段階に合わせて紹介されています。

また、巻末の付録では、「デジタル資料を活用しよう」があり、１人１台端末を活用するための工夫がされていて大変よいと思いました

あと、もう１社、光村図書です。読むことの学習では、「とらえよう」「深めよう」「まとめよう」「広げよう」という学習の流れが示されているので、児童

が学習の見通しが持てるようになっています。

また、単元の最後にある「大切」はポイントを絞った簡潔な言葉で表現されており、学習の要点を確認することができます。

６年の２３０ページ。「資料を使って魅力的なスピーチをしよう」の単元では、資料を活用して自分の思いや考えを効果的に伝えるために、資料作りや言葉の選び方が大切だというふうに書いています。

あと、光村図書出版の他の会社と比べてよいなと思った点は、説明する文章についてです。

説明する文章では、３年生以上で、初めに見開き２ページの短い文章を練習して、初め、中、終わりに分けて読んでいきます。

長い文章全体の構成や段落も中心を捉えながら読んでいき、難しい説明文が読めるように工夫されている点が大変いいと思います。

３年上の５３ページ、「こまを楽しむ」というところでは、練習で、文様を見開き２ページで、それから、その後、本文６ページを読んでいきます。また、各学年のこれまでの学習の巻頭ページで、前の学年で学んだことを確認しながら、読んでいきます。

この３年生の場合でしたら、１０ページに説明する文章というところがあるのですが、２年生では、説明する文章で、順序を表すことに気をつけようということで、「まず」「次に」「それから」など、順序を表す言葉があったねというふうに前の学年を振り返っています。

このように、前の学年を振り返りながら、短い文章で練習した後、長い文章を読むことを繰り返して学習することで、６年間を通して難しい説明文が読めるように工夫されている点が大変すばらしいと思いました。

また、５年の２２８ページの「大造じいさんとがん」では、他の会社もこの「大造じいさんとがん」を取り上げているのですが、前書きがあって、内容把握のための工夫がされています。

お話の世界に誘うような前書きを読んで、子どもたちがこのお話の背景を知りながら、興味を持って本文に入っていけるのではないかと思いました。

以上、私は、東京書籍、それから、あと光村図書出版がいいではないかと思いました。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、青木委員、お願いいたします。

青 木 委 員　　私も３社の中で、色々見ていった中では、まず、全体的に非常に工夫されているというところが、いずれも学習の流れが分かりやすい形で示されているというところです。

それから、注目したのが、今やはり大事になってきているのが、主体的・対話的で深い学び、これが一人一人の生徒・児童に伝わるような教科書が大事だと注目したところでございます。３社とも、この辺のところは十分検討されていると

ころです。

あと、東京書籍や教育出版については、ＳＤＧｓの観点から、環境教育に関連する教材として様々なテーマを取り上げているというところが注目されます。

例えば東京書籍であれば、６年生の１７０ページの「発信しよう、私たちのＳＤＧｓ」、教育出版であれば、６年生上巻の「雪は新しいエネルギー」等がこれに該当するものかと思います。

また、一方、全体的に注目する中では、ユニバーサルデザインのダイバーシティ推進の関係で、ここも重要だというふうに思いました。これは、３社ともかなり工夫がなされているというところで、これもよろしいかなと思いました。

それと、一人一人が、ＧＩＧＡスクール構想ということで、タブレットをランドセルに入れて持ち歩くというところもありますので、教科書の重さというところも気になります。

教育出版は全ての学年が分冊、それから、東京書籍と光村図書出版は、５年、６年が１冊になっている。全部、分冊になっていないというところですが、これはもう５、６年、上級生になると多少重くてもというところで、あまりこの５、６年が合冊になっていても気にならないのかなというところは思いました。

あと、特徴的だったのは、光村図書出版で、教科書の部分部分に、他の教科との連携という意味合いでしょうか、プログラミング的思考を育むような題材が盛り込まれているというのが、少し注目すべきところだったと感じております。

あとは、教科書を見ながら、親しみやすいキャラクターというのを導入しているところ、これは東京書籍、教育出版等も入れていますが、どちらもこの辺は生徒・児童にとって親しみやすいというところでよろしいのかなというふうに思いました。

この辺を含めてなのですが、やはり最初に申し上げた主体的・対話的学び、深い学び、これを一人一人にという中で進めている点。

あと、板橋としては読み解く力の育成というところに非常に重点を置いている。ここは国語の教科書では非常に重要だというところも踏まえまして、私は全体の流れとして、東京書籍さんと教育出版さんがよろしいのかなというふうに思いました。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

それでは長沼委員、お願いいたします。

長沼委員　　まず、国語だけでなくて、全体に関わることとして、どのように私が採択に臨んだかについて簡単にお伝えいたします。

学校教育をめぐる状況の中で、前回の採択時、これは４年前ですが、そこから変わったことは何かということに着目しました。

まず、大きなこととしては、コロナ禍が襲ってきたということで、その中で、学校教育が本質的な学びをどうするのかということを問われたということ。

そして、これはかなり大きいのですが、令和３年１月２６日の中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育の構築をめざして」、サブテーマが「～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」、この答申に書かれていることはかなり今後重視されてきますので、このことをしっかり踏まえているかどうかということはかなり重視しました。

具体的に申し上げると、まず、学びについては、このサブテーマにもある「個別最適な学び」、ここには指導の個別化と学習の個性化というのが書かれていますので、先生方が取組みやすい、あるいは、子どもが１人でも取り組める、あるいは、特性の強いお子さんでも取り組めることというと、家に持ち帰って保護者の皆さんのサポートがあって取り組める、このようなことも配慮されているかどうかが大きなポイントになりました。

それから、協働的な学びの方は、既に主体的・対話的で深い学びの対話的な学びになっていますので、前回の４年前のものも既に入っていますが、よりグループ学習ができるものとか、そのようなことがやりやすい課題が網羅されているかどうかというのもポイントかと思いました。

そして、何と言いましても、ＧＩＧＡスクール構想が前倒しされて、これはコロナ禍の影響ですが、１人１台端末がもう入っているという中で、端末も併せて使いやすいかどうかということがポイントとなります。

併せて、学校における働き方改革の推進が重視されてきていますので、先生方にとって使いやすい、それから、これは全国的にもそうですが、若い先生がかなり増えて、経験の少ない先生でもしっかりと使いこなせるかどうかということもポイントになろうかと思います。この点はなかなか難しいのですが、先生方からのヒアリングでも、一方で、あまり詳しくなってしまうと、ベテランの先生は、「いやいや、少し待ってよ。そこまで書くのか」と、「私が発問するところまで書かれてしまってどうなのかな」という懸念もあるのですが、全体から見ると、やはり若い先生でも使いやすい丁寧な作りというのが求められるのだろうというふうに思います。

ここまでは全国共通なのですが、板橋特有ということで言うと、例えば２つ大きく、区全体として非常に評価されていることがあります。

１つは「ＳＤＧｓの推進」ということで、これは日本経済新聞社が調べたＳＤＧｓの推進度で、しっかり取り組んでいる自治体ということで、板橋区は全国８位、都内では１位で、区全体で環境のことも含めて、地球に優しいということを推進している自治体ですので、教育の中でもこのＳＤＧｓをちゃんと意識しているかどうかというのも、かなり大きなポイントになろうかと思います。

２つ目は、「子育てしやすい街」ということで、これも日本経済新聞社の調査で、全国８位、都内では３位ということで、いわゆるファミリー層に支持されていて、子育てがしやすいという評価を受けています。

こうなってくると、やはり保護者の皆さんにとっても、子どもたちを育てていく上で、保護者の方から見てもすばらしい教科書になっているかどうかということも目が離せないのだろうと思います。

その意味では、区民アンケートも今回たくさんいただいて、１９６件ございましたが、全部読みました。その中で保護者の皆さんが書かれていることも参考にしながら、国語だけでなく、全ての教科の選択にあたったということが前提になります。

さて、国語でございますが、青木委員もおっしゃっていましたが、板橋区では読み解く力ということを大変重視して取り組んでいるところですので、まさにこの国語という教科は読み解く力の要と言ってもいい、そういう教科だと思います。

そのことを、指導しやすい、子どもたちが学びやすいかどうかという視点でも見ました。

それから、さらに言うと、板橋区では授業スタンダードということで、これも全校、小学校・中学校で取り組んでいます。見通しを持って取り組む、めあてを掲げて、そして振り返りに至るまでのプロセスをきちんとした形で先生方が取組み、子どもたちも主体的に学んでいく、そのスタイルもかなり現場の先生方のご努力で確立してきたと思います。このことがしっかりと、やりやすいかどうかですね。その意味で言うと、まず、東京書籍は、この「見通す」「取り組む」「振り返る」というプロセスをしっかり掲げていて、高野委員もおっしゃっていましたが、全体の単元の最初のところにそれをきちんと掲げているところで、先生方も指導がしやすいのではないかと思います。

子どもたちにとっても、見通しを持って教材に入っていける、取り組んでいけるという教材かと思います。

さらに、先ほど申し上げた協働的な学びということでは、例えば６年生の１４ページ、１５ページのところに、「たずね合って考えよう」というページがあります。

ここにきちんと対話形式で、このページは何のために国語を勉強するのだろうという問いなのですが、このように協働的な学びが進むような仕掛けがあります。これは随所にございます。このような工夫があることと、それから、先ほど申し上げたＧＩＧＡスクール構想の絡みで言うと、５年生の１２ページから１３ページのところに「デジタルノートの作り方」というページがあります。これは５年生のフィードバックのような、こういうものも取り入れている。

さらに、それをデジタルノートとしてまとめていくという手法も掲げられていて、しっかり読み解きながら、さらにこれをクラスで共有することで学びが深まっている。主体的・対話的な深い学びが進んでいくという工夫があります。このようなこともかなり工夫されているなという印象を持ちました。

それから、教育出版さんは、国語だけじゃなくて、特徴的にこの会社さんはＳＤＧｓにかなり力を入れているということが見てとれます。

青木委員もおっしゃっていましたが、５、６年生に関しては、上下巻、別々になっているということと、それから、今申し上げたＳＤＧｓの工夫ですか、これも随所に掲げられているというところが非常に分かりやすかったということです。

さらに、例えばですけど、６年生の上巻の９６ページのところを見ると、「相手の思いを考えながら聞こう」というような取組があって、ここでも対話的な学

び、あるいは協働的な学びが進むような仕組みが共有されているという工夫があってよかったなと思いました。

光村図書出版さんは、ここも同じで、６年生、例えば１０２ページを見ますと、協働的な学びの視点でいきますと、対話の練習ということがありまして、「一番大事なものは」という教材なのですが、ここでも、しっかり机をくっつけて、グループ学習の形にして考えを伝え合うということを丁寧にできるように工夫されていて、こういうところも細やかな配慮があって、先生方も、若い先生方、経験年数が少ない先生方でもしっかりと協働的な学びをすることができるということが顕著でした。

ということで、３社が良いです。前回に比べて手法、方法論も含めて、非常に似てきているので、迷ってしまったところでありますが、総合的に見ますと、現在使っている東京書籍さんがかなり使いやすいだろうと思います。

あともう１つと言われれば、教育出版さんが分冊になっているということとか、ＳＤＧｓの配慮がなされているということで、この２社を推したいと思います。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

それでは、野田委員、お願いします。

野 田 委 員　　よろしくお願いいたします。

まず初めに、私が、今回、この教科書の選定に対して、全教科、共通して考えていった元となることにつきまして、現在使われている教科書並びに教科用図書調査委員会の調査研究報告書と学校調査研究報告書、区民アンケート、また、現場での教員の先生方、これは調査の前までに各学校に訪問したりとかしている間に使われている状況を拝見して、そのようなものを参考にして、また、私、保護者の立場から、家庭での活用について、家庭学習や自学自習の教材としての使い方も視野に入れてまいりました。

特にこのコロナ禍で、コロナの最初の頃の学校に行けないときなど家庭学習が盛んに行われたことにより、保護者の教科書に対する意識というものが大分深く向いてきたのではないかと感じておりまして、保護者の目に教科書が触れる機会というのが多くなったという印象を受けております。

そのようなところを視野に入れて、各社の教科書を拝見させていただきました。また、その区民アンケートなどの内容から、教科書の重さについての議論もありましたが、実際に子どもたちの様子、荷物の重さ、そのようなものも、自分で持ってみて体験したりとかしながら考えてきたというところと、現在、学校現場では学校に教科書を置くスペースが確保されてきて、教科書を毎日必ずランドセルに入れて持ち運ぶといったことも少し軽減されてきて、学校に教科書を置いて帰るというような状況も鑑みまして、この分冊についても検討いたしました。

それでは、国語につきましてですが、審査の観点といたしましては、板橋区授業スタンダードに沿った流れになっているのか、単元ごとに学習の見通しの立て

やすさ、そして、読み解く力の育成について、１年生においては、その指導モデル、ＭＩＭ学習について、２年次以降につきましては、説明文、物語文のバランスなどの教科書全体の構成についてを主なポイントとして拝見しました。

細かい点につきましては、これまでの委員の皆様のご意見にもありましたとおり、各社ともに、同じような改善、検討がされておりますので、また、この後の議論の中で必要に応じてコメントさせていただければと思います。

国語につきまして、私の方からは東京書籍を推薦したいと思っております。

先に申し上げました観点から、教科書の構成につきまして、板橋区授業スタンダードに沿った形で構成され、特にこれから身につけていただきたい、まとめ、振り返り、アウトプットについて、教科書で学習したことを今後の学習につなげやすい表記になっているところが１つの評価ポイントになりました。

また、その内容につきまして、１年生のＭＩＭについてです。ＭＩＭは板橋区が教育で推進している１つの重要な事項でありまして、保幼小接続の観点からも重要な単元であります。

保育園、幼稚園での読み聞かせや、歌で耳からインプットしてきた言葉や行為を、１年生に入って音と動作でしっかりと定着させて、その後の学びにつなげやすい内容となっているように見受けられました。

また、フォントについても、若干、太目になっているなど、読みやすくなるような工夫がされていて、学校で初めて文字に触れていく１年生にとって読みやすい表記となっているように感じました。

２年次以降の学年においては、私の方は特に説明文に着目いたしました。説明文は、論理的読解に当たって、近年の入試問題などでも広く取り上げられています。そこには他教科の要素でもある図やグラフを読み取って文章を理解する力、そのような考え方、学習の流れとして、順序立てて学べる構成、そのような構成になっているように感じました。

また、筆者の主張に対する説明を読み解くための考え方、ここが重要だと思うのですが、そのようなところが分かりやすく表記されていました。

まとめますと、板橋区授業スタンダードに沿った流れで構成されて、今後の学習につなげやすい表記になっている。

１年生では、ＭＩＭ学習について、視覚的、動作的に、児童に分かりやすい解説がある。

２年次以降、論理的読解力をつけるための説明文と、文学的読解力の物語文がバランスよく学習できるような量になっている。そして、筆者の主張に対する説明を読み解くための考え方が分かりやすく表記されている。

全学年を通じて、学習を見通せる資料や記事が巻頭に大きく取り上げられており、子どもたちが個別最適な学びに向けた学習の目標を意識しやすい内容が今回の評価ポイントとなりました。

以上になります。

教　育　長　　ありがとうございました。

それでは、私の方から幾つかお話をしたいと思いますが、もう委員の皆さんがおっしゃっているように、学習の流れの最初のところが非常に分かりやすくなっているのかなと思いますし、巻末の資料も充実しているなというふうに思っています。

私が、これも教科書を採択する際に、次の事項に絞り込んで検討しているのですが、その１つが、子どもたちが教科書を使って１人で学んでいくと考えた場合、自学自習、どれがいいのか。

教科書を用いて教科書で学ぶというのが本区の１つの大きな授業スタイルをめざしているというところでは、子どもたちの自学自習のための分かりやすい教科書、そのためには、多少、やはり丁寧な内容が必要になってくるだろうというふうに思っています。

２つ目は、板橋区授業スタンダードに沿った事業展開のしやすさということで、本時あるいは本単元の狙いが明記され、１人学び、友達との関わり、みんなでのまとめ、そして振り返りというものが意識されているのかどうかという点が２点目です。

３点目は、読み解く力、リーディングスキルの育成と語彙の質と量の確保ということで、また、多層指導モデル、ＭＩＭとリーディングスキルテスト、リーディングスキル、このようなことについてどうなのかということを見ました。

また、語彙の整理、単語や文法、文節等、配置の工夫がされているのかどうか、教科書の構成に配慮をして見ました。

それから、先ほど長沼委員からもありましたように、新規採用教員がどんどん入ってくる時代、しかも、倍率を見ると、少し不安になるような状況の中で、やはり使いやすさ、あるいは教えやすさ、ある程度教科書通りに教えていけば子どもたちが理解できる、そのような内容の教科書を選択したいなというふうに思いました。

また、タブレットの持ち帰りで、これも皆様のお声からもありましたが、特に低学年では教科書は軽い方がよいという点から、分冊も配慮事項の１つとなるのではないかというふうなことも考えたところでございます。

国語は３社ございましたが、光村図書出版については、「問いを持とう」とあり、自ら問いを持ち、自己調整しながら学べるようにしてありました。また、身につける資質・能力を大切にイメージされていました。

それから、６年生の２０５ページに、「考える」という単元では、３人の著者の文章が載せられ、比較して考えるような構成となっており、子どもたちが考えやすいような工夫が見られました。また、日本語の特徴を英語や他言語と比較してよく分かるようになっています。読む、書く、話す、聞くの領域が明確にされており、各単元との関係性、系統性が明らかになっているというふうな感想を持ちました。

また、教育出版については、読む、書く、話す、聞くの領域が明確にされており、各単元との関係性、系統性が明らかになっています。

また、６年生の２２ページ、「考えを図や表に」という単元においては、他教

科にもつながる重要な内容であるというふうに考えています。

同様に、３０ページには、学力調査等で誤答の多い主語と述語の関係を、主語と述語の対応を確認しようとして扱っている。これはとても重要で、学力調査の結果から必ず出てくる、欠点というか、ポイントを補強する意味ではとても重要なものだと思いました。

また、文章と資料を合わせて読み、筆者の考えを捉える単元が組み込まれています。言葉の広場が有効的に配置されているというふうに思いました。

また、本文の後の「確かめよう」「詳しく読もう」「まとめよう」「伝え合おう」が分かりやすく、先生方の指導や子どもたちの学習に役立つのではないかとも思いました。

最後に、東京書籍ですが、本区がこれまで取り組んでいる読み解く力の向上を支えるアセスメントは、ＭＩＭとリーディングスキルテストの２つです。

特に低学年用アセスメントとしてここ数年活用し、授業改善に活かしているＭＩＭを基に教材化しているのは東京書籍だけであります。

先ほど高野委員からもご指摘ありましたように、各ページに、１年生の上巻をご覧いただくと分かるように、小さい「っ」の音、５８ページで、先ほどから出ているように、音と、それから動作でしっかりと理解をさせていく。

それから、６６ページには、長音、伸ばす音、さらには、７６ページには、拗音といったようなことが行われています。これは現実的に各学校でも実際に行われていて、評価が高まっているのではないかというふうに思いました。

そして、言葉を獲得するための学習の進め方を、「見通す」「取り組む」「振り返る」「生かそう」と、系統性のある内容となっています。

単元で身につけたい言葉の力と学習の流れが示されているので、子どもたちは見通しを持ちやすいように思いました。

手引きの中に、発言例、あるいは学習用語、ノート例などがあって参考になるなというふうに思いました。

各単元の導入場面での学習意欲と見通しを重視してある。系統立った単元配列で言葉の力を獲得できるようにしてあります。語彙と文法に特化してある言葉相談室が分かりやすく参考になるなというふうに思いました。

１、２年生の教材では、語句のまとまりを捉えやすくするために、文節改行をしてありました。

また、高学年では、新聞記事やインタビューなどの資料との関係づけを意識した教材が多く掲載してありました。

そして、ＧＩＧＡスクールとの関係では、作者からのメッセージ動画や資料解説動画など、教材に応じて学習に役立つＱＲコンテンツが用意されています。

端末の付録に「デジタル資料を活用しよう」が掲載されており、児童が主体的に学習できるように工夫されています。

このようなメリットを生かすということで、私としても東京書籍を推薦したいというふうに思っております。

以上で、皆様方のご意見を伺いましたところ、５人の方から東京書籍、２名の

方から教育出版、１名の方から光村図書出版というような形になりました。
「国語」については、東京書籍を仮採択することにご異議ございませんでしょうか。

（異議なし）

教　育　長　　それでは、「国語」については東京書籍を仮採択することといたします。
では、次に、「書写」の審議に入ります。指導室長から説明してください。

指 導 室 長　　「書写」につきましては、３社ございます。東京書籍、教育出版、光村図書出版から採択をお願いいたします。

教　育　長　　それでは、審議に入ります。質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。
では、高野委員、お願いします。

高 野 委 員　　書写については、各社とも、巻頭に鉛筆や筆の持ち方、書くときの姿勢が写真やイラストを使って分かりやすく示されています。また、各社それぞれ、書写の学び方、書写の進め方として、1単位時間の流れが把握できる工程となって、大変分かりやすくなっています。
それぞれ、国語の授業と合わせた指導となっているということなので、私は国語で、今、仮採択となりました東京書籍がよいのではないかと思います。
東京書籍は、１単位時間当たり、見開き２ページで構成されていて、右側のページに学習のポイント、左側にお手本が示されて、大変使いやすくなっています。
また、始筆、送筆、終筆に応じて、「トン」「スー」「ピタ」など、筆遣いを音声化しています。
筆の動かし方や力の入れ具合が、子どもたちにとって分かりやすくなっているのではないかと思います。
あと、書写の学び方として、「見つけよう」「確かめよう」「生かそう」「振り返ろう」という学習の流れが設定されているので、板橋区授業スタンダードに沿って、主体的に学習に取り組めるようになっています。
２年生では連絡帳の書き方や、また、３年生では実験記録、４年生では新聞作りなど、他の学習や日常生活につながる生活に広げようという発展的な学習が設定されています。
以上の点で、私は書写については東京書籍を推薦したいと思います。

教　育　長　　ありがとうございました。
では、青木委員。

青 木 委 員　　書写につきましては、私が考えるのは、やはりこれは書写という学習を通して、自らの学習のみならず、仲間との違いを確認し合いながら、話し合って学んでい

くことが１つ重要なポイントになるのかなというふうに考えました。

高野委員も言われていましたけども、学習の進め方等については、こちらも３社とも十分に工夫されていて、板橋区授業スタンダードに沿ったものになっているというふうに考えております。また、色使いについても、３社とも色々な形で工夫がされているということ。

あと、少し特徴的だったのは、高野委員からもご指摘ありましたが、今の児童、子どもたちに分かりやすいという点で、オノマトペですね、「トン」「スー」「ピタ」ですとか、例えば教育出版では、「チュン」「ト」「トン」というような形で、音で分かりやすく伝えるようなところが非常によいポイントかなと思いました。

あと、大事なこととして、書写は色々な生活、これも高野委員からのお話があったとおり、生活に関連づけて学んでいくということが重要かと思います。

例えば東京書籍ですと、「生活に広げよう」というようなページ、それから、生活の中で使うことになろうかと思う、連絡帳の書き方、あるいはポスターの作り方など、他の学習、あるいは日常生活につながる学習といったものが盛り込まれているなというのが、やはり大事な部分かと思いました。

そのような意味で考えますと、東京書籍は、「生活に広げよう」のページ、それから、他の科目との連携、日常生活につながるような学習が盛り込まれている。

教育出版も、例えばリーフレットの作り方、手紙の書き方、原稿用紙の書き方、新聞の書き方等、生活に広がるような項目が盛り込まれていて、光村図書出版さんも、パンフレットの作り方、手紙の書き方、はがきの表書き等、それぞれ工夫されて盛り込まれていますが、全体を通じてこの意識が強い、さらには仲間との話し合いということの工夫がされているところが具体的に見えるのが、東京書籍さんは、３学年の２２ページに、仲間との違いというのを話し合ったりする活動というのが具体的に設定されていまして、自らの学びの中の課題発見とか把握というのにつながるのかなという、最初の学び合いというところを意識されているという点が注目すべきところだったかなというふうに思います。

私も、国語の教科書との兼ね合いも含めてですが、東京書籍がよいのではないかと思いました。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

それでは、長沼委員、お願いします。

長 沼 委 員　　書写ですが、まず、東京書籍の教科書では、書写の学び方というのが、例えば６年生であれば、２、３ページに示されています。

１番目が「見つけよう」、２番目が「確かめよう」、３番目が「活かそう」、４番目が「振り返ろう」。

そして、これがいいなと思ったのですが、最後に「生活に広げよう」ということで、書写として完結するのではなくて、さらに他の教科の学習や生活に活かし

ていくという視点が加わるので、板橋区の授業スタンダードももちろん適合していますが、さらにこれが深まっていくような、そういう学び方が提示されているというのが、一番よかったです。

あとは、細かいことですが、先生方からのヒアリングの中で、お手本、いわゆる習字の部分のお手本が左側に統一されているということで、意外と細かいことではありますが、こういう工夫が先生方にとってはありがたいというご発言ありました。なるほどなと思ったのですが、その点は評価できるなと思いました。

教育出版さんは、国語のときも申し上げましたが、ＳＤＧｓの配慮とか、それから協働的な学びという意味では、例えば５年生の巻頭のところを見ますと、書いて伝えようということで、これも先生方のヒアリングでご指摘いただきましたが、模造紙にマジックで書いて、それをみんなで囲んで、協働的な学びとして、そういうこともぜひしましょうということが分かりやすく写真があって、こういうところが、書写は何か個人作業するようなイメージがありますが、いやいや、そうではないということが伝わってくる、考え方が示されているのはすばらしいと思いました。

それから、光村図書さんにつきましては、全学年で表紙はいいですね。また、例えば６年生の２０ページを見ますと、「みんなが使いやすい筆記具図鑑」というのを紹介されていて、これはユニバーサルデザインの発想なのですね。

書き方に関わる題材を扱っているのは書写なのですが、筆記具に着目して、さらにこのユニバーサルデザインの範囲で伝えるということが示されていることの工夫がとても見られました。

また、光村図書出版さんの特徴は、他の教科との関連というのがかなりきちんと各所に書かれていて、書写だけではなくて、他の教科との連携がしやすいということがすばらしいなと思っていました。

総合的に見ますと、国語との関係性もありますので、国語が東京書籍さんになるという前提に立つと、書写も東京書籍さんを推したいと思います。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

それでは、野田委員、お願いします。

野 田 委 員　　書写についてですが、評価の観点といたしましては、国語と同様になりますが、板橋区授業スタンダードに沿った流れになっているのか、単元ごとの学習の見通しの立てやすさ、特に書写については、お手本の見やすさを主なポイントとさせていただきました。

各社ともに、委員の皆様がおっしゃられているように、十分な検討がされておりまして、巻頭で学習の意味と目的が明確に表記されている。鉛筆の持ち方、筆の持ち方、字を書く姿勢、端末を使うときの視点など、イラストや大きな写真を用いて解説しているところはとても分かりやすい表記になっているというところが感じられました。

また、筆で書くことのよさ、これからの書写のあり方や、考え方の移り変わりなどを感じさせるような構成になっておりました。

今回、書写につきましては、私の方からも東京書籍を推薦したいと思います。

先に申し上げました観点から、教科書の構成につきましても、板橋区授業スタンダードに沿った形で構成されていて、あと、考える、話し合って自身の考えが正しいかを判断するという、そして、単元の終わりには「振り返る」といったところが設定されていて、このようなところは、書写においても授業スタンダードの流れに沿った構成になっているというところ、あと、振り返りについて、各文字の部分に、簡単に評価できるように、段階的に、簡潔に、自己評価できるようになっているポイントが非常によかったです。

書写の時間というのは、よく道具を出したりとか、色々、準備などに時間を取られて、最後にまとめの時間というのを取りにくいことがあるかと思うのですが、このような振り返りを必ず持つというところでは、簡潔に評価できるというところは評価のポイントになります。

内容につきましても、こういう視点については、学び方、自主学習の進め方という点で、国語の教科書との関連性が強いというところ。お手本を見て正しく書くという視点から、教科書に直接書くことができるスペースが用意されていて使いやすい。

また、国語の教科書との関連性が強いことから、同じ流れで学習の見通しを持てること、自主学習についても取組やすいということは、同時に授業の進めやすさや理解のしやすさが向上することが期待できます。

毛筆につきましては、筆遣いの音声化、筆の入れ方、力の入れ方についてお話がありましたが、同じように、「トン」「スー」「ピタ」などの工夫した表現が非常に児童にとって分かりやすいように解説されているのではないかと感じました。

また、この音声化、動作化によって、指導社の指導のしやすさにも十分な配慮がされているように感じましたので、こちらのポイントについては評価しております。

デジタルコンテンツについても設定がされていますので、自学自習、振り返りなどにも使えるのではないかと思いますし、授業の教員の使いやすさ、子どもの自主学習においての使いやすさというところが考慮されているように感じました。

巻末の学年の学習のまとめに加えて、１年生からの学習の振り返りというものが、書写の鍵として、各単元のポイントをまとめられているところがありました。このようなところは、これまでの学習を振り返ることができるようになっているということで、非常に便利なのではないかというところを感じました。

以上が、私の方からの主な評価のポイントとなりました。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、私の方ですが、本当に皆さんが今おっしゃっていたこととほとんど重複してしまう部分があるのですけども、３社とも、１単元、見開き２ページで、大

変見やすくできているなというふうに思いました。

また、教育出版については、各ページにコアとなる質問が載っていて、考えながら学ぶという姿勢が表れているなと思いました。「つかむ」「考える」「書く」「確かめる」「振り返る」「生かす」「広げる」、このような流れも各社共通の部分があるのかなというふうに思いました。

それから、光村図書出版については、大切マークというのがあって、大切な知識技能を習得できるように示していきます。指でなぞって気がついたことを話し合おうとか、よくできたところや気をつけるところを確かめようといったようなことが書かれてありました。

「謎解き」という表現で、考えながら学ぶという姿勢が表れていました。ここも「考えよう」「確かめよう」「生かそう」というようなことで、これも３社ともに、学んだことを生かそうということがしっかりと綴られているなというふうに思いました。

最後に、東京書籍ですが、これも国語の授業に合わせて学習するということも踏まえてですが、書き始めと書き終わり、硬筆、毛筆ともに音をうまく表しているなというふうに思いました。「形の違いを見つけよう」など、考えながら学ぶという姿勢が教科書に表れている。これも、３社ともそうですが、具体的な表現がなされていたなというふうに思いました。

それから、「見つけよう」「確かめよう」「生かそう」「振り返ろう」「生活に広げよう」、先ほど長沼委員がおっしゃっていただいたのですが、生活に広げようということが、きちんと目次の中に明記されていて、それが非常に大切な部分、つまり、ノートの書き方と観察カードとか、連絡帳を書こうとか、このような重要な他教科、あるいは日常の生活の中にも活かせる部分が、きちんと発達段階に応じて書かれてあるということがとても重要なことだなというふうに思いました。

そういう板橋区授業スタンダードに沿った内容、３社ともそれぞれ似ているようなところがあるのですが、そういう中で、国語の教科書との連動性ということで、私も東京書籍を推したいというふうに思っております。

それでは、書写については、東京書籍を仮採択することにご異議ございませんでしょうか。

（異議なし）

教　育　長　　それでは、「書写」については、東京書籍を仮採択することといたします。
では、次に、「社会」に入ります。指導室長から説明願います。

指 導 室 長　　「社会」につきましては、３社でございます。東京書籍、教育出版、日本文教出版から採択をお願いいたします。

教　育　長　　それでは、審議に入ります。質疑意見等ございましたらご発言ください。

高野委員、どうぞ。

高 野 委 員　社会科は、学習の流れが分かりやすく学習の見通しを持ちやすい、また、教科書を使って自学自習するのに適しているかどうかという視点で、３社の教科書を見比べてみました。

まず、私がいいと思ったのは教育出版です。教育出版は、単元を通して、「つかむ」「調べる」「まとめる」という流れになっていて、学習の見通しを持ちやすくなっています。

また、１単位時間が見開き２ページで構成されていて、１ページ目の「つかむ」でこの時間の問いが示されて、２ページ目の「次につなげよう」で簡潔に構成されています。児童でも分かりやすく、経験の浅い先生にも教えやすいのではないかと思いました。

また、「次につなげよう」は、振り返りの視点や、次の学習の意欲づけになるような工夫がされている点がよいと思いました。

３、４年生では、写真やグラフが大きく見やすくなっていて、グラフや地図の読み取り方が「読み取る」というコーナーにまとめられていて、知識、技能が習得できるように工夫されています。

５年の教科書の８２ページ、「米作りの盛んな地域」というところがあるのですが、ここでは米の生産量と消費量の変化のグラフが載っています。そして、この２つのグラフから関係性を読み取って、その理由を考えて、これからどうなっていくのかということを予想する問題となっています。

このようなグラフを比べながら、そこから理由を考え、また予想するという流れが読み解く力の育成につながるページになっているのではないかと思います。

あと、６年生の歴史学習の導入では、身近な選挙から、今と１００年前の時代に気づき、興味を持つことから歴史の学習がスタートします。

そして、７２ページのように、歴史の学び方のページを設けています。子どもたちは歴史の学習に興味を持ち、また、歴史の学習の仕方が分かる構成になっているのではないかと思います。

また、この６年の歴史編では、旧版の教科書では、特に近現代史において白黒写真だったものが、ほとんどの写真でカラーに修正されている点が大変よかったと思います。実際に他の教科書と比べてみると、大変分かりやすいなというふうに感じました。

また、３年生の１１４ページで、板橋区が題材として取り上げられています。

板橋区で起きた交通事故の件数の移り変わりや、また、交通事故でけがをした人の人数がグラフで示されています。

そして、１２０ページでは、子どもたちが大谷口交番でインタビューするというところが取り上げられています。このような身近なところが取り上げられていることで、子どもたちが社会の学習に興味を持って授業を受けられるのではないかなというふうに思いました。

あともう１社、東京書籍についてです。東京書籍は学習の流れが、「つかむ」

「調べる」「まとめる」という流れになっていて、学習の見通しが大変持ちやすくなっています。

４年の１２２ページとか、５年上の９０ページ、それから、５年の下の２２ページなど、まとめるという段階で、紙芝居にまとめるとか、新聞にまとめる、プレゼンテーションソフトを使ってまとめる、あとは６年の歴史の７４ページでは、調べたことを整理して、考えをまとめて話し合うなどと、具体的な例がたくさん取り上げられていて、まとめ方の例や表現の仕方が分かりやすく示されています。

また、「広げる」「生かす」といった発展的な内容が設定されています。

５年の下の１１２ページ、「環境を守るわたしたち」というところでは、鴨川の汚染について、ずっと変化について学習をしていきます。そして、この学習をした後に、最後、それが１２２ページの「広げる」で水俣の公害について学んでいきます。このような学習をしていったことを順序立てて考えながら、発展的な内容につなげている点が大変いいと思いました。

その他にも、「学び方コーナー」というのがあって、社会科の学習のために大切な学び方を紹介するコーナーがあります。

例えば３年の９７ページでは、図の読み取り方、５年上の４６ページでは、グラフの読み取り方、同じく５年上の２９ページでは、インターネットの活用など、たくさんの学び方を紹介するコーナーがあります。

６年生は歴史編と政治国際編の分冊となっています。先ほど各委員からの発言もありましたが、区民アンケートで、教科書の重さについてたくさんのご意見をいただいております。

東京書籍は５、６年が分冊となっているので、教科書の重さについて、少しですが軽減化されているところもいいのではないかと思いました。

以上、私は、教育出版、東京書籍について、いいなというふうに思いました。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、青木委員、お願いします。

青 木 委 員　　社会につきましては、３社とも色々工夫がなされている中で、これは教科書の作りとして非常に難しいのは、社会の動きについては様々な捉え方が恐らくあって、これを全て適切に表現するというのは若干難しい面もあろうかなと思いますが、３社とも、その点をある程度工夫されているというところが、今回、大きく見受けられた気がしました。

１つポイントとなったのは、板橋区としては「郷土愛を育む」という項目がございます。これを進める意味では、高野委員からもご指摘があった、やはり教科書の中に身近な板橋の記事等が盛り込まれていることが重要になります。

例えば教育出版では、３学年の「事件・事故からまちを守る」といったご紹介があったところかと思いますが、ここをやはり見たときに、区民アンケートの中でも非常に身近に感じたということで、社会としての捉え方に興味・関心を持つ１つのきっかけになるのかなというふうに思いました。

それからもう１つ、大事なポイントとして、他の科目とのつながりというところ、先ほど書写のところでも少しお話があったかと思うのですが、社会の中では、世の中の様々な動きを捉えるという中で、図やグラフという形、これも高野委員からご紹介があったと思うのですが、そのようなものを多く配置しているところがございます。

その中で、見方の説明、捉え方の説明、これらの適切な配置、それから、見せ方というのが、今、世の中で、これから文系、理系を問わず重要と言われているデータサイエンスにつながってくるわけですね。ここをやはり社会という科目の中でも意識することが非常に重要なのかなというふうに考えた次第です。

そのような意味では、教育出版さん、これはそこの図やグラフというところに個人的に注目してみると、かなり色々なグラフの表示の仕方が網羅されているということ。それに対しての説明、コメントといったようなことをキャラクターを使って表現していたりということ。

また、東京書籍さんは、そのようなところで、ポイントの説明、データサイエンス的に捉えるというようなところに踏み込んだ内容も注目すべきところかなというふうに思いました。

あと、見やすさの点ですとか、写真やグラフなども見やすいですとか、それから、日本文教出版さんは、「未来につなげる～わたしたちのＳＤＧｓ～」という単元で、これもこれから重要となるＳＤＧｓというのを捉えた後に、さらに発展につながるような項目として記載されている点が注目すべきところだったかなというふうに思います。

それぞれ、よいところ等々があるのですが、先ほど申しました全体的な社会と他の科目とのつながりというところ、これからの未来の子どもたち、何がというところも含めると、教育出版さん、それから、東京書籍さん辺りがよろしいのかなというふうに思いました。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございます。

それでは、長沼委員、お願いします。

長 沼 委 員　　社会科につきましては、板橋区の授業スタンダードからの観点、それからＳＤＧｓの観点など、総合的に見ますと、教育出版がふさわしいのかなと思って聞いておりました。

例えばですが、教育出版の場合は、どの学年も最初の５ページのところに、社会科で使う見方・考え方というページがありまして、この「見方・考え方」という言葉自体は現行の学習指導要領で、全ての教科で見方・考え方を用いて様々な学習活動を進めていくということが書かれているので、社会科に関して言うと、これがあることによって、経験年数の少ない先生方でも、社会科というのはどのように考えて学習を進めるのかということが明確に分かるようになっています。もちろん板橋の授業スタンダードにも適合する形でこれを用いることができると

いうのは、大変有益だなと思いました。

それから、ＳＤＧｓについては、国語のときも申し上げましたけども、教育出版さんは非常に力を入れていて、かなりページを割いて、どの学年にも、このＳＤＧｓに関わる内容が取り上げられています。

それから、これは他の委員さんからもご指摘があったとおり、３年生の１２０ページのところには、警察官のお仕事として板橋区の交番が出てきて、身近に感じることができるというのも非常に板橋としてはありがたいと思います。

区民アンケートに、恐らくこれは保護者の方だと思いますが、「見慣れた場所や自治会の取組が載っていて、とても嬉しく思いました」と、「特に子ども見守り隊や自治会の方のお話が書かれていたことは、子どもたちの地域への愛着が高まると思います」というご回答がありました。それもそのとおりだなと思いました。

あとは、板橋区を取り上げているということでは、日本文教出版さんの３年生の９２、９３ページなのですが、ここでＳＤＧｓに絡めて、フードロスの問題について取り上げられています。

これも大変魅力的で、板橋区の子どもたちがこれを読んで、板橋区はちゃんとＳＤＧｓに取り組んでいいなと思ってくれるとありがたいなと思いますので、ここは少しポイントになったところでした。

あと、少し他の委員さんと違う視点で比べてみたのですが、歴史の中で、例えばということで比較をしただけなのですが、資料の分かりやすさということでいきますと、それぞれ各出版社さん、様々な形で工夫されてはいたのですが、例えば鎌倉幕府のところ、鎌倉の地形が、なぜ頼朝が鎌倉を選んだかという理由として、三方山に囲まれ、南側が海だということが、守りやすく、攻めにくい。そして、海からの交易ができるということがあるのですが、この地図は、３社を比べてみると、教育出版さんが一番見やすいのですね。はっきりと、三方、山ということが明確ですし、しっかりと海が描かれていること、それから、切通が７つあるのですけど、それについても明確に書かれていて、東京書籍さんも描かれてはいるのですけども、地図の見栄えからすると教育出版さんが見やすいです。文字もいっぱい入っているのですが、切通の部分はあえて教育出版さんの方は丸印だけになっています。あくまでも見やすさという基準で考えるとそうなります。

日本文教出版さんについては、いわゆる南側からの地図ではなくて、やや西寄りから、上空から眺めたような絵なのですけど、これ全部、西側で、東側の切り通しが描かれていない、５つしか切通が描かれていないということで不十分ということと、やや、三方が山に囲まれているということを明確に分かるという意味では足りなさがあって、トータル的に見ると、やはり教育出版さんの方が見やすいです。ページで言うと、教育出版さんが６年の１１４ページ、東京書籍さんは６年の歴史編の５０ページ、日本文教出版さんが６年の１１０ページです。これはたまたま地図での比較ですが、このような形で、他の資料の比較をして見ると、その地図や資料の見やすさということをトータルで考えると、教育出版さんが一番見やすいということが挙げられると思います。

最後に、教育出版さんのいいところは、目次のところに学びの手引きがありまして、「集める」「読み取る」そして、「表す」というような言葉で、いわゆるスキルベースのことでも、しっかりと学ぶ視点が明確に記されているということも板橋区の授業スタンダードに適合するのではないかと思いました。

教育出版さんを推したいと思います。よろしくお願いします。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、野田委員、お願いします。

野 田 委 員　　社会について、私の方からは、これまで意見をいただきました委員の皆様と同じように考えておりますが、特に観点としましては、やはりＩＣＴ、板橋区授業スタンダードに沿った流れで構成されているかというところ、単元ごとの学習の見通しの立てやすさ、読み解く力の育成について、社会において、特に低学年での生活科で学んだ様々な身の回りの発見や気づきを振り返って、この３年生からの社会科での位置づけを理解していくというような流れ、また、国語の方だと、他の教科にもつながって、自身の生活に関係していくところが意識できること、そして、自学自習等の観点から、教科書を読み解くことによって、実際に自分の勉強、学力の振り返りだとかができるということ、そして、教員の授業の進めやすさなどを主なポイントといたしました。

これらの観点から、確かに各社ともに板橋区授業スタンダードに沿った事業が実施しやすい構成がされているところが印象的でした。

また、写真やイラストがどの会社さんもほどよく適切に配置されていて、情報量の多い内容になっているという印象を持ちました。

今回、社会におきましては、私は教育出版を推薦したいと思います。

教育出版におきましては、どの単元も一貫して、「つかむ」「調べる」「まとめる」「つなげる」の流れで、１単位時間当たりの学習が見開きで構成されている、非常に使いやすい、そして、それぞれの段階がページの左側にタブで記されているなどの見やすさ、このような細かいところの工夫がされていて、内容的にも児童、教員の両方にとって学習の見通しが立てやすく、授業が進めやすく、分かりやすいのではないかというところは感じました。

また、「調べる」部分において、活動という項目で、下の方に分けてあって、何を調べればよいのかというところが、その項目ごとに、細かく、明確で分かりやすくなっていたというところ。

調べ学習が社会においては、結構、幅を占めてくるとは思うのですが、自分で調べる、考えるというようなページでは、資料を読み解く上でのポイントの理解、そして、学習のしやすさを感じました。このようなところにおいては指導もしやすいのではないかと思います。

あとは、総合的に必要とされてくる写真やイラスト、グラフの読み取り、これは国語の方でも述べさせていただきましたが、特にこのような写真、イラスト、

グラフ、資料が大きく掲載されていて、詳細まで工夫がされていることが感じられ、読み取りやすさを感じました。

これは高野委員からも評価がありましたが、特に評価されるところは、これまで白黒であった写真がカラーに変更されていること、これはより当時の状況がリアルに再現されるところ、視覚的に情景をイメージすることが期待できるというところで評価すべき点かと思います。

まとめますと、板橋区授業スタンダードに沿って、段階を踏んで学習の見通しを立てることができるというところ、学習が進めやすい、調べ学習の目的が分かりやすい、写真やイラスト、グラフ、資料が読み取りやすい、特にカラーの写真は視覚的に情景をイメージできるという観点から、以上の評価をさせていただきました。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、私の方からお話をさせていただきたいと思います。

私は、ちなみに１つは、ＳＤＧｓに関して少し興味を持って見てみたのですが、日本文教出版さんの場合は、４年生、５年生、６年生と、７ページのところに、「未来につなげる～わたしたちのＳＤＧｓ～」ということで、かなりページを割いて使っているなと、特に歴史単元のところにも、過去のことを取り出しながらＳＤＧｓについての解説を述べています。

それから、そこの７ページのところにもあるように、「読み解く力」というところでは、「読み取る」というところの項目が、これは実は教育出版さんにもあるのですが、そのようなこともあって、ＳＤＧｓと読み解く力についてがうまくミックスしているなというふうに思いました。

それから、「学び方・調べ方コーナー」では、「見る・調べる」「読み取る」「表現する」の３つのカテゴリーが具体的に分かりやすくまとめられていました。

あるいは、キーワードや難しい言葉が分かりやすく説明してあるのも日本文教出版さんのいいところだなと思いました。

そして、６年生の歴史学習の前に磯田さんのコメントが入っています。磯田道史先生、この文章を読んでいて、とてもすてきな文章で、歴史学習への動機づけがされるなというふうに思いました。

磯田氏の草案も入っていて、歴史学習の基本を学ぼうが始めに記載されているところもすてきだなと思いました。

新たな学習では、右ページには学習問題が示されてあります。そして、板橋区のことについても、先ほど長沼委員からお話がありましたように、３年生でしょうか、９２ページ、９３ページにフードロスについてのことが書かれてあるというところでは、日本文教出版もすてきな教科書だなというふうに思いました。

それから、教育出版については、各学年に「ＳＤＧｓとつなげて考えよう」が設けられています。学習をＳＤＧｓの視点から振り返り、これからの地域や社会の暮らしのあり方について考える取組であるというふうに思っています。

また、構成については、１単元、見開き２ページで、左上にこの時間の問いが示されていて、右下に「次につなげよう」というふうになっていて、その時間に学んだことが次にどう関わっていくのかということを知る構成になっていて、これもなかなか工夫されているなと思いました。

それから、単元内に配置されているみんなで作った学習問題は、子どもたちの主体的な学びを促す内容として工夫されているというふうに思いました。

５年生には、自分で調べて考えるという取組があります。ここでは児童一人一人が自分で資料を選び、ポイントを手がかりに読み取り、考察して、クラスのみんなで共有するという、まさに板橋区授業スタンダードの学習の流れを想定した構成になっており、個に応じた指導に活かせるなというふうに思っています。

また、先ほど申し上げましたように、教育出版さんの場合については、長沼委員がおっしゃっていただいたのですけど、私も、見方・考え方、５ページでしょうか、社会科で使う見方・考え方。この見方・考え方はよく簡単に使うのですけど、一体、どういう意味なのかというのが分かりづらい言葉でもあるのですけど、それが全てのところに出ているというところは、先生方にとっても本当に分かりやすいという意味では、とてもいい内容だなというふうに思いました。

それから、目次を見ていただくと、どの学年もそうなのですけど、「読み取る」という項目が非常に多いです。これ、日本文教出版さんよりも多く出ていて、冒頭から出ているグラフや表、あるいは図から読み取る。

板橋ではイメージ同定と言っていますが、そのような問題が非常に多く出ているというところも、読み解く力を育成する上では魅力的な内容であるなというふうに思っています。

それから、これもよく出ていますように、３年生の警察単元の１２０～１２５ページでは、板橋区で働く警察や自治体、子ども見守り隊の皆さんの様子が取り上げられているということで、区民アンケートの中でも高い評価のメッセージが書かれていましたので、ここもすてきだなというふうに思いました。

それから、これも同じようなことになってしまうのですけども、近現代史で白黒の写真が歴史の６年生がカラー化してある。これはＩＣＴを駆使してやっているのだなというところでは、趣向を凝らした内容だなと思っています。

それから、６年生の政治単元の後の歴史単元の導入に、６８ページからですが、政治単元で学んだ選挙権に関わる内容を位置づけていて、昔は日本では選挙権を持つ年齢が異なる上に、男女平等ではなかったという驚きから日本社会の歴史に問いを持つといった学びの動機づけが持てるように配慮されているなと思いました。

それから、これは使いやすいか使いにくいかは別問題ですが、６年生の７４ページ、７５ページに、見開きで全ての時代を一望できる年表が貼られています。このようなところも、今までは巻頭や巻末にあったものを、歴史単元が政治の後に来たということもあるのでしょうけども、歴史を一望できるヒントになるのかなというふうに思いました。

それから、５年生の１７ページでしょうか、北方領土、竹島、尖閣諸島につい

てなのですが、他の教科書については、今、こういう状況であるというメッセージで終わっているのですが、教育出版については、「日本はこれらの島々が日本の領土であることを相手国や国際社会にしっかり伝え、課題の平和的な解決に向けて、粘り強く努力を続けていく必要があります」と閉じています。このような考え方は、今の世の中でとても大切なことではないかなというふうに思いました。

以上のことから、私は、教育出版、それから、日本文教出版を推したいというふうに思っております。

皆さんのご意見を聞きますと、教育出版を５人の委員全員が推薦しているということで、社会科については教育出版を仮採択することにご異議ございませんか。

（異議なし）

教　育　長　　それでは、「社会」については教育出版を仮採択することといたします。

それでは、当初の予定よりも早く進行しており、休憩を挟まず、午後に予定していた「地図」の審議を行いたいと考えますが、皆様いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。

（異議なし）

教　育　長　　それでは、ただいまから「地図」の審議の準備に入りたいと思いますので、少々お待ちください。

それでは、「地図」について審議を始めたいと思います。指導室長、お願いします。

指 導 室 長　　「地図」につきましては、２社でございます。東京書籍、帝国書院から採択をお願いいたします。

教　育　長　　それでは審議に入ります。質疑ご意見等ございましたらご発言ください。

高野委員、どうぞ。

高 野 委 員　　２社の地図帳を見比べますと、両方とも、どちらの社も大変大きくて、鮮明で、見やすく、資料も豊富で使いやすいと思いました。

本当に両方ともよくできていて、甲乙つけがたいのですが、今現在、板橋区の小学校でこの帝国書院の地図帳を使っているのですが、実際に授業を見に行ったときに、現場の先生方や、それから子どもたちに使い勝手などを聞く機会があるのですが、大変使いやすいというふうに、直接、聞いております。

また、中学でもこの帝国書院の地図を使っているという点もあるので、私はこのまま帝国書院の地図を使うのがよいのではないかと思います。

帝国書院の場合は、この地図帳でとてもいいなと思うのは、３年生から地図帳を使った学習を始めるわけですが、その導入の部分にかなりのページを使ってい

ます。

地図の成り立ちから、「地図ってなんだろう」「地図の約束」「地図帳の使い方」というような項目で、１４ページにわたって図解しています。

「地図の約束」というところでは、方位や地図記号、また、色の使われ方を説明しています。

「地図帳の使い方」では、索引の使い方、縮尺の仕組みとか、距離の求め方など、地図の基礎的な知識や技能を分かりやすく丁寧に解説しています。

全体的に見たときも、この色合いが大変柔らかな色合いで、見やすくて、使いやすいという印象を持ちました。

まず、地図帳の使い方を説明した後で、今度、広く見渡す地図というものが出てきます。これは九州から北海道までを概観して、その後で、今度、地方や都道府県の詳しい地図に入っていきます。まず、日本のどの辺りにその地方が位置しているのかということが大変分かりやすくなっています。

その他にも、９９ページから１０２ページのところで、「日本の自然災害と防災」などという現代的な課題に関する教科横断的な内容のページがあります。

ここには、地図だけではなくて、下に地震や津波の被害に遭った写真などがあって、大変分かりやすいページになっています。

また、ＳＤＧｓについても、１２５、１２６ページに、世界のＳＤＧｓとして、世界の課題とその課題に対する世界各地の取組を写真資料を用いて取り上げています。

例えば各地の取組として、この下の方に写真で、マダガスカルですとか、カンボジアですとか、そういうページがあるのですが、それがこちらの世界の地図のどこに位置しているのか、また、そこでの問題はどういう問題があるのかということが分かりやすくなっています。

その他にも、１０２ページに防災マップ作りというところが書いてあって、自然災害から守るためには、私たちがどのようなふうに行動するのかも大切ですということで、実際にハザードマップとか、そういうものを比べながら、防災マップを作るというページがあります。

また、あと、１０６ページでは、日本の発電ということで、再生可能エネルギーの発電所ですとか、発電所の最大出力などが分かって、日本の発電の移り変わりが分かるようになっています。

このような資料と合わせて、板橋のｉカリキュラムの環境教育に関連づけて使用できるのではないかと思います。

また、歴史に関しては、５５、５６ページで、江戸時代の結びつきや、街道を行き交う人々、それから、６９、７０では、江戸時代後期の古地図や江戸の町の様子などが示されている。先生に伺ったところ、６年の歴史の学習でこの地図帳を使うことがあるというふうに伺いました。このページも６年の歴史学習に役立つ内容ではないかなと思います。

以上の理由で、私は帝国書院の地図帳がいいのではないかと思います。

教　育　長　　ありがとうございます。
　　では、青木委員、お願いします。

青 木 委 員　　私も、おおむね高野委員に近い考え方なのですが、本当に昔の地図帳と比べると、随分、色々な補足情報が多分に盛り込まれていて、非常によくできているなというのが感想です。
　大きさも適切であろうかと思いますし、それぞれの場所にＱＲコード、二次元コードが配されていて、深い学びにつながるといったような流れも非常によい取組だと思っております。
　それと、大事なのは、社会科と、あるいは、他の科目とのつながりとしての地図、ここの視点が重要だというふうに思いまして、２社のポイントを絞ってみますと、例えば郷土愛を育むという意味では、東京書籍さんは、首都の東京のページに板橋区の一部が記載されているという、なかなか発見することはないかもしれないのですが、やはりこの辺は少し板橋区が載っているという形で、興味・関心につながるのかなというのはありました。
　ただ、全体的な、これも高野委員からもあったと思いますが、今、国土強靱化というのが叫ばれる中、このような自然災害の話ですとか、そのようなものの情報を地図の中に盛り込むということは、他の教科の中でもこれを有効活用できるという意味で非常に重要なんだというところでございました。
　このような様々な項目、地図から少し発展的なというところを含めた学習につなげられるような情報が網羅されているという意味では、帝国書院さんが少し情報量が多いかなというのを思いました。
　特に、先ほどもありました１２５ページの世界のＳＤＧｓ、これが世界の現況を理解するのに対して非常に分かりやすく表現されているなというのが印象に残った点。
　それから、帝国書院さん、ユニバーサルデザインの観点をかなり意識されているということで、色覚特性ですとか、ユニバーサルフォントの使用だとかということにも配慮がなされているということ。
　それから、非常に私が重要だなと思ったのは、距離感ですね。地図の中で、特にある程度フォーカスされたような地図では、距離感が分かるように、物差しを使って計測ができるように地図が描かれている。この辺が帝国書院さんの工夫のしどころだと思いまして、非常に重要なポイントかなと思いました。
　以上のような観点から、私も帝国書院をお薦めしたいなと思いました。
　以上です。

教　育　長　　ありがとうございます。
　　では、長沼委員、お願いします。

長 沼 委 員　　地図につきましては、どちらの社のもよく考えられていて、単なる地図ということに留まらず、資料がしっかりと盛り込まれているものだなと思いました。

お２人と同じになってしまいますが、帝国書院さんの方は、ＳＤＧｓに関して特設のページを２ページ設けていて、しっかりと網羅している。しかも、それを世界地図にも落とすことによって、現在、地球上でどのような課題があるのかというのが明確に分かるようになっている。これは大変ポイントが高いと思いました。

また、高野委員がおっしゃっていましたが、まず、日本地図について言うと、広く見渡す地図があって、九州地方から北海道地方までを概観する形のページがあり、そして、その後で、地方ごとだとか、あるいは都道府県ごとの地図が掲載されているという、この辺りの配慮が非常に子どもたちにとっても、先生方にとっても分かりやすいものになっているなということです。

あとは、やはり地図ですので、見たときの見やすさというのは非常に大事で、色合いが優れているのがやはり帝国書院さんのですし、東京書籍さんの方は、色々な情報量が多いのですが、それをどう見るかということもありますが、小学生の視線で見たときに、あまりごちゃごちゃしているよりもシンプルな方がよろしいのではないかと思います。

あと、特性の強いお子さんもいますので、ごちゃごちゃしていると、なかなか見づらいという点もありますので、そのような観点を総合的に見ると、帝国書院さんを私も推したいと思います。

唯一、これは青木委員がおっしゃっていましたが、帝国書院さんで残念なのは、首都東京といったときに、これは６７ページでしょうか、帝国書院さんにとって、首都東京は山手線なのですね。

ですから、板橋区はなく、豊島区までしか書かれていないというのが、大変板橋区の方からすると残念ということで、一方、東京書籍さんは、全部じゃないですけど板橋区もちゃんと出てきますし、多分、羽田空港まで描きたかったんでしょうね。ちゃんと開く形で、羽田空港まで、ぎりぎりですけど入れ込んでいるというところが、これが恐らくこだわりだと思いますけども、この点が、唯一、東京書籍さんの方が、このページについて言うと、板橋区の子どもたちに見せたいというところはございました。

重なってしまう点も多かったのですが、全体的に見ると帝国書院さんの方を推したいと思います。

他教科との連携という点でも、これはどちらの社も工夫されているのですが、他の委員さんと同じように全体として帝国書院さんを推したいと思います。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、野田委員、お願いします。

野 田 委 員　　私の方から、地図についての意見を述べさせていただきますが、私も、これまでお話しいただいた委員の皆様と同じような印象を持っています。

この地図に関しての観点としましては、まず、地図帳としての活用、地理的情

報の収集、他の教科への効果的な活用というところが重要かと思います。

さらに、長沼委員もおっしゃっておりますけども、地図の見やすさ、そして使いやすさ、このようなところを主なポイントとしました。

私の方からも、帝国書院さんを推薦させていただきます。

先に申し上げましたこの観点から、地図としての活用を主なポイントとして見ていきました。

記号、色分け、これは非常に鮮明でした。索引や、コメントにありました縮尺、距離、このようなところが見やすい工夫がされていました。使い方についても、地図帳としての使い方の説明が詳細にされているというところは重要かと思います。

また、気候、地形、防災、工業、水産業など、社会科における地理的分野の学習全般に対応しているというような印象が見受けられるというところ、江戸時代との比較、また、国際理解や政治を学習するときに首都東京の地図を見る機会があるというようなことも現場からはお聞きしております。そのようなところが詳細に示されているところで、歴史学習との関連性で使用しやすいところ、また、４７都道府県の位置関係だとか、水源の確認だとか、社会科の学習のみならず、このような災害、台風、理科的な考えで、電気だとか、産地の学習、このような他の教科でも活用ができるというところで、使いやすさを感じました。

実際の社会科における地理的分野の学習全般にも対応しているというところも非常に着目されるところでありまして、あと、江戸時代の比較についても、国際理解、政治の学習をするときに、この首都東京地図を見る機会、重複しますが、このようなところが本当により詳細に示されているところが使いやすさというところで強い印象を感じました。

以上になります。

教　育　長　　ありがとうございます。

では、私の方から、「地図」についてお話をさせていただきますが、もう皆さんから出ているのですが、特徴としては、帝国書院は小学校３年生から使うということをかなり意識して丁寧に作り上げてきているかなと。

それから、東京書籍さんの方は、とにかく情報をてんこ盛りしていて、かなり細かい内容まで網羅しているなというところです。これ３年生が初めて手にしたときに、例えばですが、「地図の決まり」というところで、東京書籍であれば９ページ、帝国書院であれば１１ページの方を見ていただくといいと思うのですけども、東京書籍さんはとにかくすごくたくさん入れ込んではいるのですが、例えば３年生、４年生が見たときに、どっちが見やすいか、あるいは、どちらが理解しやすいかと考えたときに、やはり私は、ファーストステップとしては、帝国書院さんの方がなじみやすいかな、入りやすいかなという感じを受けました。

例えば縮尺のところ、１３ページ、東京書籍さんですが、これもすごくいいのですけど、これをしっかりと読み解くというのはかなり難しい内容なのかなということを感じています。

地図自体に情報がかなり入っていて、先ほど長沼委員もおっしゃっていたように、少しごちゃごちゃ感が否めないかなということを感じています。見やすさというところでは、帝国書院さんの方が見やすいのではないかなということと、あと、最初に３年生、４年生を意識していると思うのですけど、広く見渡す地域というのを入れてあります。

これは恐らく４年生辺りが、１都１道２府４３県、４７都道府県のことを理解するのには、このような感じの、少し言葉は悪いかもしれませんけども、大雑把な日本地図でまず学んで、そこから今度は、帝国書院の３１ページから、細かいところに入っていくという心遣いがされている。つまり３年生から活用するということを十分認識しているのが帝国書院ではないかなというふうに思っています。

また、色合いが、見やすさというところで、ぱっと見たときに、何か、目になじむというところでは、これは個人的なことかもしれないのですけども、帝国書院さんの方が目になじむという気がします。

それから、改めて、この地図帳というのが、単に地理の世界だけでなく、様々な資料集として活用できるとなってきたときに、社会科は資料集が本当に必要なのというクエスチョンが私の中では渦巻いています。

５年生にしても、６年生にしても、この地図帳と教科書があれば、もう十分小学校段階ではできる。しかも、今度はタブレット端末も使えるということで、ＱＲコードもあるので、何か資料集が必要ないぐらいに、いい資料集にこの地図帳自身もなっているのではないかなと思っています。

例えば、帝国書院さんは、江戸時代の五街道のことが書かれてあったりしています。それから、先ほど来出ているように、防災についても、東京書籍さんも防災について、日本の自然災害について、台風のことまで非常に書かれていて、とてもよく書かれてあるのですが、帝国書院さんとの大きな違いが何かというと、やはり９９から１００ページと、１０１ページ、１０２ページの取扱いが随分違うなということを感じました。

これはまさに社会科でも活用できますし、総合的な学習の時間等も含めて、今現在、水害というのが非常に大きな脅威を与えている中で、洪水への備えといったところがタイムリーな話題であるし、環七のことが書かれてあったり、地下調節池の仕組み、それから、防災マップ作り、先ほども高野委員の方から出ましたけども、このようなものも実際に今学校で行っている、このようなときにこの地図帳を参考にするという発想が意外にないのではないかなというふうに思うのですが、ここまで詳しく出ていると、これを使って活用できるのではないかなというふうに思うと、社会だけでなく他教科へのつながりというのもできてくるのではないかなというふうに思っています。

世界地図のところのアジア編だけを少し見てみると、東京書籍の方が高地とか砂漠などが分かりやすいというところはあるのかなというふうに少し思いました。あと、オセアニアを独立して掲載しているのも東京書籍でしたが、そのようなものと比べたとしても、全体的には帝国書院さんの地図帳の方がよくできている、見やすさがある、小学校３年生から使いやすさがあるというところで、私も帝国

書院を推したいというふうに思っております。
以上でございます。
この「地図」に関しましては、５名全員の意見が帝国書院ということですので、「地図」については帝国書院を仮採択することにご異議ございませんか。

（異議なし）

教　育　長　　それでは、「地図」については帝国書院を仮採択することにいたします。
それでは、委員会の途中ではありますが、議事進行の都合により、休憩といたします。再開は１３時といたします。よろしくお願いいたします。

（休憩）

教　育　長　　それでは、委員会を再開いたします。
「算数」の審議に入ります。指導室長から説明願います。

指 導 室 長　　「算数」につきましては、６社でございます。東京書籍、大日本図書、学校図書、教育出版、新興出版社啓林館、日本文教出版から採択をお願いいたします。

教　育　長　　それでは、審議に入ります。質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。
高野委員、どうぞ。

高 野 委 員　　算数では、板橋区授業スタンダードの学びのプロセス、学習課題、めあての設定から、自立解決、集団解決、まとめ、振り返りに沿って授業が進められているもの、また、教科書を使って自学自習できるもの、この２つの点を中心に各社を読み比べてみました。
最初に、現在使われている大日本図書についてです。
大日本図書は算数の学び方について、じっくり学び合おうとして「問題をつかもう」「自分で考えよう」「学び合おう」「まとめよう」「振り返ろう」の流れが示されています。
４年の２１３ページ、少数と整数の掛け算と割り算の単元のところを少し見ていたのですが、ここで設問のところに、考え方の順番が横の緑色の線に従って進められるようになっているのですが、その中で、まず、２番で「計算の仕方を考えてノートに書きましょう」、ここは自分で考えます。そして、その後、３番で「自分の考えを発表しましょう。また、友達の考えを読み取って、どのような考えか説明しましょう」というふうになっています。
そして、その後に、「お互いの考えのよいところや似ているところについて話し合いましょう」というふうになって、学び合いを具体的に進めています。
その次のページになると、教科書では、黒板に書かれた友達の様々な考え方について自分の考えを発表する児童の様子がイラストで書かれています。

子どもたちが普段の授業での様子を想像しながら学習を進めていけると思います。このような場面は先生方にも実際の授業に活かしていただけるのではないかと思っています。

また、大日本図書では、数と計算分野で単元の間に練習のページが設定されています。そこで基礎的な知識、技能が習得できるようになっていますが、２年生からは練習問題の一部が青い数字で表記されていて、そこを選んで、短時間で基本的な理解ができるように工夫しています。

子どもの進度に合わせて問題を選ぶことができています。また、各学年に長文や統計などの問題から読み取る「読み取る力を伸ばそう」があり、読み取る力の育成につながる内容となっています。

２年生の８１ページ、「友達の家はどこかな」、また、５年生の１９７ページ、「どこが安いかな」、通常の算数の問題とは違って、問題を読みながら、そこに算数の考え方を活かして解いていく問題が設定されていて、発展的に学習が進められると思います。

また、あと１年生の新しい算数というのがあって、これが大変分かりやすく、スタートカリキュラムに沿っているのではないかと思います。

実際にこれを使っている１年生の授業を見たのですが、子どもたちも教科書にブロックを並べたり、数えたり、これを使って、直接書き込みながら授業を進めていて、大変使いやすくなっているなというふうに思いました。

大日本図書については、分冊になっていないという点が少し気になります。やはり全体的に重いのかなというところが少し気になる点です。

あと、もう１社、東京書籍です。東京書籍も同じようにスタートブックがあって、スタートカリキュラムに沿った使いやすいものになっています。

また、学習の流れが巻頭の学びの扉にありまして、大変分かりやすく説明されています。

見開き２ページで、おおむね１単位時間に扱う分量が記載されています。

１単位時間ごとに、今日の問題、めあてに当たるクエスチョンマーク、まとめが緑色で表記されていて、大変分かりやすくなっています。また、定義や性質が黄色で網がけ表記されているので、それも一目で分かるように工夫されています。

計算問題では、問題のうち数題が網かけで表記されて、短時間で基礎的な知識、理解が確認できるようになっていたり、また、「確かめよう」「覚えているかな」で既習事項を振り返る課題があり、基礎的な知識を習得できるように配慮されています。

また、反対にもっと練習したいときには補習問題が用意されています。また、学習をもっと広げたり、深めたいときには、面白問題にチャレンジなど、発展的内容に当たる「活かしてみよう」「考える力を伸ばそう」などがあり、児童それぞれに合った学びが得られるようになっています。

６年生のところで、巻頭の６、７ページのところに、「マイノートをつくろう」というのがあるのですが、これは板橋区授業スタンダードに沿ったノートの書き方が記載されています。

実際にこれを使って、６年の５１ページでは、分数で割る割り算を考えようということで、今日の深い学びでの学習に合った授業が進んでいきます。

これをずっと見ていくと、この学習した内容が、最終的に６２ページの「マイノートに生かそう」ということで、ここで学んだことが実際のノートとして書かれています。これは児童が自分でノートを書くときに大変参考になるのではないかなと思いました。

また、単元の導入で、日常生活と関わりある場面を設定して問いを立てる内容になっています。

例えば４年の３０ページで、「どのように分けているかな」というところは割り算に入るのですが、焼きそばとケーキの分け方の違い。焼きそばは取るところで分量が決まっていないのですが、ケーキについては何分の１というような、はっきりとした分け方になる、そこの違いから割り算を考えていきます。

あとは、６年の１２０ページで、「円の大きさを比べるには」という円の面積のところでは、アーチェリーの的の大きさが真ん中からだんだん大きくなっていくということに注目しています。

児童が興味を持って、主体的に学習に取り組めるように、導入の部分での工夫がされている点がいいと思いました。

以上、２社が私はいいと思って推薦いたします。

教　育　長　　ありがとうございました。

それでは、青木委員、お願いします。

青 木 委 員　　算数の発行社は６社なので、大変迷うところがあったのですが、少し私がこだわった前提だけお話させていただきます。

今、やはり算数というのは、ＳＴＥＡＭ教育とか、ＳＴＥＭ教育という中でも重要な教科になってきていることは皆さんもご承知のとおりだと思います。

特にこの日本の中では、この初等編は非常に大事だと思っているのですけども、中等教育の中でどんどんいわゆる理数系離れが進んでいまして、ＯＥＣＤの諸国の中では理数系の伸び率がマイナスと言われる数少ない国の１つに入ってしまっています。

とはいえ、世の中ではデジタル人材、クリーン人材が必要ということで、ますます理数系は求められているにもかかわらず日本はこの状態ということで、やはり文部科学省でも大変問題にしている１つかと思います。

そのような中で、やはり初等、中等の中で、いわゆる算数嫌いになってしまうようなことはぜひとも避けられるような、興味・関心を持てるような教科書、これが非常に大事なのかなというところにこだわって見たというところでございます。

６社の中で、それぞれ工夫がなされてきて、とにかく今回は社会とか生活の中で必要な算数、このようなものをできるだけ興味・関心持たせるためにという工夫が全ての会社でなされているということもありましたし、それから、主体的で

対話的な深い学び、個々に合わせたような形で学び合いというようなものを意識したような単元というか、出題、例題の出し方、それから、学びの流れ、これを意識されているところが多かったかなというふうに考えております。

その中でこれはというふうに思ったのは、幾つか挙げさせていただくと、例えば大日本図書さんは、これは各学年そうなのですが、最初のところに算数の大切な考え方というのを提示していて、例えば４年生の教科書ですと１０ページ、１１ページ辺りに、学んだことを使って決まりを見つける、同じように考える、そして広げるといったような流れが必ず各学年につけられているというので、前段の「算数というものは」というふうな学びの姿勢という考え方のところを、都度、もう一回振り返って考えてみようというようなところが入っている、これが非常に重要かなと思いました。

それから、先ほどの中でも取り上げられていた、じっくり、深く学び合おうという形で、問題解決型の授業が適宜設定されている点、確かめ問題とか、学んだことを生かそうといった中で、日常生活の中での算数を生かす内容というのが多分に取り上げられているというようなところがありました。

それから、大日本図書では、「ふくろう先生のなるほど算数研究室」というような形で、３学年から６学年ですが、算数の学習に興味関心を高めるといった、もう先ほどぜひと思ったところを高められるような問題というのが掲載されているという点。

それから、もう１つ、流れの中でやはり社会に必要なということを、社会に出た諸先輩というのですかね、そういう方たちからのインタビューで探っていこうというようなページが必ず１ページずつ取り上げられていたというのがありまして、例えば、他の会社でもあったのですが、アスリートの方へのインタビューですとか、それから、社会で活躍されている方へのインタビューの中で、数学がこのようなことで役立ったというような話で興味関心を高められるようなところ。

それから、これは５年の巻末、２８６ページ辺りには、中学の数学ではこのようなことを学ぶよというので、小中連携の中で、発展、中学校といったような項目、この先どういうふうに展開していくかなという先を、応用を見据えたようなところで、特に算数に興味関心を持ってどんどん学んでいきたいというようなお子さんに対して、その先の可能性みたいなところを掘り下げられるようなところも、１つ注目するところではあったと思います。

他の発行社の中でも、先ほど来申し上げている中では、東京書籍さんのようなんかが、４年の上の２ページでは、「算数は今も私の身近に」という伊藤美誠さんとのインタビューがあったり。

ですから、やはりどのような社会で活躍する人でも算数が大事なんだよということが、やはり生徒たちがある程度分かるまでが、理解するまでがひょっとするとハードルがあるというお子さんにとっては、頑張ろうという気になってくれるようなトピックスが入っているというのは少し大事なのだろうなというふうに思いました。

それから、もう１つが、やはりタブレットを持っていることも含めて、プログ

ラミング思考、ここをどう意識されているかというようなところも注目すべきところでした。

例えば、啓林館さんの４年の下では、わくわくプログラミングというのが１０４ページに入っていまして、この辺、アルゴリズムの考え方も含めて少し分かりやすく整理されているのではないかというところも感じたところです。

それから、これも各発行社さんが工夫を凝らしていたところなのですが、算数はノートの取り方によってやはり理解度が高まるというところもあります。

学校図書さんの４年の上では、最初のところに「ノート名人になろう」というような形で、６ページ、７ページのところにノートの理解しやすい取り方などという説明もあって、この辺も非常に注目すべき点だったかなと思います。

また、先ほどのプログラミングというところでは、日本文教出版さんも４年の下の例えば１３４、１３５で、「レッツプログラミング」というところで、アルゴリズムというのをもう既にここで意識させるような図の説明の捉え方、ここもすごくこの先のプログラミング思考に対しては非常に重要なポイントだったのかなというふうに思いました。

色々取り上げましたが、やはり最初に申し上げた、算数への興味関心を持続的に、それから、応用、発展、この辺を全て網羅して、意識を高められるようにという形で内容がきれいに整理されているなと思ったのが大日本図書さん。

それから、もう１社気になったのが、教育出版さんで、例えば、巻末の自分で取り組むページに、習熟度に合わせた問題を記載されていて、主体的で深い学びというのに個々で取り組める工夫がある。

それから、巻頭の「みんなで算数を始めよう」というところにある学習の流れというのは、板橋区のいわゆる授業スタンダードというのに沿った形になっている。

さらには、構成・分量のところですが、「算数ワールド」ですとか、「学んだことを使おう」というところでは、身の回りの事象を取り上げて、既習の事項、これを活用して課題解決を図る。まさに生活に生かす算数というようなものを取り上げた問題が掲載されている点が注目すべきところだったかと思います。

他のものもよい取組というか、注目すべきところが多々あったわけですが、総合的には、大日本図書さんと教育出版さんという形を推薦させていただきます。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、長沼委員、お願いします。

長沼委員　　かつて中学校数学の教員をしておりましたので、その観点から言うと、算数、数学というのは一番学習内容の系統性ということを意識しやすい。これは教える先生もそうですし、子どもたちもそうだと思います。今習っていることが、以前どこで習ったものを活用するのかということ、そして、学年が上がったときにどのような形でまたそれが応用されていくのかということですね。

非常に分かりやすく捉えられるということと、逆に言うと、そのことを意識して教員が指導するということが求められるということになります。その観点で、使いやすいかどうなのかかなりポイントがあると思います。

それから、午前中に申し上げたとおり、個別最適な学びができるかどうか。それは特性の強いお子さんもそうですし、算数が得意でどんどん先へ進みたいというお子さんにとっても、自学自習ができるかというのも、これもあっていいと思います。

それから、もう１つの観点は協働的な学びということで、これについても各社それぞれが工夫して、対話的な学び、協働的な学びが学習されるような仕掛けを随所に入れ込んできていまして、６社全て見ましたが、非常に密度の濃いといいますか、使いやすい教科書として仕上がっているなという印象を受けました。

ですから、非常に迷ったところではありますが、以上のことを中心に私の方で出した結果をお知らせします。

これは４年前のときもやってみたのですが、一番、学校の先生が、特に高学年の先生が教えにくいところというのが、６年生の分数÷分数でして、これをどのように記述しているのかというところを全部比べてみました。

４社が５分の２割る４分の３で、東京書籍、大日本図書、学校図書、教育出版、それから、啓林館さんは５分の３割る３分の２、日本文教出版さんが８分の５割る３分の２ということで、４社は同じ数字を扱っているわけですが、この数字の扱いやすさみたいなものも、かなり工夫してというか、意識をして、何の数字を使うかということを細かく考えて作ってきているのだろうと思います。

どれがいいということはないのですが、ただ、５分の２割る４分の３にしても、それ以外の数字にしても、そこに至るプロセスが、その前段階で、例えば５分の２割る４分の３であれば、５分の２割る４分の１で、まず導入しておいて、割る４分の１であれば非常に意識しやすいといいますか、実質的に４倍すればいいということで、ここで逆数になるということの意識化を図れるという点では、導入としては分かりやすい形になっています。この分子が１の形で導入しているのが教育出版、啓林館、日本文教出版です。

ただ、もう少しこれを読み解いていくと、５社がペンキなのですね。ペンキの量と塗れる面積で、唯一、教育出版さんが棒の長さと重さ。この辺の違いはありますが、やはりペンキの面積と量が分かりやすいのかなと見ていました。

もう少し詳しく見ていくと、大日本図書さんのところで、５分の２割る４分の３で、割る４分の１の導入をしていないと見せかけて、実は解いていく段階で子どもが３人出てくるのですが、ここで３通りのやり方のうちの１通りが、実は割る４分の１に帰着させるという方法です。

このことで、後々出てくる逆数を掛けるということの意識化が図られていました。あと２通りと面積図で迫っていくやり方もあるのですけど、実は面積図は物すごく分かりにくい、教えにくいのですね。

ですから、そうではなくて、あえて機械的な計算の工夫というところに落とし込んでやっていく。それがちょうど大日本図書さんでいうと、６年生の１１８ペ

ージのところに、黒板の中に３人の子どもが対話をする形で３通りのやり方が出てきているこのアプローチの仕方は大変秀逸だなと思いました。

もちろん、これには色々なやり方があるので、どれがいい悪いというのはないのですが、私の方ではそのように感じたということを紹介させていただきました。

全体の作りからしますと、まず、大日本図書さん、現在使われているものですが、先ほど高野委員、青木委員からのお話がありましたとおり、様々な工夫が見られました。

まず、協働的な学びということで言うと、６年生で言えば、８４、８５ページのところで、「表やグラフを生かそう」ということで、これは青木委員がおっしゃったデータサイエンスの重要性にもなるのですが、ここでしっかりと対話的な学び、そして最終的に、最後の「分析しよう」というところでは、グループ学習の形のイラストになっていて、協働的な学びが促進されるような仕掛けがされています。

このようなことはもちろん他の会社さんにもあるのですが、丁寧に、このプロセスの中で、対話的な学び、そしてグループ学習、協働的な学びもできるような工夫がされています。

また、青木委員もおっしゃっていましたが、「算数お仕事インタビュー」というのがありまして、例えば６年生でいうと、２４０ページだったかな、様々な、これは携帯の方ですね。データを読み解くということをお仕事で使われている方のインタビューを、随所にこういうページが用意されています。

算数、あるいは数学で学んでいることが、社会に出たときにどのように扱われているかということを意識できるような形になっていて、板橋区でも大切にしているキャリア教育の視点も、この中に網羅されていると考えられます。

また、「ふくろう先生のなるほど算数教室」というページがあって、ここではかなり難しいものも取り上げられていますが、算数の学習に興味関心を持つような、そういう問題を掲載しています。

得意なお子さんにとってもこのページを読み解くことでさらに算数の内容を深めていくことができる、そのような工夫がされている点がよいと思います。

また、全学年で、読み取る力を伸ばそうということがありまして、板橋区で大切にしている読み解く力、ここにも算数の学習をしながらつなぐことができる大変優れた教材だなと思いました。

もう１社、東京書籍さんですが、こちらも大変よく工夫されていて、まず各ページがとても見やすい字体と、適度な行間というのでしょうかね、このような工夫も見られました。

６年生でいうと、例えば２ページのところには、「私と算数」ということで、宇宙飛行士の野口聡一さんのメッセージが取り上げられていて、有名な、著名な方が実は算数、数学というのは色々なところで使われているんだということが見てとれるということが読み取ることができる工夫がされています。

また、協働的な学びにいきますと、同じく６年生ですが、１６９ページのところを見ますと、「それなら次は」で、自分たちで学習を切り開こうというような

ページになっています。

自分たちということですので、これは３人のお子さんが出てきますが、協働的な学びを深めていくという感じが表示されています。

このように、かなり今回の新しい教科書では、協働的な学び、いわゆる令和の日本型学校教育の答申をきちんと踏まえた作りを丁寧に各社が入れ込んできているというのは分かりますが、東京書籍さんについても、このことをしっかりと意識した作りになっています。

それから、先ほど申し上げましたが、系統性から言いますと、目次のところを見たときに、東京書籍さんは、例えば６年生でいうと、この６年生の目次、いわゆるコンテンツだけじゃなくて、前の学習、それまでに習った学習、それから、その後、６年生ですから中１のものも含めて後の方のページに出てくるものも全部網羅されていて、そこで系統性がきちんと把握できるようになっています。

ちなみに、これと同じような工夫をされているのが東京書籍さん、大日本図書さん、学校図書さん、前と後を両方書いているのはこの３社です。

あとの３社は前の学習しか書いていないということで、やはり前だけじゃなくて、その後、どのようにつながっていくのかということを先生が把握することによって、より系統性を重視した算数数学の指導ができます。

とりわけ板橋区は小中一貫教育をやっていて、学びのエリアの中で、小・中の先生方が協働的に、９年間のカリキュラムを、今、考えながら実践されようとしています。既に実践されている学校も出てきていますので、このことは大変大きいと思います。

目次の中に、前の学び、後の学びが、算数、数学で出てくるというのは非常に大きな特徴として、そういうものを使った方がいいだろうと思います。トータルに考えますと、現在使っている大日本図書さん、そして、もう１社挙げるとすれば、東京書籍さんを推したいと思います。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございます。

それでは、野田委員、お願いします。

野 田 委 員　　算数について述べさせていただきます。

まず初めに、私の方から、この算数について、教科書を見ていくに当たって、現在、学校現場を訪問しますと、授業の様子、また、我が子の授業の様子や家での学習を見ていきますと、多くの学校で学習進度別の少人数制で学習が進められているという様子が見受けられます。

ということは、実際のこの個人の学習進度というところがポイントになってきて、この学習進度に応じて教科書を使った自主学習により苦手の克服や得意分野を伸ばすということも求められてきます。

特に算数に関しては、これまでの委員の皆様がおっしゃられるとおり、非常に重要な科目となっており、家庭での算数に対する取組というのは、やはり家族を

挙げて、保護者にとっても重要な教科として取り扱っているわけで、この教科書というのは、最初、冒頭にも私の視点ということで申し上げましたが、保護者も読む機会が非常に多い教科の１つであると考えております。

その審査の観点としましては、やはり、つまずきがあってはならないというところもありまして、やはり板橋区授業スタンダードに沿った流れで構成されていること、これは非常に重要かと思っております。

また、これまでお話を挙げていただいておりますが、単元ごとの学習の見通しの立てやすさや、読み解く力の育成、特に１年生においては小学校算数への導入の入りやすさ、これは子どもにとっても、先生にとっても、この教科書が役に立つかというところ、２年次以降につきましては、これまで習ったことをどのように活かしていくかなど、教科書全体の構成について、このようなところを主なポイントとして見ていきました。

特に、途中でもご意見があったと思うのですけど、中学年ぐらいに入ってきますと、自分の考えを他者に説明するアウトプット、このような力が求められてきます。そのようなところも考えて見ていきました。

このような観点から、各社において、同じように、計算の仕方、つまずきやすいところに関しては詳しい解説がされていて、色使いだとか、詳細説明が分かりやすく書かれているところは、どれも同じような形で検討されているように感じました。

めあて、考え方、まとめ、振り返りといった板橋区授業スタンダードに沿った事業が実施しやすい構成、このようなものがされているという印象は強く感じました。

そして、ノートの作り方についても、具体例はイラストなどで資料を示されておりまして、学習の取組に大変参考になるといったところが強い印象を受けました。

このようなところを踏まえまして、私の方からは、大日本図書、日本文教出版、東京書籍について推薦させていただきたいと思います。

大日本図書につきましては、現在、採用されている教科書ということで、実際、現場でも使い慣れているという声を聞いていまして、また、内容につきましては、これまでご意見いただいた委員の方々の意見と私は同感ですので、あまり多くは語らずにいきたいとは思うのですが、やはり他者の考え方、また、自分の考え方を説明するというところでは、非常に詳細に示されている、詳しく説明されている。

先ほどもページで示されていましたけど、１１８ページ、黒板に３者の意見が書かれているようなところ、そのようなところについては非常に分かりやすい、同じような、自分もこのような考え方だとか、そのようなところが授業でも聞こえてくるのではないかという、想定させるような表現がされていて非常によろしいかと思いました。

次に、日本文教出版につきましては、１年生の教科書で、絵本のような表現で保育園や幼稚園でこれまで生活してきた様子をイラストからイメージさせること

で、数の意識から数字での理解につながるような表現がされているところを感じました。

第２巻では、足し算や引き算においても、イラストで考え方を導きながら理解を促している、温かみのあるイラストは非常に子どもたちにとっても親しみやすさを感じるのではないかと思いました。

２年次以降の学年においても、個別最適な学びに向けて、巻末に２０ページ近くにわたって、知識が学べるページがあったところが印象的でした。これは漫画のようになっていて、学習進度が進んでいるような子どもたちなんかは、さらなる理解に向けて興味を引くような内容に思えました。

また、その６年間のまとめ問題や段階を踏んでチャレンジできる問題集があるというところは、非常に自学自習が進みやすいように感じました。

そして、やはり個人の学習進度別に勉強していくというところになると、授業の進み度合いと自分の理解度合いというのがまた異なってくることがあると思います。

この教科書には、しおりのひもがついていて、どこまでやったかとか、そのようなところが確認できるようなものもついていて、この辺りも便利さを感じました。

また、デジタルコンテンツに関しても取り入れられているので、自学自習を進めていくに当たっては非常に使いやすいのではないかという印象は強く受けました。

東京書籍さんにつきましては、非常に印象的なところは、大日本図書などと同様に、１年生の第１巻がＡ４サイズになって、大きくなっているところが特徴的でした。

非常に、これも幼稚園、保育園からの接続に意識がされていて、カードの導入から数字の概念を理解していくに当たって、アプローチしやすくなっているというところを感じました。

また、教科書とドリルを併用するような構成になっているというところ、これは同じような感じなのですけど、特に初めの方は図やますが大きく取ってあって、数字などを書き慣れていない子どもにとっては、最初は大きなますから書いていくことができるというところ。

さらに学習進度が進むにつれて、適切な枠の大きさに調整されているというところは、児童にとっても、教員にとっても使いやすいのではないかと考えられます。

また、動物のイラストなどと、数ブロックの絵、図が平行に記載されているところから、数の概念の認識から、数字としての理解、そこから算数的な考え方に導きやすいように工夫されているという印象を受けました。

同様に、第２巻の方では、イラストや写真を視覚的に感じながら、動作として、実際、教科書の紙面上に数ブロックを並べられるように工夫されているというところ、このようなところが目で見た考え方を実践しながら手順を踏んで学べるスタイルとしてはいい構成なのではないかと、学習の流れがつかみやすいというと

ころや指導しやすさなどを感じました。

２年次以降の学年においても、随所に、同学年相当の子どもの写真が使われていて、考え方などを実際にイメージしやすく、親しみやすさ、親近感などが感じられました。

また、教科書を活用した個別最適な学びに向けては、理解の進んでいる児童はもっと学習したいときに見てみようというところから、単元ごとのまとめがあって、他学年にも振り返ることができるというところで、自学自習を推進できるのに活用できると感じております。

本文で、あと特徴的だったのは、太文字だけではなくて、特に重要なポイントはマーカーで強調されていて、このようなところは、実際、自分のノート作りの参考にもなるのではないかと、よく工夫されているなと思いました。

まとめますと、推薦させていただいたこの３社の教科書につきましては、板橋区授業スタンダードに沿った流れで構成されていて、今後の学習につなげやすい表記が各所に見られております。

１年生に関しましては、幼保小接続の流れに対応した教科書の使い方ができるように、色々な工夫が各所に認められました。

あとは、各学年を通じて学習を見通せる記載、最初の目次の方とかが単元の系統性や学習のつながりが非常に分かりやすく、個別最適な学びに向けた学習目標といったところを意識しながら学習を進められるように感じられます。

各社ともに、同じような視点で内容の検討がされている中、学校現場で様々な進度別学習への使用、子どもたちが読みやすく、先生が使いやすいという視点から、以上の３社を推薦させていただきます。

教　育　長　　ありがとうございました。

私の方も、この６社の教科書を読み比べるのは大変だったのですけども、どの教科書も、それぞれ問題解決型というか、課題解決型、あるいは協働学習、あるいは、個に応じた指導ということが盛り込まれている教科書ではあるなと思いました。

そのうち、私が３社ピックアップしたのが、まず１つは教育出版です。

学び方を学ぶ、問題発見力・解決力、追究モデルとして、「はてな？」、それから、「学びを深める問？？」「なるほど！」「だったら！？」という、子どもの問いの連続で授業を構成しているところが、なかなか面白い構成だなというふうに思いました。

また、各単元の中心となる見方・考え方を「つながる見方」で振り返って、単元の後半の問題解決で、もう一度、それを活用する構成にもなっていました。

「なるほど！」は、見方・考え方のまとめを子どもの言葉で表現する活動を促進するものになっているなという感じがしました。

それから、東京書籍については、５年生まで分冊ということとともに、問題解決のプロセスが板橋区授業スタンダードと共通しているし、ノートの取り方も分かりやすいなというふうに思いました。

全体を通して非常に細かい点まで配慮されている内容であって、教科書を用いて教科書で学ぶという、読み解く力の手法をカバーする教科書であるなというふうに思いました。

キャラクターの６人の児童のコメントが子どもたちにとって大変参考になるし、興味関心を高めることにつながると、見ていて、にこやかになっている自分を発見しました。

また、まとめというのが随所にあって、まとめが分かりやすく、学習に遅れがちな子どもたちにとって振り返るのに役立つ気がします。字体自体は、もう少し大きい方がいいかなというふうに思いましたが。

できるようになったこと、次に考えてみたいことの子どもたちの発想を広げることも可能かなというふうに思いました。

「補充問題」「おもしろ問題」「振り返りコーナー」など、工夫が見られます。答えも記載させて、自分で学習できるようにしてあるというところ。

それから、学年の初めにノートの作り方を具体的に例示してあるところもいいなというふうに思いました。

そして、私がいいなと思ったもう１冊が大日本図書で、大日本図書のいいところというのは、どのように学ぶかという視点が存分にちりばめられているなというふうに思っています。

子どもたちにとっても、若手教師にとっても、分かりやすい内容表記がされているということ。それから、例えば８ページ、９ページ、これ多分、どこかの学年の問題だと思うのですけど、ノートの書き方の例がまさに授業スタンダードにぴったりのノート展開になっています。

問題があって、めあてがあって、自分なりの考えがあって、友達の考えがあって、まとめがあって、振り返りがあると。振り返りも、こういう振り返りがあると、友達相互のいわゆる協働学習の１つにも考えられるかなというふうに思うのですが、ただ、面白かったとか、難しかったではなくて、友達のよさを表記するようなことができていければいいなというふうに思っています。

それから、先ほど長沼委員がおっしゃったように、私も少し目次が、前の学習と後の学習ということが、なかなか面白いなと思ったのですけども、中学校まで広げているというところを、もう少し大日本図書は工夫をすればいいのかなというふうに思いました。

あと、言葉の定義がしっかりされているなというところは非常に分かりやすいです。例えば４年の折れ線グラフのところは、「上のように変わっていくものの様子を表したグラフを折れ線グラフといいます」と、他社のところは、「気温のように変わっていくものの様子を表すには折れ線グラフを使います」と言っているのですが、「折れ線グラフとは何ですか」といった場合に、こう「変わっていくものの様子を表したグラフを折れ線グラフといいます」というような言い切り方をしているということ。

それから、４年生の割り算のところでは、１００の位に商が立たないときは、１０の位から商を立てて計算しますというやり方が、きちんと丁寧に書かれてい

るということです。

４年生の教科書で、１つ、やはり他社と少し違っているなと思うところは、写真を子どもたちの学びの中に大胆に使っている。例えば３５ページ、３７ページは４年生の教科書ですが、割り算の仕方を考えようという内容ですが、ここに子どもたちが、例えば１人で教科書を使って学習するときに、ぱっと次のページ、３８ページを開けると、これだけの写真を使って、しかも発表した人と説明している人が、これは違うのではないかなと思うのですよね。

このようなことが学習の中で起こってきて、それがとても分かりやすく書かれてあるというところが、この教科書、次のページの４０、４１ページにも、これだけの枚数を使って、ページ数を使って説明しているというのは他社に見られない１つの大きな特色であるし、子どもたちが自分で学習する際に、これをきちんと読めば分かってくるのではないかなというふうに思いました。

それから、全学年に、「読み取る力をのばそう」という、これも先ほど来出ていますけども、そういうコラムがあって、読み解く力につながっていくだろうというふうに思いますし、「考えは正しいでしょうか。その訳も説明しましょう」という、論理的思考力を育むような問いの投げかけも出ていました。

それから、２年から６年生までのプログラミングのコーナー、アンプラグドとビジュアルの２教材をコンテンツとともに設定されていました。

それから、５年生の教科書も、少し皆さんはどう思われるか分からないのですが、大日本図書が１４２ページ、それから、東京書籍が２７ページ、これも、単位量当たりの大きさは、５年生にとってみると、結構ややこしい部分ではあるのですが、これを開けていくと、今度は写真ではないのですけど、大日本図書の場合は、大きな黒板の図が示されていて、その中で考え方を練っているという場面があります。

普通の教科書は東京書籍のように、線分図や文章で書くわけですが、どちらが子どもたちが理解しやすいだろうかということを考えたときに、私は大日本図書の方が分かりやすいのかなという気がしました。

それから、先ほど来出ているデータ分析というところで、６年生のところなのですが、東京書籍が１０２ページ、それから、大日本図書が６７ページからなのですけど、これ、少し特徴的なのは、大日本図書の方は、全ての内容を、結構早い時期にやっています。

東京書籍の場合は、ヒストグラムの方は後の方に回しているのですが、データの特徴を調べようというのは、できるだけ早く学んだ方が色々な教科に転用できるのではないかなという気が少ししました。

それから、これを見ていて、ドット、プロットとかが色々出てきているのだなということも少し思ったのですが、大日本図書のよさは、最後に、８４、８５ページで先ほど出たように、「表やグラフを生かそう」ということと同時に、その次から確かめの問題というのが出ています。このようなことできちんとフォローをしているというところがよさなのかなというふうに思っています。

東京書籍さんも内容的には丁寧に組んでいますので、このキャラクターがよく

色々説明をしてくれていますので、分かりやすい内容ではあるなというふうには思っています。

私としては、どちらもいいなというふうに思っています。大日本図書と東京書籍、両方を推したいと思います。

ただ、少し、これは高野委員と私も少し共通するのですが、この中学年、高学年については１冊でもいいのかな、合冊でもいいのかなと思うのですけども、２年生辺りが分冊になっていないというところの教科書の重さというのはどうなのかなというふうに、少し悩みもあるのですが、その辺りのことはいかがでしょうか。

一応、皆さんのご意見は大日本図書と東京書籍が多いのですが、その辺りはいかがでしょうか。

はい、どうですか、高野委員。

高 野 委 員　他の４人のご意見を伺っていて、気がつかなかった大日本図書のいい点がよく分かりました。

私は最初にこの教科書を使うようになったときにも、教育長が何度もおっしゃいましたように、教室の場面の写真、その中で、児童が発言し合って、お友達の意見を聞いて、自分の考えをもう一度考え直していくような、そこがこの大日本図書の魅力だなというふうに思っていたのですが、今回も皆さんのご意見を聞いて確認することができました。

ただ、重さについては、少し算数は、やはり低学年の人たちも、学校に置きっ放しではなく、持ち帰りする機会が多いので、そこはすごく気にはなるのですが、やはり内容として、大日本図書でよろしいのではないか、その点については、内容的にそれを上回るものがあるというふうに判断いたしました。

教　育　長　青木委員、いかがですか。

青 木 委 員　すみません、私は、大日本図書さんと教育出版さんだったので、東京書籍の方は言っておりませんでした。大変東京書籍も本当にいいところがたくさんあるのと、ただ、内容的にというところと、少し違う視点で見ちゃった点もあったのかなと思いましたが、トータルで考えて大日本図書かなというふうに思っています。

教　育　長　はい、ありがとうございます。

長沼委員、いかがですか。

長 沼 委 員　私は、この２つの会社を推して、大日本図書の方を一番にしたのですが、今のお話でいうと、まず重さですね。これは算数に限らず、全ての教科に共通して、上下に分かれているものと、そうでないものがあって、これ、学校の先生方のお話や調査委員会の先生方のお話では、両方の考え方があるとおっしゃっていましたね。

つまり、軽い方がいいという捉えもできるし、一方で、内容で元に戻って見たいときには、上下分かれていない方がいいということをおっしゃった場合もありましたので、それは本当にケースバイケースでしょうということで、両方の意見が出てきました。

これは私の個人的意見ですが、算数、数学に関しては系統性が高いので、前の学習内容を振り返る場面も恐らくあるだろうと、特に自学自習の場合にあるので、上下分かれているよりは、重たいのですけど一緒になっている方がいいだろうと思います。

ただ、置き勉があるとすれば重さは関係ないのですが、多分、算数だとドリル的要素が多いので、持って帰る率が高いのではないかなというのも推察されます。

教　育　長　　ありがとうございます。

野田委員、いかがですか。

野 田 委 員　　大変難しいところではありますが、最初に中川教育長がおっしゃっているように、重さの面でいきますと、確かに分冊になっているところが、やはり今ご意見いただいていますように、算数に関しては、学校に置いて帰るということはあまり考えられなくて、基本的には、毎日、学校に持っていって、持って帰って、家で学習するといったところが想定されます。

実際に、我が家でもそのように行われていますし、タブレット学習が進んではおりますが、やはりこの教科書での解説というところ、ノートの書き方、そのようなところは、教科書に頼らざるを得ないというところであれば、内容に関して、非常に重視するべきところであります。

あとは、教育長からのお話もありましたけども、この単元の順番、大日本図書さんの方は、比較的そのようなところが他の教科書と変わっていて、６年生だと円の面積なんかが大分前に出てきているというところが印象的で、これは現場の先生からも少し話を、声を聞いたところもあって、賛否、声をお聞きしています。

データに関しては、確かに最初の方に把握しておく必要があるのではないか、私も同感です。円の面積に関して、それほど難解な単元ではないとは思いますが、やはり理解に戸惑ってしまうと、つっかえてしまうのかなというところで、最初に取り組むのが大変な場合もあるのかなということが想定されましたが、やはり総合的に考えると、内容重視というところで、重さに限らず、それを上回る内容というところでいけば、大日本図書になるのかなという、なかなか少し決めがたいところではあるのですが、私の意見とさせてください。

教　育　長　　ありがとうございました。本当になかなか難しいところではあるのですが、皆さんのご意見を伺って、大日本図書に「算数」については仮採択することにご異議ございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

（異議なし）

教　育　長　　それでは、「算数」については大日本図書を仮採択することといたします。
次に、「理科」の審議に入ります。指導室から願います。

指 導 室 長　「理科」につきまして、６社でございます。東京書籍、大日本図書、学校図書、教育出版、信州教育出版社、新興出版社啓林館から採用をお願いいたします。

教　育　長　　それでは審議に入ります。「理科」についてでございます。よろしいですか。
では、高野委員、お願いします。

高 野 委 員　理科についても、５社それぞれ教科書を見ましたが、どこの教科書も写真とか、イラストが大変分かりやすく、実験とか、観察などについて丁寧に示されていて、どの教科書も大変いいなと思いました。

その中で、特に私は東京書籍の教科書がいいと思いました。それは、理科の学び方がすごく問題解決のプロセスが明記されていて、内容がそれに沿った展開がされていました。

まず、教科書のページの左に流れを示す線が描かれていて、これを見ると、今、自分がどのようなことをやっているのかということがとてもよく分かります。

授業中はもちろんですが、教科書を見ながら自分で、家庭で学習するときにも、児童にとっても大変分かりやすいのではないかと思います。

また、単元の振り返りと確かめの問題はその続きのページにあるので、見やすく、使いやすくなっています。

「確かめよう」というのが、直接、書き込めるようになっている点も大変いいのではないかと思いました。

「広げよう！理科の発想」、それから、「理科の世界探検部」など、コラムが豊富に用意されていて面白いものがあります。

私が面白いなと思ったのは、４年の１４７ページで、「理科の世界探検部」の「こんなところにも！」というところで、ふたのない冷凍庫の不思議というのがあって、コンビニとかスーパーに置いてあるふたのない冷凍庫があって、それがなぜふたがなくても中の物が溶けないかという秘密をここのページで示しています。

子どもにとって、とても身近で、また、買い物に行ったときとか、そういう生活の中で理科に触れる、すごく役立つページだなというふうに思います。

それから、同じことで、６年の６７ページでは、「広げよう理科の発想」ということで、アイガモと協力して米作りということで、アイガモ農法について説明しています。ここでは、また、食物連鎖と生き物の数というところにも触れていて、これもまた子どもにとって興味深い内容ではないかなというふうに思いました。

あと、単元の初めの「思い出そう」というところがありますが、そこで今まで

習ったことや、他教科で学んだことなど、生活の中で経験したこととのつながりが分かるようになっています。

例えば６年の４６ページでは、しおれた植物に水を上げてみようということで、しおれた植物が水を上げたら真っすぐ立つ、水を得て真っすぐ立つことを考えるのですが、そこで３年生の理科で学んだ植物の体はどのような部分からできていたかなということを思い出させています。

他にも、音楽との関係ですとか、体育で習ったこととか、他の教科、また、生活の中で経験したこととつなげていくコラムになっています。

あと、東京書籍の場合は、紙面が大きいので、実験写真やイラストが大きくて見やすくなっています。字体も、行間、それから色調などが大変適切で見やすくて、また、安全面の注意事項が赤字で「危険」と強調されています。

あと、巻頭の写真つきの「理科で学ぶこと」というのが２ページのところにあるのですが、この教科書でこういうことを学びますというのが写真つきで分かりやすく説明されています。

あと、この目次が裏表紙にあります。これが私も教科書を使っていて、とても使いやすかったですね。

前のページに戻らずに、ぱっと教科書の後ろを見て目次があると、実際に使うときに、とても便利なのではないかなというふうに思いました。

東京書籍の他にもう１社は、学校図書がいいのではないかと思いました。

学校図書の場合は、問題解決のプロセスが、「見つけよう」「調べよう」「まとめよう」の流れで統一されています。

問題解決のプロセスの過程が確実に行えたかどうかが、児童自らが解決できるようなチェック欄がついています。

観察や実験の準備などにも、チェック欄がついているので、とても使いやすいし、確認しやすいなというふうに思いました。

例えば、４年の水を熱したときの様子というところがあるのですが、この実験で用意するものが、実験用のガスコンロ、丸底フラスコ、温度計、沸騰石など、書いてあるのですが、そこに実際にチェック欄がついて、チェックをしながら準備の確認ができるようになっている点が面白いなと思いました。

あと、単元の導入で、「できるようになりたい」という、単元の学習で身につけたい力が示されています。そして、それに沿って学習していって、単元末で学習を振り返って、できるようになったかを自ら確認してチェックするようになっています。

学校図書は、すごくチェック欄が多くて、自分でそれを確かめながら進めていくところがいいなと思いました。

実験の後に、「やってみよう」「もっと知りたい」のコーナーで、学習事項を活かした発展的な問題や実験が紹介されています。

例えば５年の１６、１７の振り子の運動では、「やってみよう」で、この振り子の学習をした後に「１秒振り子を作ってみよう」ということで、そして、その後、「もっと知りたい」というところでは、ここで使った時間を調べたり、算数

で習った平均というところをやっていますので、理科の中で算数の学習をもう一度活かしていくというふうになっています。

この「もっと知りたい」というところは、身近な暮らしと関連づけたり、発展学習に活かせる構成となっています。

あとは、４年の１６３ページのところに、「金属の温まり方」というところがあるのですが、この実験のように、実験器具の使い方を１つずつの手順ごとに写真を使って説明しています。こうやって細かく手順ごとに説明していくことで、児童が視覚的に捉えて、分かりやすくなっているのではないかと思います。

私は、この５社のうち、東京書籍、それから、学校図書の教科書がいいのではないかと思いました。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、青木委員、お願いします。

青 木 委 員　　理科も発行社が５社ありまして、大変悩んだところですし、個人的には理数系の人間ですので、どれも面白い、非常に興味深く見てしまったので、甲乙つけがたいというのが正直なところではあります。

少し参考にさせていただいたのが、分かりやすいという観点がどうだったのかというので、区民アンケートを見せていただいて、その中では比較的２社ぐらいに集まっていたというところを中心で見ながら、どこがよかったかなというのを個人的に確認してみました。

まず、東京書籍さんなのですが、見て、内容の中で重点の置き方というところに注目しました。

理科は、色々、小学校の理科は、いわゆる上の学年でいう物理、化学、生物、地学といったものも全部盛り込んでいるところですので、もうテーマとしては盛りだくさんという話になります。

その中で、やはり注目すべきところはどこかというと、身近なところで、例えば教室や学校の中で実験ができるというのは、それで体験してもらうということで学ぶというやり方もあろうかと思います。

ところが、そうではない部分というのは、教科書でふんだんに、きちんと細かく丁寧に説明する必要があるのかなというふうに思っていて、その視点から見てみますと、例えば、東京書籍の５年の新しい理科の中で象徴的だったのは、１４ページの気象の話をお願いします。

天気の予想、観察の中で、これは各社必ず単元で設けて出しているわけですが、この１４ページ、１５ページは、他社と比べて、非常に緻密というか、細かく、かつ見やすく、比較がしやすいというような作りになっているかなというのを強く感じました。

それから、各社そうなのですが、算数と同じで、理科も好きになってもらいたいので、教科書のテーマも大事かなと思いまして、東京書籍さんは「新しい理科」、大日本図書は「たのしい理科」。

「たのしい理科」の方が何となく子ども向けかなと、そういうふうに思ったりはしたので、テーマづけも大事かなと思いました。

あと、扉のページ、１ページ開いていただいて、最初のところというのが、多分、最初のきっかけ作りに重要で、興味関心はということをかなり強く打ち出したいというページかなと思っていまして、そうした中で、何かすごくピンときたのは、東京書籍の５年生で、「理科で未来を予想しよう」というのは、これはまさにキャッチーなキーワードだったかなと思ったところも引っかかったわけです。

そのようなところも重視しながらなのですが、先ほど高野委員の中でもあったわけですが、東京書籍さんは理科の学習と身近な生活との関わりというのを「理科の世界の探検部」「広げよう理科の発想」といったところで示されているところ、あと、デジタルコンテンツが豊富であることというのは、これも、当然、注目に値するところですね。

確かめ問題が続きのページがあって、児童が使いやすいというところが整理されている。それと、他の教科でも挙がっているＳＤＧｓやプログラミング、これに関するページが設けられていて、他教科、それから、発展的な学習につなげるところの意識がされているといったようなところが突出していたかなと思います。

その他の部分でも、高野委員からあったところというのはかなり重要なポイントかなと思いました。

それから、私自身がもう１社挙げるとすれば、先ほども少し言ったのですけども、教科書のテーマとして、楽しい時間がいいな、大日本図書さんのなのですが、何年生では、特にここという形で、やはり重要度ですね、学年ごとに学ばせたい理科の力というのを明確に提示しているめあてというようなところになりましょうか。

それから、やはり理科の世界の先にあるものというか、ここで勉強することが何につながるかというようなところに夢をはせるという意味で、サイエンスワールドのページがあって、中学校への接続ですとか、興味関心を持った子たちがもっと勉強したいというところで、それを生かすためのテーマづけ、総合学習や何かにも少し活かしていけるかなというようなところが入れられているところ。

さらには、実験なんかに関しては、「ここに注目」というところで、実験する際のポイント、児童が、ある程度見通しを持って実験をすることが必要だと思うのですが、注目すべき点というのをこのように挙げていただくと、重要なところを注意深く観察、分析することができるかなというようなところで思いました。

私の中ではＳＤＧｓとの関わりにこだわっているところとか、やはり中学での発展というのにこだわったところ、あとは見やすくするために色分けというところをきちんとされている点、このようなところがもう５社全部、色々な形で工夫がされているので、本当に甲乙つけがたかったのですが、私としては、挙げるとすると、東京書籍さんと大日本図書さんという形になります。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

それでは、長沼委員。お願いいたします。

長沼委員　理科につきましては、まず、東京書籍さんの、今、板橋区で使っている教科書がありますので、こちらから、まずお話ししますと、最初は、理科の学び方というのが書かれていて、例えば５年生で言えば４．５ページですが、このプロセスが、「問題をつかむ」「調べる」「まとめる」で、その後、「注目する」「振り返る」、最後が「成長する」という、ここがポイントかなと思いました。

振り返って終わるのですが、最後が「成長する」、つまり学ぶ前と学んだ後の違いというのを比べて成長を感じ取りましょうという、ここがとてもすてきだなと思って見ておりました。

随所に協働的な学びを活かしていくことができる仕組みになっていまして、とりわけ実験は大概１人ではなくて、複数の人が一緒にやるケースが多いので、対話的な学びとか、協働的な学びはどの社も担保されているかなというところでありましたが、東京書籍さんについても、引き続き、重視されているということを思いました。

それから、６年生でいうと、これもいいなと思ったのは、４５ページにありますように、社会で活躍している方々のページでは内科と外科のお医者さんが出てくるわけです。人体のことを学んだ後に、お医者さんの働きというのでしょうか、これを紹介するようなページがありまして、理科で学んだ内容が社会でどのように活用されているのかというのが分かるようになっていること。そして、それがキャリア教育の視点としても活用できるということが、非常にいいなと思いました。

また、ノートの書き方についても、例えば５年生で言うと、端末なのですが、「理科の調べ方を身につけよう」というところで、ノートの書き方、それだけじゃなく、発表の仕方とか、話し合いの仕方とか、あるいは、その次のページではコンピューターの使い方と丁寧に描かれていて、理科についての色々な学び方ができると思いますが、それぞれに応じた形の、いわゆるノウハウがきちんと押さえられているので、自学自習もやりやすいと思いました。

総合的に見ると非常によくできていると思って、使いやすい教科書になっています。

あとは、発展的な内容につきましても、６年生の５７ページ、「理科の世界探検部」で見ると、こういうページが随所に散らばっていて、少し視野を広げてくれる、そういう仕掛けが随所に出されております。いいなと思いました。

それから、もう１つでいうと、教育出版を挙げたいと思います。

教育出版は、社会科のところでも申し上げたのですが、ＳＤＧｓに関するこだわりが一番あって、理科についてもかなり様々なところでＳＤＧｓの観点がちりばめられている。一番いいなと思ったのは、全学年、冒頭のページが全てＳＤＧｓなのですね。

例えば３年生でいうと、ぱっと開くと、「なぜを探しに行こう」ということで、ＳＤＧｓの紹介と７番のことが出てくる。

４年生でいうと、開くと、今度は「この先を想像しよう」ということで、障がい者スポーツのこと、パラリンピックでしょうか、１０番と１７番。

それから、５年生は開くと、これは川の水ですね。水害のことで、水をためる各施設ですが、１１番と１３番。

６年生については、開くと、これは知床ですが、自然の豊かさということで海ですね。１４番、１５番ということで。もう全て冒頭はＳＤＧｓなので、これだけ見ても理科というのは、多分、ＳＤＧｓに関わる学習で一番関連性があるというか、環境教育の視点も入ってきます。板橋区は環境教育を非常に重視していまして、エコポリスセンターという独自の施設を持っていて、しっかりと小・中の先生方は取り組んでいますので、理科はＳＤＧｓをしっかり盛り込んでいる会社のものを選んだ方が私はいいなと思っておりまして、この教科書を推そうと思います。

さらに言うと、このアイコン、冒頭だけじゃなくて、様々なところにこの番号が書かれたＳＤＧｓアイコンも入っています。

加えて、このいいところは、裏表紙なのですが、全ての学年が安全の手引きになっていて、理科は実験が非常に多くて、とりわけ対話的な学びとか、協働的な学びには、実験をする場面がとても多く出てくるのですが、この後、今日は図工も出てきますが、図工とか、理科というのは安全に関する担保は重要で、特に実験をするときには必要になってきます。先生方もかなり気をつけなければならない視点だと思います。そのことが裏表紙にあるということで、ぱっと見て、こういうことに気をつけようということで、先生もそうですし、それから、これを読む児童も、お子さんもしっかりと把握できるという点では、これはこの会社の特徴だなと思いました。

というような観点と、それから、中身につきましても、これはどの社も共通していますが、写真、イラストの多様さ、それから、「確かめよう」というページが穴埋め問題になっていまして、しっかりと知識を身につけていくことのチェックもできるようになっているということで、総合的に見ると、私はこの２社を推したいと思います。

東京書籍がいいのは、デジタルコンテンツが大変充実していて、理科は動画を見たり、写真を見るということが大変重要で、もちろん、この教科書のページにも非常にきれいな写真が、どの社も載っていますが、さらに、ＧＩＧＡスクール構想で端末が入っていますので、これを活用して、デジタルコンテンツを見るというのも、多分、そういう機会がますます増えるだろうということが想定されますので、その多さから言っても、東京書籍は多く群を抜いているということがあります。この２社を推したいと思います。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、野田委員、お願いします。

野 田 委 員　理科について述べさせていただきます。私の方からは、これは理科の教科書を見ていくに当たって、観点として、やはり板橋区授業スタンダードに沿った流れで構成されているということ、単元ごとの学習の見通しの立てやすさ、読み解く力の育成についてというところは全てに共通するかと思いますが、これについては、理科について非常に考え方としては重要な流れになっていくかと思っていますし、低学年におきましては、生活科で学んだ様々な身の回りの発見や気づき、このようなところを振り返りながら、理科の学習の中で、児童が問題を解決するための基礎を固めるために学習をしていく教科なのではないかということを考えております。

また、自然の現象を含めて、色々な観察、そのようなところは他の教科にもつながるところが非常に多く、実生活においても関連していくところが意識できるというところ、そのようなところに導く教科書であるべきでないかとは思っております。また、自学自習ができること、教員の授業の進めやすさなどをポイントとして拝見していきました。

個人的な考えと全体的な構成というか、問題解決の流れというのが理科においては非常に重要かと思っておりまして、さらに、発達段階に応じた気づきというものが、現場では、たくさん、日々、生まれていると思います。

ということは、児童が考えやすいこと、そこに導くことというところが教科書に求められるところかと思います。また、発達段階というところから考えていきますと、大体３年生につきましては、例えばこの東京書籍の３年生の１８ページ、最初は比較しながら色々観察していくと思います。

このヒマワリが、昨日から、また次に見たときと比べて、どうやって成長しているかというようなことを比較しながら、色々、考えていくのが３年生の時期で、そのようなところを踏まえて４年生になってくると、色々な要因と関係づけて考えるようになってくると。

５年生でいきますと、５９ページに、今度はヘチマの花の話になるのですけど、条件を制御していく。受粉をさせた場合、受粉をさせない場合というような形で、条件を制御しながら考えるということをしていって、６年生になってくると、多面的にこのような物事、これまで勉強してきたことをこの考えの積み重ねともに考えながら、物事を多面的に考えるといった形で、段階を踏んで、成長度合いに合わせた考え方というところが見受けられていきますので、それに沿った形で教科書も進んでいくということが望ましいと思っております。

この理科に関しましては、私は東京書籍を推薦したいと思います。

これまで申し上げました観点からも、板橋区授業スタンダードに沿った流れで、めあて、内容について、問題解決のプロセスがとても詳しく解説されているとともに、丁寧に構成されているというところは感じられます。

「広げよう理科の発想」「次の問題を見つけよう」などの項目では、教科書を読むことで自己学習力が高められるような構成に見受けられます。

全ての単元で、他学年の理科や他の教科で学んだことや、高野委員にもご紹介いただいていますけど、実生活の経験を基に考えることができるような記載が取

り入れられているというところは特徴的かと思いました。

ノートの書き方につきましても、発達段階に応じた書き方、器具の使い方、まとめた内容について発表の仕方などが示されておりました。

一番私が評価させていただいたのは、６年生の７６ページ、７７ページなのですけど、「私の研究」というところで、ちょうど７６、７７ページぐらいでいきますと、６年生の全体の進み具合で３分の１ぐらいに来たところになって、これから小学校での学習の集大成に入ろうかというところで、実際にその研究に向けて、これまで実験とか、色々な観察というところは、相対的にいくと、その研究の一部になっていくわけなのですが、そこで、このようなことをしていく意味というのは、実際、この研究を進めていくためのプロセスの１つだというような位置づけにあるように見えますし、これから、これまで学習してきた内容をまとめていく、そして、最後、発表していくというようなところを考えると、理科の本質に迫る部分を一連のプロセスとして解説しているというところで、非常にここは、私は重要なのではないかと思っております。それに対する説明に関しても、簡潔で分かりやすく書かれているところがあります。

さらに、７７ページの上の方の「調べ方の工夫」においては、図書館で調べる、本で調べるといったことも書いてありまして、これは板橋区の授業でも図書館で調べる学習コンクールというのは推進していまして、これは板橋区の授業との関連性もイメージさせて学習ができるというところでは非常にいいのではないかと感じました。

理科でのこのような学習の事項を活用して自ら考えることで、思考力、判断力、表現力、このようなところをつけていって、学習の内容と身の回りの生活、社会との関連で、さらには中学校での学びへのつながり、このようなところが意識できるようになっていると。

長沼委員もおっしゃっておりますが、とにかくデジタルコンテンツの数が非常に多かったというところですね。そこから先についてはこの対象ではないのですが、算数のような学習進度に応じた学習のみならず、自学自習で色々なものに興味を惹かれて、そこに行ってさらなる情報を得るとか、確認をする、そのようなところにも活かせるということで、可能性としては非常に大事な要素でもあると考えております。

また、この教科書の内容の中での写真やイラスト、活字、文章量、文字量、そのようなものも適切で、ユニバーサルデザインにも対応しているというような印象を持ちまして、このような評価となりました。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、私の方ですが、私も、３社選んでみました。

１つは、まず学校図書ですが、全てが問題解決型の学習、学びのラインでつないでいて、学習の流れを分かりやすく示しているというのは、これは５社とも全てそうなのかなというふうに思いました。

問題の把握をして、調べて、まとめて、広げて、振り返る、このようなラインが、今まで以上に、左側に一本のラインが出ていて、とても分かりやすいなと思いました。

学校図書は教育出版と同様に、ＳＤＧｓも非常に重要視しているなというところを感じました。

それから、学んだことに、先ほども出ているのですけども、「やってみよう」というコラムがあって、そして、「もっと知りたい」、さらに、また「やってみよう」というように、例えば６年生の２５ページ、酸素と二酸化炭素を半分ずつ混ぜた気体ということを１人でやってみようということでやってみて、それから、２７ページで「もっと知りたい」、さらに２９ページで「やってみよう」というような形で、何か子どもたちの興味関心をどんどん広げていって、さらにここからまた何か気づくことがあるのかなということを感じました。

そして、学びを活かした深める活用というのも示されていて、そのようなものも理科の世界では大変重要なものではないかというふうに思いました。

それから、ＱＲコード等、ＩＣＴ機器を活用すると効果的に学習できると考えられる内容のところにＩＣＴマークというのが配置されていて、教師にとっても使いやすいのではないかというふうに思います。

それから、児童の発言例をイラストで示しています。発言例は、児童が個人で考えるためのヒント、あるいは対話的な学びのヒントになりそうだなという気がしました。

単元や題材ごとに「振り返ろう」があり、その単元の知識及び技能、思考力、判断力、表現力等について学習を振り返ることができるような気がします。

続いて、啓林館ですけども、啓林館も同じように学びのラインがしっかりできていて、「見つける」「調べる」「まとめる」というラインができている。分かったことから新しい不思議を見つけ、次の問題につなげる流れとなっているように思いました。

タブレット活用については巻頭で示してあります。

それから、６年生の２１０ページに「算数の窓」というのがあるのですが、これは表やグラフ等、あるいは線分図までが書いてあるのですが、算数の知識・技能が必要なときには、この２１０ページを参照できるということで、理科と算数の結びつきの強さというのを感じさせてもらいました。

それから、「振り返ろう」のまとめノートがとても分かりやすくて、振り返りの際の参考となるというように、全学年、感じているところです。

また、単元や題材の終わりに「確かめよう」があり、その単元の知識、技能、思考力、表現力、判断力について学習を振り返ることができます。

それから、「活用しよう」「もう一度考えよう」「暮らしとリンク」「理科のひろば」のような特設のコラムがあって、実生活とつながりのある内容で、大変興味深いと思いました。

それから、「初めに考えよう」「もう一度考えよう」というのがあって、同じ問いかけに、始めと終わりに答える、比べることで、自分なりの成長、自己肯定

感というか、自己有用感というか、そのようなものがつかめるのではないかと思いました。キーワードに緑のアンダーラインが引いてあって、ここに「比べる」とか、「つながりがある」といったような理科の見方・考え方に関するものがチェックできるようになっています。

それから、これも６年生なのですけど、９０ページから９３ページ、理科室を使う際の留意点が詳しく書かれていて、このようなものも、もしできればもっと早い時期にあってもいいのかなという気がしました。

それから、東京書籍ですが、東京書籍は、教科書が大きいせいもあるのでしょうが、とにかく写真がダイナミックな使い方がされているなというふうに思います。

３年生のチョウの羽化、２６ページでしょうか、これも非常に分かりやすくて、少し一瞬ドキッとするようなところですが、２ページにわたって丁寧に写真が出ていて、このようなものを見ながら、実際の部分と比較ができるのではないかなというふうに思いました。

東京書籍も、問題をつかむ、調べる、まとめる、広げる、振り返るといったような学びのラインがしっかりできているなというふうに思います。

３年生、４年生では「考えよう」、５、６年では「考察しよう」。観察の実験の結果からどのようなことが言えるか考え、分かったことを理科の言葉を使ってまとめていく参考となる。

ただ、日常の言葉を使うのではなく、理科の言葉を使って書くということを参考にできるような例示が示されております。

「広げよう理科の発想」において、学んだことを活かして自分なりに考えるコーナーが特設されています。

それから、これは、色々な方々がおっしゃっているように、学んだことを深めるために「理科の世界探検部」、これはキャリア教育につながったり、ＳＤＧｓにつながったり、あるいは、身近な生活のことに触れたりして、大変興味深いと思いました。

単元や題材の終わりに「確かめよう」があって、その単元の知識・技能、思考力、表現力、判断力について学習を振り返ることができます。

文章が文節で改行をして読みやすくなっているのも１つの特色かなと思っています。

あと、児童の発言例をイラストで示していて、発言例は児童が個人で考える際のヒントや、対話的な学びのヒントになりそうだなという気がしています。

ここも「学ぶ前に」と「学んだ後に」というのがあって、同じ問いかけに答え、その答えを比べることで、自分なりの成長がつかめるのではないかと思いました。

また、ＱＲコンテンツが豊富で、工夫が見られています。

各学年の巻末に身の回りでプログラミングが活用されている事例が紹介されているのも特色だなと思いました。

それから、先ほどお話が出たように、安全面の注意事項が赤字の吹き出しで「危険」と強調されています。また、問題とまとめが緑色で統一されて、重要語

句が太字、緑色の下線で強調されているなどのところがございます。

私は、このようなところを含めて、東京書籍と啓林館を推薦したいというふうに思います。

以上ですが、各委員から東京書籍が推薦されておりますので、「理科」については東京書籍を仮採択することにご異議ございませんか。

（異議なし）

教　育　長　　それでは、「理科」については、東京書籍を仮採択することといたします。

では、続いて、「生活」の審議を続けていきたいと思います。

では、指導室長、説明をお願いします。

指 導 室 長　　「生活」につきましては、７社でございます。東京書籍、大日本図書、学校図書、教育出版、信州教育出版社、光村図書出版、新興出版社啓林館から採択をお願いいたします。

教　育　長　　それでは、審議に入ります。質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。

高野委員、どうぞ。

高 野 委 員　　生活に関しては、各社、大きな写真やイラストが鮮明で分かりやすく、１、２年生が楽しく学習できるようになっています。上巻巻頭には、スタートカリキュラムで活用できる内容が、それぞれ設定されていました。

その中で、私は３社。

まず、１社目として、東京書籍。東京書籍は、生活の上の方の３ページから「学校生活スタート」というのがあります。

こちらの方には、幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿がどのように発揮されているのかが絵や写真とともに記載されていて、幼保連携を意識して、入学直後、１年生に向けた活動を丁寧に扱っています。

ここのところに、他の社と違うのは、やはり、具体的に身につけたい力のどういうことが、例えば、今見ているのが４ページのところなのですが、生活の流れを見通して準備や片付けをするというのが「健康な心と体」、それとか、あと友達と言葉を交わし、心を通わせるというところが「言葉による伝え合い」などというふうに説明されています。

これは、すごく保護者の方がご覧になったときに、日常の何気ない活動が、この幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿のどういう場面なのかということが具体的に分かって、保護者の方にもぜひ読んでいただきたいなというページです。

また、本編に入りまして、小単元は見開き２ページで構成されています。問いが左側の上に大きく記載されています。そして、ビックリマークで気づき、クエスチョンマークで疑問や課題、ハートマークで関心など、児童の思いに沿った学

習展開がされています。

また、右のページの上には、約束としてどのようなことに気をつければいいのかなということや、あと、学校でこのような人に話をしてみようとかという活動の内容が右の上の方に分かりやすく示されています。

あと、上巻の２８ページのところなのですが、「たねをまこう」では、ページの大きさを変えて、種の様子、芽の様子、花の様子が横並びで見られるようになっています。

２８ページのところには、左側から、アサガオ、ヒマワリ、オシロイバナというふうに、種と花の様子が描いてありました。

次のページをめくっていただくと、３０ページには、それぞれ発芽したときの双葉の様子が出ています。そして、これを実際に比べることで大変分かりやすくなっているなというふうに見られ、工夫がされているなと思います。

また、あと、観察カードがたくさん提示されています。「見つける」「比べる」「例える」という３分類に沿って記載されていて、観察カードの例がたくさん、至るページに出ています。

それと、上巻の３４ページには、「コンピューターを使おう」という左の下のところなのですが、実際に１人１台端末を使って写真を撮る場面、また、大きくそれを広げて詳しく見る、それと、また、以前と比べるというような、１年生でも分かりやすい使い方が示されています。

あと、下巻の１２０ページには、デジタルアルバムとか、デジタル紙芝居、デジタル図鑑などが示されていて、そういう具体的な使い方が示されている他、下の段には「コンピューターを使って伝えましょう」というところで、その使い方の注意が具体的に示されています。

それと、もう１社が教育出版です。教育出版は、上巻の「はじめの一歩」というところで、上の段で小学校生活の様子を写真で示し、下の段では「入学前からしていたよ」をイラストで紹介しています。このように保幼小の接続が分かりやすく書いてあります。

あと、ページの上には、生活科の学習目標を６つの力として、見開き、左上の単元名のところに、サイコロのマークの中に６つの力が示されています。

例えば、上巻の２６ページでは、「たねをまこう」では「自分ができる」、そして、次の「毎日見よう」は「気づく」、それからまた、その次に、「毎日世話をしよう」では「考える」というような、生活科の学習目標を分かりやすく、学びの視点を明確にしています。

それから、「わくわくスイッチ」のページを活用して、一人一人の興味を探ることができます。

上巻の２５ページに「わくわくスイッチ」というのがあるのですが、これが花を育てた経験があるか、「きれいにさいてね、わたしのはな」という単元なのですが、そこで花を育てた経験があるかないか、花の名前を知っているかによって、「はい」と「いいえ」で進む方向が違っていて、校庭で花を見つけてみようとか、花の育て方を調べてみようとか、花を育てるときのコツを教えてもらおうなど、

それぞれのその子の経験とか知識によって目標が選べるようになっていて、それぞれ個別に、個に応じた支援が生かすことができるのではないかと思います。

それから、同じく上巻の２９ページのところで、植物の観察の記録や、あとは下巻の１２８ページなどで、コンピューターを使うとき、１台端末を使うときの注意とか利用法が書いてあります。

１人１台端末の効果的な活用方法が分かりやすく紹介されていて、ルールやマナーについても記載されています。

あとは、先ほど来、長沼委員が何度もおっしゃるように、やはり教育出版はＳＤＧｓを意識した構成となっていて、下巻の１０９ページの「学びのポケット」とか、それとか、１２２ページなどで、「地球となかよし」というような言葉で、１、２年生にも分かるような形でのＳＤＧｓの取組について書いてある点も大変いいなというふうに思いました。

それと、あともう１社が光村図書出版です。

光村図書出版は、表紙や本文中のイラストが子どもたちになじみのあるイラストで、色味も温かく、とても見やすくなっています。

活動の最後に、したことや思ったことを振り返る振り返りの視点が示されていて、子どもたちが思い出したり、考えたりするときのヒントになっています。

「このようなこともあるかもね」「このようなのもいいかもよ」「どうしてなのだろう」という、小学生が気づいたり、不思議に思ったりしたことが４コマ漫画のようなイラストで示されています。

例えば上巻の３７ページでは、「こんなこともあるかもね」で、アサガオのお世話をしていて、お水を上げるのを忘れたとか、大きくならないとか、大きくなったとか、それぞれ育ち方、みんな同じように大きくなるのではなくて、色々、それぞれ違っているんだよというようなことが書いてあります。

あと、上巻の１００ページのところでは、「このようなのもいいかもよ」というので、１年生から２年生に上がるときに、自分が１年生のときの経験を保育園の子たちでしょうか、伝えているところで、「僕はここで転んだので、みんなも気をつけてください」と言ったり、あと、「僕はランドセルごと忘れたことがあります。でも、何とかなりました」という、自分の失敗や経験を面白おかしく紹介しています。

失敗や一人一人の違いがあるということを認める内容で、児童の思考を促したり、興味を持てる工夫になっているなというふうに思いました。

あとは、巻末に「広がる生活事典」というのがありまして、それが植物図鑑とか遊びの図鑑などになっていて、とても鮮明で使いやすくていいなというふうに思いました。

私は、以上、生活ではこの３社を推薦したいと思います。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、青木委員。

青 木 委 員　続きまして、生活については、今、高野委員がおっしゃったとおりで、小学校に入ってすぐの教科書。したがって、学校生活という中で、保幼小連携、これを意識しているかどうかということと、どういう学校生活になるかというようなところが非常に重要なのではないかと思っていました。

それで、これもやはり、どういう観点からというか、子ども目線では分かりにくいのですので、区民のアンケート等を見せていただいた中では、やはり光村図書の見やすさというところのご意見があったかと思います。これは私の見た感じでは、先ほどもお話があったとおり、柔らかい絵、イラストレーターでなじみがしやすい。

それから、フォントですね。文字の体系がとても子どもになじみがある感じの優しい文字を使っているところが、すごく小学校１年生にとっては取っ付きやすいのかなというところを思いました。

それで、中の作りも興味関心、学校生活に慣れていこうという流れを、結構、強く持てるような流れになっていました。

例えば、上巻の４、５ページ、この教科書の使い方というところも、分かりやすく書かれているかなというふうに思ったり、その後ですと、１６、１７の「私できるよ」といったようなところも、１つずつ、小学校に入ったらどういうことができるのかということが分かるようになっています。

あと、それぞれのところにも必ず書いてはあるのですが、この１６ページには、「保護者の皆様へ」というコラムがありまして、この辺をどう分かりやすく配置しているかというところもポイントの上では重要なのかなというふうに思っています。

それで、次が、教育出版に注目しました。ここも１年生にとっては興味深いのかなと思ったのは、ページを開けてすぐの１２ページ、「学校を探検しよう」という項目があって、「校庭には何があるのかな」「学校の中を見てみたい」という形で、それぞれこのような仕組みになっているよという、こういうところから、学校の中、学校に対しての興味関心というのが広まり、その中では、目に留まるように「約束」というところがうまく導入を図っている。

そして、その次のページには、「こんな？を見つけたよ」というような流れで、かなり分かりやすくというところがあったかなと思っています。

それから、同じ中では、７７ページでしたかね、秋の楽しさを伝えようという中では、これは高学年につながるというわけですけれど、この黒板に書かれているマインドマップのような書きぶり、このようなところを１年生から意識させるような書き方、これも少し面白いかなと思いまして、この辺は現場の先生がどう活用するか、していただけるかというところもありますが、注目すべきポイントだったなというふうに思っています。

それから、現在使っている、東京書籍さんになります。これは見ていて、今使っていることも含めて、中身の色々な工夫が随所に感じられました。

というのは、これもめくっていただくと分かるように、もういきなりページの下のところが切り取られていて、そこから色々なこの後のつながり、学校生活ス

タートという中での、とにかく最初に楽しい学校に慣れてもらうというようなところをうまい形で説明していくようなページづけ、ページ作りになっているのかなというのを思いました。

それから、その次の２８ページからなのですが、先ほど高野委員からもあったかと思うのですが、２８ページの「たねをまこう」というところから、１ページ１ページめくっていくと、芽が出て、そして、花が咲くといったようなところ、３２ページまで、非常に分かりやすい形でページの構成がなされている。

最初に花の絵は出ているものの、その途中の段階がこういうページの工夫で見られるようになっているというのは、小学１年生にとっては非常に興味関心を引くところかなと思いまして、それが出た次の３４ページに「観察図鑑を作ってみよう」というようなところに導入しているという流れが、やはりよく練られているという感じはした次第です。

そして、やはり先ほど申しましたが、この生活に関しては、家庭での教育というところも重要かと思います。そのような点では、やはり裏表紙の中に、東京書籍さんが大きく「保護者の皆様へ」という形で、「小さな気付きを大きな未来へ」という形で、生活科の学習の意味、意義、このようなことをきちんと伝えられている、それも見やすい形で、大きな文字でいうところが、教科書としてかなり工夫を凝らされているなと思った次第でございます。

そういう観点から、私としては、各社の中で、東京書籍、光村図書、それから教育出版を挙げさせていただきたいと思います。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

それでは、長沼委員、お願いします。

長 沼 委 員　　生活科につきましては、やはりスタートカリキュラムの要の教科というところで、どの教科でもそうなのですけど、とりわけこの生活科でじっくりと学校生活をスタートするというところを子どもたちが学んでいく。しかも、仲間作りも含めて、特別活動の中の学級活動と連動しながら進めていくという、大変重要な教科になろうかと思います。

その観点で、特に上巻の最初のところがどのように書かれているかというのはポイントになるかと思います。

さらに言うと、板橋区では、保幼小の連携というのを重視して様々な事業に取り組んでいます。例えば保育所、幼稚園の先生方との交流を深めていく。あるいは、保育所、幼稚園のスタッフの方に小学校の授業を見てもらう。逆に、小学校の先生が保育所、幼稚園の活動を見に行くというようなことも始めてきていて、生活科につながっていくところ、あとカリキュラムへの接続というのは板橋区として重視されることだと思います。

これが進みますと、午前中に申し上げた、子育てしやすい街ということに連動してきて、保育所から小学校へ、幼稚園から小学校への接続性が高まって、より

子育てしやすい街として板橋区が評価されるだろうと思いますので、生活科の教科書が重要だと思います。

現在使っている東京書籍の方は、今、青木委員からもお話がありましたが、まず、めくると、わざとこの大きさの違うページが用意されていて、１ページから１３ページに至るところで、ここが明らかにスタートカリキュラムであることが分かりますし、じっくりとここで学んでいくこと、子どもたちが先生と一緒に学校生活を過ごすんだということ、まさに生活ですね。学校生活そのものを感じ取ることができるということですね。

それから、高野委員もお話があったように、保護者の視点で見たときに、この幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿というものもしっかりと書かれていて、わざわざ「保護者の皆様へ」というふうに１ページには記載があるということで、子育てに関わる保護者の皆さん、そして、学校の先生、１年生の担任の先生などと連携しながら、いよいよ新しい入学した皆さんと一緒に学んでいきましょうということが、充実した形でスタートできるということがやりやすいなという印象です。

それから、これも重なってしまいますが、２８ページから３３ページに至る、この種を植えて、若葉が出て、つぼみが出て、そして花が咲くという一連のことについて、わざわざこのページの大きさを変えて、ずらしてみたときに全部つながって見えるという工夫は本当に秀逸で、今でもこれを使っている板橋区の先生方からは大変いい評価をいただいているという声も聞こえてきています。

そういうことから見ても、色々なことを考えて作られているということが見てとれます。

あと、下巻の最後の方なのですけど、１０３ページになるんでしょうか、ここには、「活動便利手帳」ということで、様々な活動をする、特に動きがあるもの、作業をしたり、外に出ていくものについて、まとめてこのページに記載があって、どのような点に気をつけなければいけないのか。それは、先生がこういう視点で気をつけて生活科の学びを進めていくんだということが分かりやすく書かれている。これも特徴的だと思います。こういう細やかな配慮がとてもいいなという印象です。

全体を通して、知的好奇心を喚起する、プラスしてその楽しさでしょうね、学校生活を楽しくしていく、生き生きとさせていくという観点が盛り込まれている、総合的に見て、まとまっている教科書だと思いました。

私の観点は理科と同じになるので、やはり教育出版ですね、この２社ということになります。

これにつきましては、ＳＤＧｓの観点はもう理科のところで申し上げましたので繰り返しませんが、随所に見られます。

また、スタートカリキュラムのところも、ぱっと開いて分かるのですが、子どもたちの写真が、多様性のある子どもたちが描かれている。

もちろん、他の会社でもイラストや写真で、肌の色が違うとか様々な、多様なお子さんが出てくるのですね。一番多様性を感じさせるのが教育出版さんの写真

です。

車椅子の方も４ページから１０ページ辺りに出てきています。

下巻で言うと、２２ページには車椅子に乗った児童がまち探検を一緒にやる。同級生、同じクラスの子どもが車椅子を押していくという姿も出てきます。

これからの日本社会は本当に多様化が進んでいく。様々な子どもたちが学校に入学してくる、そういうことを考えたときには、この生活科の最初のところで、こういう子どもたち自身の中にも多様性がある、恐らく教室にもいると思います。それが教科書を見ても、「ああ、そうだよね」と納得できる仕掛けになっているというのが、この点は教育出版社さんが一番進んでいると私は思いました。

さらに先生方のヒアリングといいますか、調査研究のところで、先生方からも指摘がありましたが、生活科で身につけるべき６つの力というのがきちんと書かれていて、例えば上巻２ページのところには、「保護者の皆様へ」と書かれているのですが、ここに６つの力も書かれています。

当然、これは先生も意識するわけですが、これが明確に書かれていて、「気づく」「自分でできる」「考える」「伝える」「挑戦する」「自信を持つ」ということで、これが生活科で２年間で身につけさせる資質・能力になるわけです。

これは、今の学習指導要領から、どのような力を身につけさせるのかということを意識した教育活動を全教科にわたって全教育活動で行いなさいということが描かれているものですので、生活科に関して、明確にここに書かれているというのが１つと、今度は、この６つの①から⑥までの力が、サイコロマークみたいなもので、各単元のページの左上にも、サイコロマークが見えるのですね。

例えば３６ページを見ると、自信を持つと伝えるということを学ばせるんだということが明確に、これが先生方にも、あるいは保護者の皆さんにも伝わっていくということで、これがこの作りになっているのは大変工夫が見られるということで、いいなと思います。

というのは、ややもすると、生活科は活動的な場面が多くて、特別活動と似てくるのですが、そうすると、一体、何を、どのような力をつけさせるのかというのが見えにくくなってしまって、悪く言うと、「楽しかったね」で済ませてしまうところがあって、そうではなくて、きちんとした力をつけなければならないとなったときに、この教科書を使うことによって、明確に先生方には伝わっていくので、若い先生方、経験年数の少ない先生方にも教えやすいだろう、やりやすいだろうなということを感じさせてくれます。

あとは、１、２年生からＳＤＧｓのことについてはしっかりと説明され、さりげなくですが、一緒に入ってきているというところが、これは理科と、あるいは社会科と同じように指摘させていただきます。

最後に教育出版さん、小学校が面白いのですが、開いたところで冒頭のあやしげなページがあります。これなども実はいいのではないかと思うのですが、最初に開くのがこれなのです。いきなり学び方とかじゃないのです。

この謎のページを１年生の担任の先生はどう扱うか。これは、１年生の担任の先生の腕の見せ所と言いますか、これを見て、楽しくお話をしていただくという、

全部丁寧に書いてないというところ。

今の教科書、全教科見ても、ほとんど丁寧に作り込まれているのですが、わざと、色々な使い方ができるというのはあまりないのですけれど、これは多分わざと、この会社だけですよ。これを見て、先生がどのような会話をするのか楽しみな、そのようなページもあっていいなと思って推したいと思います。

私はこの教育出版を第一にして、第二を東京書籍、あえてこの順番で推したいと思います。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、野田委員。

野 田 委 員　　生活について述べさせていただきます。私の方は、まず、観点としてなのですけども、やはり内容としては、板橋区授業スタンダードにつながる構成というところですね。これから板橋区授業スタンダードにしっかりとはめ込んでいくための前段階というような形でイメージをしております。

単元ごとの学習の見通しの立てやすさというところに関しては、指導される教員の先生の考え方を導くようなところ、読み解く力の育成については、まず、これは見て感じるところから入るかと思うのですが、このようなところをポイントとして見ていきました。

もちろん、この幼稚園、保育園からの接続という観点から、遊びを中心として、そこに狙いがあることを意識しながら学習を進めていくということを想定して、実際の子どもたちの生活に関係していくことは意識できること。

この「保護者へ」というところの記載が要所要所にあるように、やはり家庭で保護者と教科書を読むことによって自学自習に結びつくこと。やはり保護者にとっても初めての教科書というものになっていきますので、このような随所に「保護者の皆様へ」というような記載があることは非常に大切なことだと思っております。

これをまた参考に授業が進みやすくなるというところでも、うまく導かれているのかなというところで、このようなところ、全各社に共通していくようなポイントでもありますので、見ていきました。

私の方は、東京書籍と、あとは教育出版について推薦したいと思っています。

特に、私の方からは、この生活科は社会と理科の基礎的な要素があると思うのですけど、やはり内容的には植物の観察など、理科的要素の方が少し多いかなというところで、東京書籍を推薦したいと思っております。

この先に申し上げました観点から、やはり授業スタンダードに導入していく、これから当てはめていくというところの流れでは、丁寧に構成されているのではないかと思いました。

これは東京書籍さんの特徴でもあるのかもしれませんけども、非常に情報量が多いというところがありますが、こちらに関しては、上手に、見やすく、多い情

報をまとめてあるように、工夫されているように見受けられます。

あとは、やはりこのタブレット端末を活用して観察する、記録するというところを積極的に取り入れているというところが、このＩＣＴの活用の推進につながっていくのではないかと思います。

このようなところで、これまではこの教科書の中にも実際に観察した記録のノートのようなものもたくさん示されているのですが、実際にその本物を観察するというところ、そして、記録していくというところでは、この発達段階からいきますと、写真を撮るのが一番記録としてより正確なのではないかというところに着目されて、タブレットで写真を撮っている姿などを写して、そのような活用を促しているというところは、これから必要とされるスキルなのではないかと思っております。

「課題の設定」「情報の収集」「整理」「分析」「まとめ」「表現」というような総合的な学習の要素というところも、基礎的なところが要所に盛り込まれているように見受けられ、探求の過程ともなる単元設定になっているのではないかと思います。

以上の観点から、学習内容と身の回りの生活、あと、社会との関連、この先の３年生からの理科への学びへのつながり、このようなところが意識できるように作られているのではないかと評価させていただきました。

また、家庭での自学自習、復習だとか、保護者においても、この教科書の活用の仕方を学んでいくに当たって、匹敵した内容、構成になっているのではないかと思いますこととともに、このデジタルコンテンツの数が多いというところも分かりやすく、保護者が理解できるための要素としてもポイントが高いのではないかと思っていますし、内容においても、写真の使い方、鮮明さといったところにも、比較的分かりやすく、この学習の導入という観点からも、親しみやすいのではないか、入りやすいのではないかといった印象を持ちました。

以上となります。東京書籍と教育出版を推薦させていただきます。

教　育　長　　それでは、私の方ですが、私も東京書籍と教育出版を推したいなと思っています。

東京書籍については、本当に上巻で、全ての教科書会社がそうされているように、保育所、幼稚園へのアプローチカリキュラムと小学校でのスタートカリキュラムをうまく結合した内容を持ってきているなというふうに思っています。

具体的に例示をすることで、全ての学校で適切に実施することができるようになるというところでは、東京書籍の最初の冒頭の部分は大変有効であるし、今までのお話のように、保護者向けにも出しているというところはすばらしいなと思います。

また、これは理科とも一緒なのですけれど、活動写真が非常にダイナミックで、子どもたちの興味関心だけではなく、保護者も興味関心を誘うのではないかなというふうに思っております。

それから、ビックリマークやクエスチョンマーク、ハートのマークの印が評価

の３つのことなのかと思うと、先生方にとって指導と評価の一体化につながる気がします。

それから、端末の「活動便利手帳」、これが掲載されてあるので、自力解決、子どもたちが自分で何かをするときに、それを見ながら自分で解決していくということにも役立つのかなというふうに思いました。

それから、協働的な学びの実現に向けては、活動や体験を通して得た気づきを、友達同士、特にペアで伝え合う姿や、多様な他者と関わる姿などを写真やイラストを用いて具体的に例示してあるところが、子どもたちは視覚によって思考に落とし込んでいくのかなというふうなところでは、とてもすてきなところだなと思います。

また、下巻の１５ページにあるように、他教科との関連を示すマークがありまして、「話をつなごう」「つながる国語」、このような教科横断的に学ぶことができるという意味で、これは生活科の１つの大きな特徴でもあるので、このようなものもきちんとなされているなと。

それから、学習で大切なキーワードとなる考えが吹き出しの形で目立つようになっている、活字の大きさ、字体、行間、色調などが適切であるなというふうに思いました。

以上が、東京書籍のよい点。

教育出版については、「一緒にはてなをたくさん見つけよう」という導入部分、それから、「わくわくスイッチ」というのが、これは自分で追っていく、プログラミングじゃないですが、それも大変興味をそそるものであるなと思いました。

それから、教育出版は全体を通して疑問文のめあてや問いかけが多くて、子どもたちの興味を誘うのではないかなというふうに思いました。

子どもたちのカードもたくさん、これは他の会社もそうですけども、例として示されているのが子どもたちの参考になるのではないかなと思います。

青木委員がおっしゃったように、私も上巻の７７ページの板書はウエビングを使ってあって、非常に参考になるな、このようなことを低学年、１年生のうちからやっていくことによって、思考ツールの使い方、あるいは問題発見のツールとしての使い方などを覚えていくのかなというふうに思います。

それから、端末に「学びのポケット」で、各教科等との関連を意識した内容となっています。「見よう」「考えよう」「伝えよう」「道具を使おう」「乗り物に乗ろう」「本から学ぼう」「安全と健康」「コンピューターを使うとき」など、大変参考になります。

ただし、これをどうやって子どもたちが主体的に見るようになるかといったところが１つの大きな課題なのかなというふうに思っています。

さあ、ここまできて、東京書籍と教育出版が同数で並んでいます。もう一度、今までの意見を聞きながら、再度、決定していきたいなというふうに思いますが、どうしましょうか。

では、野田委員からいきますか。

野 田 委 員　実際、この先のことも考えて、社会と理科の方にもつながっているということで、両方の候補上がるというのは必然的かと思いますが、やはり、この種の絵ですよね。これはどうしても捨てがたいところで、実際にすごく活用されているというところと、あと、私の方からは授業スタンダードに導入していく、当てはめていくというところでコメントさせていただきましたけども、このビックリマークやはてなマーク、ハートマークのポイントというところ、このようなところでいくと、東京書籍さんかなと思います。

教　育　長　長沼委員、いかがですか。

長 沼 委 員　私は、先ほどから教育出版の方がいいと申し上げました。ただ、どちらになっても私は構いません。皆さんのご意見を聞いた上で判断したいと思います。

教　育　長　青木委員。

青 木 委 員　私は、教育出版と東京書籍、すごく迷った中に、先ほど長沼委員も言われた、上の四角で、「気づく」「伝える」「考える」というのがあって、これは教える側の、教員の使い勝手はすごく大事だと思うので、これの繰り返しかなと思って見ていたのですが、上巻の１０２ページぐらいに行くと、そろそろ慣れたんだなということも含めて、「挑戦する」というのが出てきているのですよ。

これは生活の中で、最後、自己肯定感を持って挑戦する方向へ行くというような流れをよく読み取って作られているなと思ったのが１つ。

それから、先ほど長沼委員にあった、この謎の絵というのが、本当に随所に配置されているというのが、後のところにも場所を変えて出てくるのですよね。

最初に見たときに、これを若い先生が使いこなせるのかというところで、東京書籍に一日の長があるのかなと思ったのですけど、長沼委員の意見を聞いて、正直これを使いこなせたら教育出版の方が面白いと思っちゃいました。

なので、私は長沼委員の意見を聞いて、教育出版の方に少し傾いているという状況です。

以上です。

教　育　長　ありがとうございます。

高野委員、お願いします。

高 野 委 員　すごく迷います。本当に東京書籍さんは、最初のスタートのところとか、写真のよさとか、授業の流れが分かりやすいとか、本当にいいところがいっぱいあって捨てがたいのですね。

あと、下巻の８０ページから、「つながる、広がる私の生活」というところで、町のすてきを話し合おうということで、話し合って色々調べに行ったり、詳しく調べたり、そして、伝えたいことをまとめて新聞を作ってみたり、そして、それ

を町の人たちに話しにいって、それで、その発表会にまちの人たちを招待するという、こういう総合的な学習の時間の練習になるようなすばらしいところがあって、ここも捨てがたいなと思いました。

あと、でも、教育出版については、やはりさっきも言った、「わくわくスイッチ」とか、そういう１つに決めないで、色々な自分の経験だとか、興味だとかの違いによって学び方を選べる、ゴールがみんな同じゴールじゃなくて、それぞれ違うゴールになるというところもあるし、気がつかなかったのですが、写真の中とか、表現の中で色々な多様性に配慮している点とか、そういうところも考えて、本当に決めるのが難しいなと思います。

ただ、今の生活で実際に授業を見たりする中で、生活のこの教科書を使って先生方が大変すばらしい授業をやってくださっている点を考えると、教科書が変わるとどうなるのかなという、そういう心配があります。

だから、どちらかといえば、東京書籍寄りの、教育出版のこのようなところに新しく変えてみるのもいいのかなと思いつつ、どちらかと言えば、６：４ぐらいで、東京書籍という気持ちです。

教　育　長　　ありがとうございます。

工夫しているという点では、本当に東京書籍の教科書は、先ほどの話も出ているように工夫にされていますし、系統性というところも、今あったように、非常につながりが見えるなというふうに思います。

子どもたちが手に取ったときに、どちらの教科書が子どもたちにとって興味関心が湧くのかなという点で、さっきからずっと見ているのですけども、どちらも写真も多くて、それから「？」とか「！」というところもあるし、本当に甲乙つけがたいというところかなというふうに思っています。

私としては、子どもたちのヒントとして、鮮やかさとか、まばゆさみたいなところでいくと、東京書籍が非常に見やすいのかなという気持ちはあります。

あと、この教科書の工夫といったところにも一日の長があるのかなというところはありますが、いかがでしょうか。

何となく、本当に数が接近しているところで、ご意見があれば。

青 木 委 員　　教育長のおっしゃるとおり、そのような意味では、現場の先生が使いやすいということを最後に重視できるようにするのがよろしいのではないでしょうか。

長 沼 委 員　　私も、総合的な出来で考えれば、東京書籍でもいいのかなと思います。

教　育　長　　では、本当に難しい判断ではございますが、「生活」については東京書籍ということで仮採択をすることにご異議ございませんでしょうか。

（異議なし）

教　育　長　　それでは、「生活」については東京書籍を仮採択することといたします。
　それでは、委員会の途中でありますが、議事運営の都合により、休憩といたします。再開は１５時４５分といたしたいと思います。よろしくお願いします。

（休憩）

教　育　長　　それでは、委員会を再開いたします。
　「音楽」の審議に入ります。指導室長から、説明お願いします。

指 導 室 長　　「音楽」につきましては、２社でございます。教育出版、教育芸術社から採択をお願いします。

教　育　長　　それでは、審議に入ります。質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。
　高野委員、どうぞ。

高 野 委 員　　この２社ともに、鍵盤ハーモニカや打楽器、木琴などの器楽指導では写真を多く使用し、演奏の仕方が分かりやすく示されています。
　また、学習のめあてが各題材で示されていて、板橋区授業スタンダードに沿った学習を行うというところでも、２社ともに優れています。
　共通教材の「みんなのうた」「心の歌」では、その歌にふさわしい美しい写真やイラストが掲載されていて、歌詞の中に言葉や背景が分かりやすく簡潔にまとめられている点も、２社ともに大変よくできています。
　２社ともに大きな差はなかったのですが、学習のめあてが児童に分かりやすく、振り返りの視点が示されているという点では、教育芸術社の方がいいのかなというふうに思いました。
　教育芸術社の６年の１０ページのところに、「歌声をひびかせて心をつなげよう」というページがあるのですが、ここのところ、単元のめあてが左のところに書かれています。このタイトルの下のところ、「曲想を感じ取ったり、歌詞の内容を想像したりしながら、響きのある声で歌うことができるかな」という単元のめあてが書かれています。
　そして、その後に、隣のページの上に、「見つける」「考える」それから、「歌う」という学習活動が示されていて、思考力、判断力、表現力を育むことができるようになっています。
　さらに、単元の終わりの１５ページのところで、右の下の方に振り返りの視点が示されている点もよいと思います。
　このページは、共通教材の「おぼろ月夜」の学習というところが含まれているのですが、これで、この共通教材の中でも「見つける」「考える」「歌う」の学習活動が示されていて、めあてを意識しながら、どのような点に注意して取り組めばいいのかということが分かりやすくなっています。
　この点が、やはり２社を比べたときに、共通教材での学習活動が明確になって

いるかどうかというところが、２社の大きな違いだなというふうに思いました。

また、全体的にも、各ページの学習活動が明確で、自学自習に生かすことができるようになっています。

また、６年の２１ページのように、各ページでキャラクターが考えるヒントとなることをつぶやいていて、視点を持って表現の工夫をしたり、対話的な学習が促されています。

また、６年の２４ページで著作権、７７ページでゲーム音楽などの紹介があり、実生活につながる内容が記載されています。

巻末には、３年生以上でリコーダーの運指表ですとか、音符、休符、記号、音階などがまとめられていて、知識の確認のときに使いやすくなっています。

あとは、教育芸術社の方がデジタルコンテンツの数が多く用意されているので、この点も、鑑賞以外にも様々な場面で効果的に使えるようになっているのではないかなと思います。

あと、教育出版の方は、やはり写真の使い方がとてもすばらしくて、先ほどの共通教材の中でも、大変すばらしい写真が、歌の背景ですとか、子どもの興味をそそる、すばらしいものになっています。

あと、２年の７６ページのところで、「打楽器いろいろ」というところがあるのですが、ここにウッドブロックとか、リオとかの打楽器と、下のところで小太鼓のばちの持ち方が、右手と左手と２種類描かれていたり、他にも楽器の演奏の仕方がとても詳しく出ていて、この点がやはり教育出版はこういう点が優れているなというふうに思いました。

２つ比べてみて、流れが分かりやすいということと、あと、デジタルコンテンツの数が多く用意されているという点で、教育芸術社の方がいいのかなというふうに、私は思いました。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございます。

では、青木委員、お願いします。

青 木 委 員　　２社、どちらも本当に甲乙つけがたい、いいところばかりが目立ってしまうような感じがします。

教育芸術社の方は全体的なバランスがよいという感じはしていまして、先ほど高野委員からもありましたけど、特にデジタルコンテンツの充実度は、これはもう教育出版に対して、各学年とも多く、しかも、ページの右上に固定されているのも、場所が固定されているから、もうすぐに慣れて、そこからタブレットで使えるという面では、よく練られて工夫されているという感じはしています。

それから、巻頭の学習マップとか、あるいは振り返りのページ、これで全体構成が見渡せるようになっているところと学習活動が明確であること、いわゆる授業の実習で生かすというところもできる。それから、書き込み等の配慮がされているという点では、教育芸術社が工夫をされているところかなというふうに思い

ました。

これに対して、教育出版なのですが、教科書で工夫されているのは、まずページの右上に「音楽の基」というのがあって、指導する教師には学習内容が分かりやすく示されていると同時に、そこが明確にされているところ、それから、例えばですが、４学年による役割を基に音楽を作ろうと、集団で音楽を作り合っていくというところで、学び合うということをテーマに、学習活動が明確に設定されているというところ、自学自習でなくて、仲間と試行錯誤しながら学習に取り組むというようなところが明確化されている。

それから、もう１つ特徴的なのは、全学年で英語の歌が掲載されておりまして、英語教育が始まったという中で、他学科との連携というところを意識した教科書、それから、もう先ほど来、各委員から言われているＳＤＧｓ、この観点では、５年でしたっけ、６５ページの「川は誰のもの」という形でＳＤＧｓについて取り上げているという点です。

デジタルコンテンツの多さというところでは、先ほど教育芸術社の方が多いという形でしたが、それを授業の中でどのように活かしているかという中では、一方、デジタルコンテンツの数というのが、ある程度、洗練されているというようなご意見もあったというところがございます。

ということで、どちらも非常に工夫されているというところで、非常に悩ましいところではありますが、現場のご意見という意味では、使いやすい、あるいは慣れているというところでは、教育芸術社なのかなというふうには思っておりますが、今の板橋区が進めている、例えば先ほどのＳＤＧｓの話とか、新しく英語教育が入ってきているという、これからの音楽教育という意味では、教育出版がやはりかなり工夫を凝らしているというふうに思いました。

今のところは、私はそういう、なかなか判断がしづらいというのが現状です。

教　育　長　　ありがとうございます。

長沼委員、お願いします。

長 沼 委 員　　音楽は２社なので、とても悩ましいところで、どちらもよく工夫されていて、板橋区授業スタンダードに沿った学習をすることができると思います。

その中で比較をしたときに、今使っている教育芸術社の方が総合的に見ると使いやすいのかなという印象です。

例えばですが、６年生で言うと、３６ページになりますか、「花」という有名な滝廉太郎さんの曲がありますが、ここを見ると、右側の３７ページのところなのですが、「歌詞について」、それから、「曲の特徴、演奏について」ということで、ここに書き込む欄ができているというのが特徴的だと思います。

これに書き込んで、さらに、それを先生が取り上げて発表してもらうこともできます。また、対話的な、協働的な学びがしやすい作りになっていると思います。そういう意味では、令和の日本型学校教育のコンセプトに合った作りをしてきているなという印象です。

実際、その下のところを見ると、４人の子どもの吹き出しで、思ったことが例として出てきているということがありますので、このような工夫も、この教育芸術社さんの方がいいなと思う点でもあります。

また、各単元が見開きになっているのですが、その冒頭のところで、めあてがしっかり書かれていて、これも子どもたちが、児童が、どういう意図でこの曲を歌うのか、あるいは聞くのかということが明確になっているというところも非常に分かりやすい、先生もそれに基づいて指導がしやすい、経験年数が少ない先生方にとってもやりやすいだろうということです。

ただ、教材によるのですが、教育出版さんの方がいいなと思うようなところも、もちろんあります。

例えば、いわゆる共通教材になるのですが、６年生の「われは海の子」という歌がありますが、このページを比較してみたときに、教育出版さんの方は、２２ページから始まって、まず最初にこの海の絵がぱっと出てきて、非常にきれいな海が見えていて、ここに歌詞だけが書かれているという、まず、ここでイメージを膨らませて取り組んでいくということがやりやすくなっている。

ページを開くと、２４ページで楽譜が出てくるという構成になっています。２５ページで解説という、４ページものなのですね。

一方で、教育芸術社さんは、６年生でいうと、４４ページ、４５ページの２ページで扱っているということで、ページ数もさることながら、この比較で考えると、イメージでどう捉えるかというところですね。音楽をただ聞くだけではなくて、まずは海というものをしっかりと子どもたちが想像して、曲を大きく、あるいは歌うというところに授業展開が流れていくような工夫がしやすいというところ、こういうところは教育出版さんの方がいいのです。ただ、この「われは海の子」のところ、よく見ると、教育芸術社さんは２ページではあるのですけども、ぎゅっとコンパクトに大事なことが実はよく網羅されています。

例えば４４ページの下のところには、「見つける」「考える」「歌う」ということで、明確にめあてに沿って、さらに１時間の授業の中で先生がどうするのか、あるいは、子どもたちがそれを受けてどのような活動ができるのかということが分かりやすく書かれているということで言うと、先生はこちらの方が教えやすいかもしれません。

それから、右側の解説ページもそうなのですが、歌詞の下に書かれている解説、その他、非常に丁寧に書かれているので、一概にそのページ数だけでは判断できないということもここで紹介しておきたいと思います。

ということで、板橋区授業スタンダードにどちらも沿って学ぶことはできるのですが、よりめあてを明確に持って、あるいは、先ほども生活科のところで申し上げましたが、どのような力をつけるのかという点に立ったときには、総合的に見て、教育芸術社さんの方が使いやすいだろうと思います。

ちなみに、学習マップというところが、冒頭にどちらも書かれているわけですが、そのページを見ても、例えば６年生でいうと、教育芸術社さんは４ページ、５ページになりますが、ここの書きぶりと、それから、教育出版さんは、６年で

すと４ページ、５ページになりますが、どうでしょうかね。どちらも全体像がこの１年分の学習内容、取り組むことについて理解はできるのですが、教育芸術社さんの方は、真ん中のところに、「歌う」とか、「演奏する」とか、「作る」とか、「聞く」ということが色分けされて書かれているわけで、このようなところを見ても、１年間の学習で何をどうするのかが読み取れるようになっているという工夫、このようなところも、こちらの方を選ぶ理由かなというところを私は思いました。ということで、教育芸術社さんを推したいと思います。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、野田委員、お願いします。

野 田 委 員　　音楽についてですが、私の方も、教育出版さん、教育芸術社さん、非常に甲乙つけがたいところ。理由としては、どちらも非常によくできているというところで、皆様方がコメントされているポイントについて、ほとんど同じような意見であります。

私からの視点としましては、やはり実際の現場に行って、この音楽の授業を見ていて、小学校、中学校を含めて見ていきますと、やはり教科書の使い方になってくるかと思います。

音楽の授業、やはり声を出して歌う、楽器を演奏する、そのようなところに多くの時間を費やしてやっていくというところで、やはりその教科書が理解しやすい、見やすいというところ、要点をつかんでいるというところは重要なのではないかと思います。

私の方からは、教育芸術社さんの方を推薦させていただきたいと思います。

教育出版さんの方では、非常に、どちらも学習のめあてがしっかり板橋区授業スタンダードに沿って設定されていて、教育出版さんの方は、はっきり見やすく書かれているというところが非常に印象的であるというところと、青木委員の方からもありましたが、英語の歌が、全学年、１年生からも入っているというところですね。

やはり英語のフレーズに慣れ親しむというところは、私たち以上に子どもたちは敏感になっている、今の世の中的な歌なども、どこかのフレーズに英語が入っていたりとか、そのようなところがあるので、英語の歌というところでも、英語に慣れ親しむというところは貴重なところだと思っております。

あと、教育芸術社さんを推薦する最も重きを置いたポイントとしましては、やはり現状の授業の進め方になっていくのですが、もちろん授業スタンダードに沿った学習が行われているわけですが、現場の先生の話を聞いていますと、やはりそのような特別教室においてもこのＩＣＴの活用を推進していきたいという声があります。

実際に演奏している生の演奏の姿だったり、その風景だったり、音は生までは行きませんが、演奏の姿と同時に聞く音というのは、また違うものがあるという

ところで意見をもらっていて、私の方もやはりそのような特別教室の方に電子黒板の設置が普及されることを希望していまして、徐々にそれが実現している学校もあって、そのような点でいけば、このようなデジタルコンテンツが使いやすいというところでは、小学校のみならず、中学校に行っても必要になってくるというところで、まずは小学校の段階でこのようなことを使っていく習慣、このようなことを取り入れた授業を行う習慣というところを大事にしていきたいというところですね。

また、この世の中の流れに沿ってある著作権のところ、やはり教科書に載せていく曲目だとか、そのようなところ、また、マーチングとか、学校でやるに当たっての曲の選定についても、著作権でもう一度考え直すというところで、大変重要な考えであると思いますし、これを子どもたちもしっかり理解しておくという必要は、これからのＩＣＴの考え方についても重要なポイントになってくるということで、これがしっかり見開きで取り上げられているということは重要視いたしました。

このような観点から、総合的に教育芸術社の方を推薦させていただきます。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございます。

私の方ですが、先ほど長沼委員がおっしゃっていたように、私も、両方とも学習マップというのが巻頭の方に出ているのですが、子どもたちにとって親しみやすさというところでは、この学習マップについては、教育芸術社の方が親しみがあって分かりやすいかなという気がいたしました。

教育芸術社については、子どもたちの思いや、意図を持つ、気づく、理解する、できるをサポートして、主体的な活動を引き出せるように、学習活動の文章に、「考える」「見つける」「歌う」「演奏する」「作る」のマークを示しています。

各教材を題材という１つのテーマの中で構成して、学んだことを関連づけたり、活用したりすることができるようになっている。つまり、幾つかの曲をグルーピングして、それを学ぶようにしているというところが面白いところだなと思っていました。

それから、４人の子どもとナビゲーターのキャラクターを登場させて、それぞれの学習内容に応じて、表情や仕草を変えたり、活動している様子を表したりして、子どもたちの興味関心を引き出すようにしています。

また、学習をサポートする写真やイラスト、白を基調としたデザインにして分かりやすさを見やすいように配慮してあると思います。

ほぼ、毎ページに二次元コードを設置して、タブレット端末で教材の参考音源や演奏動画などを視聴したり、作品を作ったりすることができるコンテンツにアクセスできるようにしてありますが、これをどれほど活用できるかというところが１つ大きな課題なのかなと思っています。

それから、先ほど来出ているように、やはり著作権、サウンドスケープ、ゲーム音楽の紹介等、実生活につながる内容が記載されているのが教育芸術社の利点

であるのかなと思います。

教育出版については、教材の見開きでは、２年生の３１ページ、４年生の３２ページの「学びナビ」に児童に考えさせたい内容について記述し、発問を工夫しています。なお、答えは明示しないで、対話しながら学びを深めるように配慮されているというふうに思います。

音楽を形づくっている要素、これは共通事項ですが、「音楽の基」として見開きごとに示して、「音楽の基」を窓口にして活動できるようにしてあります。

３年生以上の共通教材、「富士山」「さくらさくら」「こいのぼり」「おぼろ月夜」など、昔からの日本の曲には折り込みで美しい大きな写真。これは、先ほどお話がありましたように、教育出版のいいところは、写真が非常にきれいで、繊細で美しいイメージを広げやすいように工夫しています。

それから、リコーダーの運指表は端末の折り込みであるため、本文を開きながら運指を確認することができるということ。

それから、３年の４６ページ、これは児童が歌唱で学ぶのか、リコーダーで学ぶのかを選べるような内容になっているということも面白いところだなと思っています。

この辺りが教育出版の１つの特色であるかなというふうに思いますが、全体を通して見たときに、やはり私も教育芸術社の方が、使いやすさ、それから、子どもたちへのめあて等についても、よさが引き立つかなというところで、教育芸術社を推したいというふうに思います。

それでは、「音楽」については、教育芸術社を仮採択することにご異議ございませんか。

（異議なし）

教　育　長　　それでは、「音楽」については、教育芸術社を仮採択することといたします。
次に、「図画工作」の審議に入ります。

指 導 室 長　　「図画工作」につきましては、２社でございます。開隆堂出版、日本文教出版から採択をお願いいたします。

教　育　長　　では、審議に入ります。質疑、意見等ございましたらご発言ください。
高野委員、どうぞ。

高 野 委 員　　図画工作、２社比べまして、２社とも、学習のめあてが学習指導要領の３つの資質・能力に沿って、児童に分かりやすい表現として示されています。

巻末に、学びの資料、それとか、材料と用具の引き出しとして、それぞれの学年で使用する用具、道具の使い方が記載されている点も各社ともにすばらしい点です。

それぞれ、各領域で必要な内容が適切な分量で構成されています。

ただ、開隆堂出版については、鑑賞についてが少し少ないのではないかというようなご指摘もありましたが、先生方に伺ってみましたが、教科書の鑑賞だけではなくて、授業でお互いの作品を鑑賞し合うというような方法もあるので、そこまで心配することはないのではないかというようなご意見を伺っております。

２社を比べまして、私は開隆堂出版の方を推したいと思っております。

開隆堂出版は、学習のめあてについて、左のページ、上段に示されています。

そして、そこに３観点のうち最も重要とする部分が赤字で書かれているので、児童が主体的に短時間で確認できる点がよいと思います。

左のページ上に、学習のめあてとして３観点が書いてあるのですが、その中の、例えば、今、私は１、２年の上の１０ページを見ているのですが、真ん中のところ、「好きなものや書きたいものをたくさん見つける」というところが赤字で示されていて、この授業では、ここに主眼を置いて授業を進めていくんだということが分かります。

そして、このめあてに対して、振り返りの項目が、隣のページ、右のページの下に書かれています。ここのページでは、振り返りは、「友達の作品を見て、自分の好きなもの、面白いものが見つけられたかな」というふうにあります。

その隣に、今度、「あわせて学ぼう」ということで、他教科とのつながりが示されています。

また、題材名の左の上の定位置に、その題材で使用する用具がイラストと文字で表記されています。

例えば、１年生の上の１６ページになると、「並べて見つけて」というところでは、造形遊びとなったその横に、色紙、カップ、割りばし、キャップなどというふうに、その授業で使う材料がイラスト入りで分かりやすく表現されています。

また、タブレット端末を使ってできる活動が多く組み込まれていて、１人１台端末の活用を意識した内容になっています。

左のページの下の段に、「タブレット端末で見てみよう」というのがありますが、内容が１年の８ページのところを見てみますと、「はじめに」というふうになって、次にクレヨン、クレパスの使い方、タブレット作品のできるまで、そして、作品、それから振り返りシートというふうになっていますが、これがデジタル端末を使ったときにタブレットで確認できる内容が具体的に明記されているので、大変使いやすいのではないかなというふうに思いました。

それと、低学年から高学年に向けて、自然に触れたり、外に出て行う造形遊びの題材が系統的に組み込まれているということです。

例えば１、２年生の下の１４ページで、「さらさらどろどろ」というところがあって、そこは砂や土の触り心地を楽しむ授業。そして、３、４年の下の１８ページでは、「木々を見つめて」というところで木から感じたことを基に作業する。

５、６年の下では、８ページで、「季節を感じて」ということで、「外に出て心と体で季節を味わおう」ということで、教室から飛び出して、体を使って感じたことを表現する授業になっています。

以上のことで、私は開隆堂出版がいいのではないかなというふうに思います。

教　育　長　　ありがとうございます。
　　では、青木委員。

青 木 委 員　　こちらも２社で大変迷うところではございました。どちらもいいところがやはりございます。

今使っている開隆堂出版さんのまず注目したところ、高野委員からもご指摘がありましたが、学習のめあて、これを分かりやすいページ、見開きの中央で赤字にしたりして見せているところ、それから、ページの左上に、絵であったり、工作であったり、造形遊びをやったりして、必要な道具や何かをアイコンという形で見せている点。

それから、タブレット端末へのつながりというのをページの下のところに見せているわけですが、これは、どちらもあるのですが、文教出版さんの方が、若干、これ大きい小さいは関係ないと思うのですけど、目立っているという意味では、開隆堂出版さんという気がしました。

それと、全体的にテーマづけという中で面白いものが幾つかあるのですが、色々、例えばですが、開隆堂出版さん、１、２年の上で見ていきますと、テーマとして、幾つか分かりやすいというか、興味関心を引くような、例えば３４ページの「うきうきボックス」、その前の３０ページの「すごいね」「わくわくさん」とか、何か児童が興味関心を持ってという題材というか、そういうキーワードを出しているというところも面白く感じました。

一方、文教出版さんのようなのですが、これは写真の充実というところですかね。先ほども高野委員がおっしゃっていたと思うのですけども、鑑賞する題材というところの充実、これが充実している点と、ある程度、高学年になりますと本格的なＩＣＴ活用、このようなものの題材が取り入れられていまして、例えば５、６年の上巻で言うと、５４ページの「ＩＣＴでチャレンジ」などがありますし、情報モラルみたいなところまで踏み込んで発展的な内容が充実しているということです。

また、テーマ設定についても、面白いキーワード、例えば１年生の興味関心を高めるところでは、５４、５５ページの「すきまちゃんのすきなすきま」、何か楽しそうなテーマだし、出している写真素材も何か楽しくて、関心を引くようなテーマかなというふうに思いまして、それぞれのいいところを挙げるとたくさんあるわけなのですが、全体を通じて、開隆堂出版さんの方は、どちらかというと、方向性として、児童の想像力を重視していこう、想像力を育んでいこうというようなところ、それから、先ほど来、出ているＳＤＧｓに関する取組作品、このようなものも紹介しながら、環境教育にもつなげていこう、このようなところがかなり際立っているというふうに感じています。

一方、文教出版さんは、素材を多く出しているというようなところ、それからＳＤＧｓと他教科のつながりが、ページ右下のこの「つながる学び」、ここで記載されているわけですが、全体的な方向性が、どちらかというと、この図画工作

という意味での子どものスキルアップを重視しているという内容だというふうに感じました。

特に低学年のお子さんたちには、想像力というのを喚起していくという、高めていくというようなところが、この教科では重要なのかなと思ったときに、全体を通じてもそうなのですが、開隆堂出版さんの教科書作りに工夫がされているということを感じたという次第です。したがいまして、私も開隆堂出版さんを推薦させていただきます。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

では、長沼委員。

長 沼 委 員　　図画工作も２社でとても迷うところではございましたが、やはり図工の場合には、その作品を鑑賞する、あるいは自分で作っていくときに、そのわくわく感みたいなものを大切にしていきたいと思います。

そういう意味では、どちらの教科書も、わくわくするような、そういう写真や作品が分かりやすく掲載されていました。

まず、開隆堂出版さんにつきましては、最初の１、２年の上のところをいきなり開くと、最初のところに幼稚園の先生のコメントがあります。「わくわくするね」と言って、幼稚園の先生が語りかけているということなので、これがスタートカリキュラムとしての意味を成しているのかなというところがあります。

先ほども申し上げましたけども、板橋では保幼小の連携を非常に大事にしている区ですので、このようなところもさりげなく工夫されているところがいいなと思いました。

この図工で身につける力ということで、３つの学習のめあてとして、これが全学年を通じて、「くふうさん」「ひらめきさん」「こころさん」という、このキャラクターでもって示されているということが、子どもたちにとっても分かりやすいだろうと思います。

もちろん、先生にとってもそうなのですが、このキャラクターの３人が随所に出てきて、一体この単元ではどのようなことを学ぶのかというのが明確に書かれています。ここはかなりポイントが高いと見ていました。

やはりどういう力をつけるのかというのは、毎度、申し上げていますが、現行学習指導要領では、しっかり意識をした授業をするということが求められていますので、その点、この開隆堂出版さんの教科書は使いやすいと思います。

それから、これも２人の委員さんのご指摘がありましたが、左上のところには用意する材料、それから、左下はタブレットのコード、右下は片付け、振り返りとか、あるいは、関連する他教科や教育活動の学びということが、全部、統一感を持って１年生から６年生まで同じ配置になっていますので、これも大変使いやすい構造になっていると思いました。この点が非常に評価されるところです。

同じように、日本文教出版さんの方も写真がとても見やすく配置されています

し、それから、めあても、同じように左上のところに書かれています。

それから、材料は、こちらは左下なのですね。最後の右下の方が、今度は、「気をつけよう」と「片付け」と「振り返り」で、右下がＱＲコードという配置で、これも大変統一感を持って、各学年で同じように構成されていますので、こちらも非常に使いやすい仕組みにはなっているなと思います。

その意味では、非常に甲乙つけがたいのですが、図工の先生のお話を伺うと、図工の授業では、４５分ずっとこの教科書を見ているということはまずないということで、見たら、すぐに自分の作品作りに入るとか、あるいは見ながらということもあるでしょうが、見ながら、自分の作品作りに入るということですので、その意味では、先生が子どもたちに提示をして、わくわくさせて、自分だったら、子どもたちが何をするのかが明確に伝えられて、イメージが活かせられるような教科書が求められていると判断しました。

その意味では、開隆堂出版さんの方が、現在も使っておりますが、使い勝手がよろしいのではないかと思いますので、開隆堂出版さんの方を推薦したいと思います。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございます。

では、野田委員、お願いします。

野 田 委 員　　図工についてですが、私の印象も、どちらも非常によくできているという印象から入って、板橋区授業スタンダードに当てはめていくに当たっても、どちらもめあてに沿った対応と振り返りといったところが非常にしっかり書かれていることが見て取れました。

やはり、このどちらかを選択していくに当たって、着眼していくところ、ポイントとしまして、私の方からは、現場での使いやすさはもちろん優先されるポイントでありまして、今、長沼委員の方からもお話しいただきましたが、ずっと教科書を見るようなことはあまりないという、単元と時間で、最初の方に、今日、今回の単元でこのようなことをやっていきますというようなところで主に教科書が使われていくのではないかというところであります。

どちらにおいても、使用する道具だとか、考え方とか、デジタルコンテンツの配置、そのようなものは同じように示されているので、どちらも使い勝手も考えられているのではないかというところですね。

私は、最終的には、開隆堂出版さんを推薦させていただきますが、そこの決定的なところのポイントとして見たところは、やはり図工という観点で、想像力を表現力に変えていくというところに着目していきました。

この表現力をどう教科書から引き出すかというところがポイントかなと私は思いまして、そう思わせたところは、どちらも非常に写真がきれいで、レイアウトが工夫されているというところでした。

そこで、この開隆堂出版さんを選択したというところのポイントというのは、

やはり発達段階に応じた表現力を引き出す方法が工夫されているのではないかというところが感じられまして、低学年の方では、大きく分けると、この掲載されている写真の区別というか、子どもたちの作品例というものと、あとはイメージを引き出すような一般的な写真みたいなものが使われているかと思うのですが、低学年の方はどちらも、子どもたちの作品が多く取り入れられて、実際、どのようなものを作っていこうとか、どのようなイメージでやっていくんだよとか、同じ考え、目線のところから導入されているというところは２社とも共通されていたかと思うのですけど、これが高学年に入っていきますと、開隆堂出版さんの方は比較的イメージを引き出すような写真、画像が取り入れられているというところですね。

やはり、あまりこのめあてに沿った作品をたくさん目にしてしまうと、それぞれの個性や想像力といったところが引き出しにくくなってしまうのではないかというところで、例ではなくて、イメージを引き出すことを促すようなところを、写真なり、画像を使ってうまく導いているのではないかなというところで、そのようなところが授業でも使いやすいのではないかと思います。

また、デジタルコンテンツにつきましても、行った先にどのような内容があるかということが書かれていますので、そのようなところでは、非常に見てみなきゃ分からないっていうのが、これまでもそうかもしれませんが、あったところを、比較的丁寧にどのようなことがＱＲコードの先にあるよというのが示されているというところも評価すべきポイントじゃないかというところで、私の方からは開隆堂出版さんを推薦させていただきます。

教　育　長　　ありがとうございます。

私の方ですが、本当にこの２社とも、構成は非常によく似ているというか、ほぼ一緒という感じがしています。見開き２ページで１つの題材を扱っていますし、学習のめあてや振り返り等が記載されています。

ただし、日本文教出版の方はめあてがあまりにも多過ぎて、どれを重点化するのかが分からないといったようなことはあるように思います。

それから、吹き出しで子どもたちの思いや感想や願いが表現されていて、非常にいい表情の写真が多いなというふうに思っています。

それから、タブレットを活用した教材が両社とも掲載されていますし、巻末に「用具や材料を知ろう」というページ、あるいは「材料と用具の引き出し」というようなページがあって、学年の発達段階に応じた、系統性ある内容、安全性に注目した内容になっているというところがあります。

それから、日本文教出版の方は、中学年から観賞教材や写真が非常に充実しているというような感想も持ちました。

ただ、私は図画工作の、先ほどどなたかがおっしゃっていたのですけど、ぱっと開いたときに、子どもたちの表情だとか、それから、吹き出しの部分については、開隆堂出版さんの方が一日の長があるかなという感じがしています。

低学年の場合は、非常に子どもの画像が大きく写っていますし、高学年になる

と、グループでの話題を豊かに載せたりしていて、生活感があふれているというところでは、開隆堂出版さんの方がいいかなというふうに、ダイナミックさも含めてあるのかなというふうに思っています。

どちらも本当にほとんど構成等が変わらない中で私の一番の決め手は、開いたときの子どもの表情や、それから、吹き出しの様子、そのようなものが非常にすてきだなと思ったのと、あとは、やはり想像力をかき立てるような作品をうまく開隆堂出版さんは入れているなということを感じました。

そういうわけで、私もこの開隆堂出版を図画工作は推していきたいというふうに思っています。

では、「図画工作」につきましては、開隆堂出版を仮採択することにご異議ございませんか

（異議なし）

教　育　長　　それでは、「図画工作」については開隆堂出版を仮採択することといたします。

では、次に、「家庭」の審議に入ります。指導室長、お願いします。

指 導 室 長　　「家庭」につきましては、２社でございます。東京書籍、開隆堂出版から採択をお願いいたします。

教　育　長　　それでは、審議に入ります。質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。

高野委員、どうぞ。

高 野 委 員　　家庭科の教科書なのですが、２社ともにすばらしくて、本当にほとんど差がないといったらおかしいのですが、比べてみて、一番、今回、迷いました。

東京書籍の場合は、「課題発見」「課題解決」「評価」「改善」、開隆堂出版では、「気づく・見つける」「わかる・できる」「生かす・深める」の３ステップで学習が系統立てて表記されています。

そして、実習で役立つ野菜の切り方や、布の縫い方など、技能に関わる内容が、巻末に写真やイラストで大きく、分かりやすく掲載されていて、それぞれ工夫を凝らしていて、児童が使いやすく、役立つページとなっています。

写真やイラストが豊富で、説明と合わせて、視覚的に捉え、理解を深めることができる内容になっています。

実習時の器具、用具の使い方、衛生面や安全についても十分配慮されていて、本当に２社の差がほとんどないというような印象です。

両社、大変すばらしい内容なのですが、まず、東京書籍は、野菜の切り方や布の縫い方など、巻末に写真つきでまとまっているのですが、その写真がとても大きくて、利き手別、実物大で手を乗せて見ることができるというのが東京書籍です。

そして、あと一番いいなと思ったのは、題材の終わりに、６ページから７ペー

ジのところに、「成長の記録」というのがあります。題材が終わると、ここに記入していきます。「次へのチャレンジ」というのを記入していくのですが、この学習の２年間を記入し終わると、ポートフォリオが完成するということです。

学習した内容を活かして家庭で挑戦したいことを「次へのチャレンジ」に記入して、生活の課題と実践につなげていく、それが６５ページ、「生活を変えるチャンス」、それから、あと１２１ページで、「生活を変えるチャンス」で、実際に、「私の師走大作戦」として、協力してお正月の準備をしてみようとか、また、１３４ページでは、「地域の人々に感謝の気持ちを伝えよう」「地域をよりよく大作戦」というふうに、ここの２年間で学んだことをこういう形で生活を変えるチャンスとしてつなげています。

また、巻頭には、「いつも確かめよう」、８ページから１１ページ、それから、ここには実習の前に手を洗うこととか、あと地震が起こったとき、制作の実習で気をつけたいことの安全についてが書かれています。

また、巻末の「いつも確かめよう」が１３６から１４５ページで習ったこと、例えば「いつも確かめよう」の写真がすごく大きいのですね。野菜を切っているのも実物大の大きさがあって、実際に手を乗せて確かめられたり、また、包丁で芽を取るときには、右利きの場合と、左利きの場合と、両方が載っていたり、あと布を縫う場面でも、実際の実物の大きさ、子どもの手の大きさと全く同じ写真が載っているので、本当に分かりやすいのだなというふうに思います。

前回、２社を比べたときに、開隆堂出版の方が細かい配慮がすごく多いという印象があったのですが、今回、東京書籍についても、そのような細かい配慮についてがすごく多く見られるようになって、２社のそのような配慮に対する差がほとんど見られなくなって、近づいているなというふうに思いました。

開隆堂出版については、家庭科における生活の見方・考え方の４つの視点を四つ葉のクローバーに示して、学習の中での見方・考え方を明確にして、学習のめあてと一緒に示しています。

ページの初めのところにそれが書いてあって、例えば３４ページのところでは、「できるよ家庭の仕事」という点では、この四つ葉のクローバーで「協力」「生活文化」「健康・快適・安全」「持続可能な社会」という観点が示され、そして、その下に学習のめあてが書かれています。

この学習のめあてについては、自分でそれができたかどうか、すぐにチェックできるようにチェック欄がついています。

学習内容については、下の方に、それに関連した豆知識が各ページに設定されているので、実習では、簡単なものから、繰り返し、スモールステップで積み上げられるように設定されています。

例えば１０ページの「はじめの一歩」というところでは、「できたかな」で、右のページ１５ページの上のところで、青菜をゆでるというところでは、青菜の洗い方とか、あと、たっぷりの湯でゆでられたか、硬さ、水気を絞る、長さをそろえて切るなど、工程に沿って細かくチェックして振り返ること、確認ができます。

開隆堂出版の方では、根本や葉のひだをよく洗うことができたかなとか、お芋をこすって洗うことができたかなとかという、そういう細かい点なのですが、そういう点がまだ開隆堂出版としてはいいのかなというふうに思いました。

あと、発展学習としては、３７ページに「レッツトライ」「生活の課題と実践」というのがあります。

それから、あとは、８０ページからは、家庭科の学習を活かして、「日々の生活から課題を見つける。ＳＤＧｓにつながる行動」ということで、このような活動で４つの実践例を示しています。

７８ページの、「できることから始めて持続可能な生活を作る」ということで、５年生の学習と環境の関わりを振り返って、ＳＤＧｓにつなげている活動をまとめています。

それと、やはり中学校の家庭科では東京書籍を使っています。その小・中のつながりについて、やはりどうなのかなと考えたときに、一応、巻末に、１３６、１３７で「２年間の学習を中学校につなげよう」というページがあるのですが、実際、同じ東京書籍の教科書を使った方が、その小・中のつながりはいいのかな、開隆堂出版についてはこのような、そこを埋めるページがあるというところで、２社、どちらもすばらしくて、なかなか決めかねているというところです。

教　育　長　　ありがとうございます。

それでは、青木委員、お願いします。

青 木 委 員　　こちらも２社というところで、どちらも、今、お話があったとおり、非常によくできている教科書で、迷うところはあったのですが、まず、両社、見開きというか、１ページ開いてみて、まず初めのところを見たときには、東京書籍さんの家庭科のこれからの流れという書き方がすごく細かくて、系統立てて書かれているという印象を受けて、「ああ、これはいいな」と思ったのですね。

開隆堂出版さんの方は、最初はその印象があるのですけど、裏ページをめくると、今度は、逆に、かなり細かい話が項目別に書かれていて、最初の印象と変わったというところはありました。

それで、読み進めていくと、実は中で扱っている内容については、例えば東京書籍さんですが、「話し合おう」「調べよう」「考えよう」「やってみよう」「深めよう」というような形で活動内容を系統立てて示されていて、学んだことをちゃんと活用して深めようというような流れがよく記載はされているかなとは思いました。

ただ、５年、６年の２年間で、この家庭科の中での範疇というのはどこまでというような議論もあろうかと思いますが、開隆堂出版さんは５学年、１１題材、６学年では９題材というのが設定されていて、いずれも東京書籍さんの題材より少し多く扱っている。ページ数はほとんど変わらないのですが、題材の扱いが多いというところがあります。

例えば、その中で、見やすいなと思ったのは、例えば東京書籍さんでいうと、

４番になります。「持続可能な社会への物やお金の使い方」、これが３６ページからあります。

これに対して、同じテーマのものが、開隆堂出版さんですと、８の項目、具体的には５８ページから続いているのですが、特に買い物の流れというようなものを、ある程度、生徒・児童に理解させるための分かりやすい書き方をしているのは開隆堂出版さんの方かなというふうに思ったのが、ここの部分でした。

それから、開隆堂出版さんの視点で見たときに、例えば７７ページとかに、「日本や世界のほっとタイム」ということで、地域のおやつを調べてみようといったような、食文化への理解のページなのですが、他の科目との関連づけで、日本の全国地図とも見比べながら、関連づけの学びを深められるというようなところ、そこに工夫が凝らされているかなということを感じました。

このような点から注目していくと、子どもたちの興味を引きつけたり、語彙を増やして知識を広げるといったようなところでは、「豆知識」といったようなものがページの下に、どちらもコメントとして欄外に書かれているのですが、これも開隆堂出版さんの「豆知識」というのが全ての単元で掲載されている点も工夫が凝らされているなというふうに思いました。

そして、巻末に近づくにつれて、その題材の数の違いのきわ立ちというのが見えてきて、例えば後ろの方に行ったときに、これは東京書籍さんも大分前の方にあったのですけども、「安全と衛生に気をつけて実習しよう」という項目、これが開隆堂出版さんの１４２、１４３ページに挙げてあるのですけど、かなり細かく、実習前から実習後にわたって掲載されている点。それから、その次の１４４ページ、「家庭や地域の安全・防災」、これもかなり細かく、地域に根差したというところまで情報を網羅している点、この辺がやはり非常に工夫が凝らされ、かつ充実した内容になっているなと感じたところでございます。

あとは、その後ろは、高野委員が言われたようなことと全く同じことを感じまして、私としては開隆堂出版さんがいいかなというふうに思いました。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。審議の途中ではありますが、間もなく５時となりますが、本件、「家庭」の審議が終わるまで議事を進行したいと存じますので、ご了承ください。

それでは、長沼委員お願いします。

長 沼 委 員　　家庭科も、２社ということで大変悩みました。報告します。

まず、現在本区で使っている開隆堂出版さんですが、こちら、高野委員が先ほど指摘なされたように、生活の見方、考え方、４つの視点というのが四つ葉のクローバーで表されています。「影響力」、「生活文化」、「健康・快適・安全」、そして、「持続可能な社会」ということで、この４つの視点がどの教材、どの単元ではこの視点ですよというのが明確に分かるように、単元の必ず最初の左下には出てくるというところが、先生方は使いやすいだろうと思います。

また、そのすぐ下には、「学習のめあて」というのがあって、チェック項目になっていますので、これについては、今度は子どもたちがこれを見ることによって、今日の授業では一体何を学ぶのか、どのようなことに気をつけて、この授業を受けて学んでいくのかということが明確になるようになっています。この点が非常に特徴的であり、非常に分かりやすい教科書に仕上がっているなというのが印象です。

あとは、色々な工夫がありまして、青木委員からもあったように、「豆知識」が下のところに必ずあること、それから、もちろん東京書籍さんの方も「メモ」という形でありますし、あとは、一番右下には関連する英単語が出てきて、どちらの社もそうなのですが、英語も学ぶことができるという、本当によく考えて工夫されて、どちらの会社さんも作られているなというのが率直な印象です。本当に頭が下がります。

全体的な情報量としては、やはり東京書籍さんの方が、家庭科に限らず、どの教科も非常に多いのですね。それをどう見るかなのですが、逆に言うと、開隆堂出版さんの方が非常にシンプルな作りになっていて、要点が分かりやすい仕上がりになっているということで、本当に甲乙つけがたいのですが、内容面では、今、青木委員がおっしゃったような形の分かりやすさ、それから、あとは開隆堂出版さんでは、「キャリアインタビュー」ということで、学習内容と関連した職業、様々なプロの方のお話が掲載されています。

東京書籍さんでは、「プロに聞く」というコーナーがあって、先生方の調査報告書によると、この数が、開隆堂出版さんは２０カ所、東京書籍さんは９カ所ということで、明らかに開隆堂出版さんの方が、「プロに聞く」という数は多めに掲載されているということがございます。

それから、あとは写真の見やすさの方は、どちらかというと東京書籍さんの方が美しい写真を使っているのかなという印象がありますし、本当に悩ましいところでありますが、中学への接続という点で、これは高野委員からご指摘あったように、開隆堂出版さんはページを割いて、「２年間の学習を中学校につなげよう」というページが、１３６ページ、１３７ページにあるということで、このようなことを活用することで小中一貫教育にも資することができるということで、私も青木委員と同じように、開隆堂出版さんを推したいと思います。

以上です。

教　育　長　　ありがとうございました。

それでは、野田委員、お願いします。

野 田 委 員　　私の方からコメントさせていただきます。

確かにこちらの家庭科におきましても、東京書籍、開隆堂出版と、どちらもこれまで委員の方々がお話しされているように、非常によくできていて、構成も同じような形になっているというところで、このどちらかを推薦するというところで難しく、悩んだところでありますが、そこで私が着目した観点は、日常生活に

おいて、日本人として成長するに必要な知識、技術を養うというところに着目していきました。

実生活を視野に入れて、どちらにも伝統というような言葉が使われていたりとかします。また、板橋区授業スタンダードに沿った流れでの構成、授業の進めやすさ、そのようなところも見ていきますと、私からも、推薦する教科書会社としては開隆堂出版になりました。

実際の使用に当たって、印象としては、どちらも本当に同じような作りで、写真等の活用もどちらも非常に分かりやすくなっています。

印象としては、東京書籍さんの方は、やはりコメントにありますように情報量が非常に多いというところと、あと、レイアウト的なところを見ていきますと、マニュアル的な印象を受けます。

開隆堂出版さんの方につきましては、実際に教本というか、印象としては、マークなどの使い方の見やすさ、学習への入りやすさ、教科書の使い方。

例えば、私は「みそ汁を作ってみよう」のページを比較させていただいて、東京書籍さんは４８、４９ページで、開隆堂出版さんの方が５２、５３ページになるのですよ。

本当に同じことが書いてあるのですが、教科書の使い方でいくと、各地に伝わるみそ料理についてというところも、すぐ近くに、２枚めくったところに開隆堂出版さんはあって、様々なところで、あと、また、旬の食材を使ったみそ汁というところもあって、同じような内容がこちらの東京書籍さんの方にもあるのですけど、こちらの方は少し後ろの方にあって、若干、内容は似ているのですが、紹介というような形になっているようなところが見受けられます。

あと、ミシンの使い方とか、そのようなところも、比較的マニュアル的な印象がありました。

実際に、やはりこの授業スタンダードの中で、考えていく、生活に生かすところというところで、それぞれ授業の中で意見を絞り出すというところを想像していきますと、私はこの開隆堂出版さんの方が実際に沿った授業に活用しやすいのではないかということで、こちらを推薦させていただきます。

教　育　長　　ありがとうございました。

私の方ですけども、意見が出そろっているところですけども、開隆堂出版さんについては、先ほど来、出ているように、学習のめあてが書かれていて、その上に４つのクローバーによって４つの資質・能力というのが出てきているわけですが、そこに振り返りをチェックするようにしてあるというところが、またこれ面白いところだなと思っております。

それから、私は、ご飯の炊き方なんかも見てみたのですけど、開隆堂出版さんが５０ページ、それから、東京書籍さんが４６ページですが、やはりこれを見ていると、丁寧で分かりやすいのが開隆堂出版さんかなという気がしました。

それから、５４ページ、５大栄養素の働きが具体的に書かれているというところも、開隆堂出版さんのよさなのかなというふうに思いました。

あと、快適な生活のための衣食住についての言及が、開隆堂出版さんには載っていました。

あと、４０ページ、ミシンの使い方。これも東京書籍さんと比較すると分かりやすいかな、丁寧に表されているかなということがありました。

先ほどお話があった、巻末に中学校との接続とか、あるいはキャリアインタビューが載っていて読み応えがある。ただし、この端末にあるというところが、途中途中に少し入れていくと面白かったかなというところもありますが、そのような気がしました。

あと、６年生の最後の単元に「持続可能な社会のために」があり、家庭科の総まとめとして、また、他教科との関連という意味で重要であるなと思いました。

少しつまらないことかもしれないのですけど、１１８ページに、献立とは何かという定義がきちんとされている、このような一つ一つの言葉を大事にするのが本区の読み解く力であるので、このようなことも言及しておきたいと思います。

それから、先ほどあったように、発展学習として、３７ページのように、生活の課題と実践があり、家庭科の学習を活かして日々の生活から課題を見つけ、実践につながる力を伸ばすようになっているというところが、開隆堂出版のよいところではないかというふうに思います。

東京書籍は、紙質が非常に、開隆堂出版と比べると手になじみやすいかなという気がしました。

８ページから、「いつも確かめよう」では、衛生、安全に気をつけて実習する際の注意事項が書かれています。学習のめあてと振り返りも書かれています。

私は、東京書籍ですごく大事だなと思ったのは、「朝食から健康な１日の生活を」ということで、８４ページで、サーモグラフィーを用いて体の温度を調べることによって朝食の重要性をまとめています。これは開隆堂出版にはない項目だなというふうに思っていますので、ここは東京書籍のいいところだなと思います。

それから、７２ページ、先ほども言ったように、ミシンの使い方がとても丁寧に表されています。毎学期、調理または裁縫の実技が構成されており、教材の配列や系統性、発展性が考慮されているなという気がしました。

このようなこと全てをまとめて、私としても開隆堂出版を推したいと思います。

それでは、「家庭」については開隆堂出版を仮採択することにご異議ございませんでしょうか。

（異議なし）

教　育　長　　それでは、「家庭」については、開隆堂出版を仮採択することとします。

議事運営の都合上、本日の審議は以上で終了といたします。

次回の教育委員会では、「保健」から審議いたします。残りの種目につきましては、８月３日木曜日に教育委員会を開催して審議いたします。

開催時間、開催場所ともに、本日と同じ、午前１０時から、教育支援センター研修室、この場所で行いたいと思います。

次回の審議につきましても、初めに、令和６年度区立小・中学校使用教科用図書採択に関する議案及び請願を審議し、終了後、その他の議案を審議及び報告事項を聴取する予定です。

それでは、以上をもちまして、本日の教育委員会を終了いたします。ありがとうございました。

午後　　５時　０４分　閉会